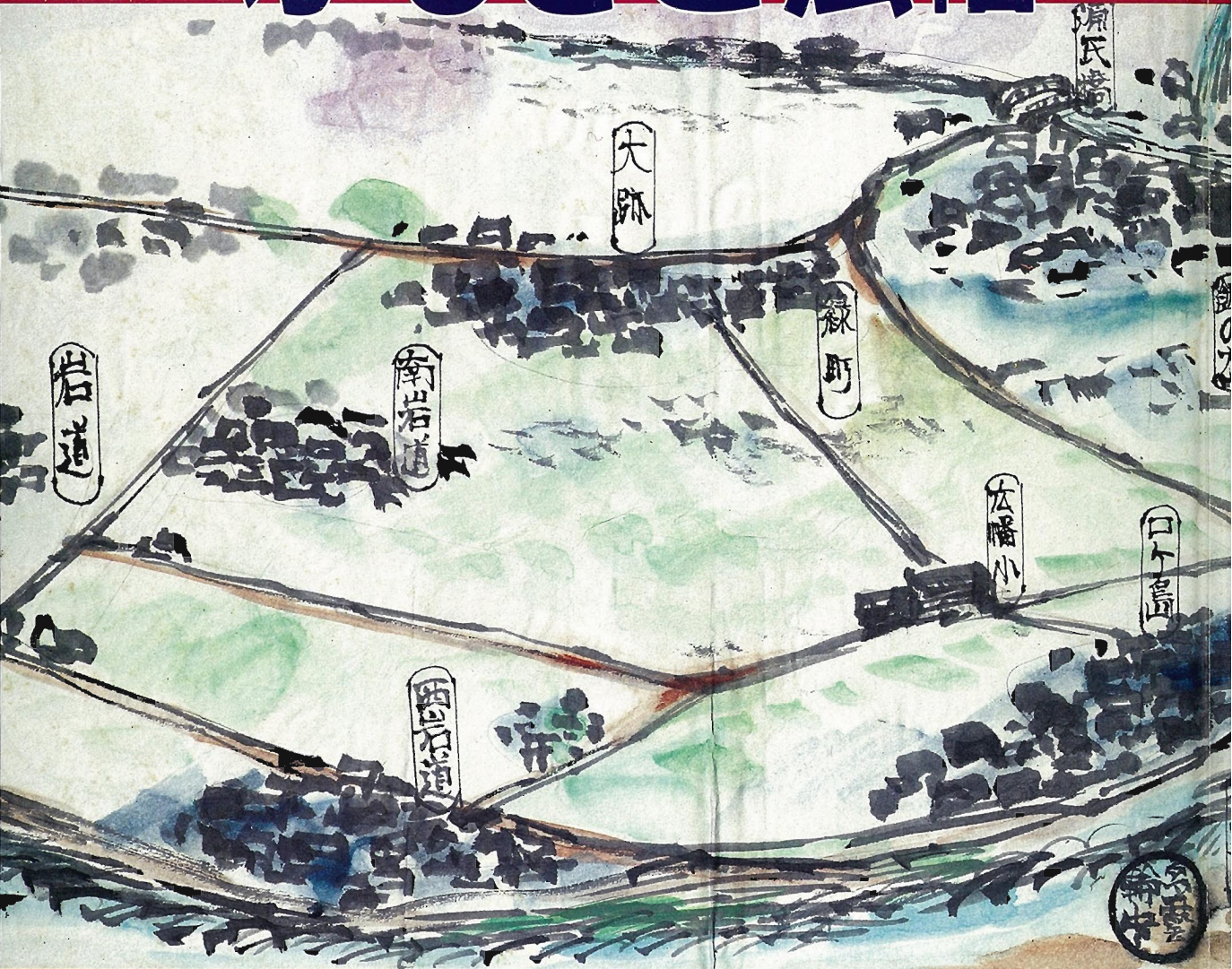


ひろ はた

ふるさと広幡



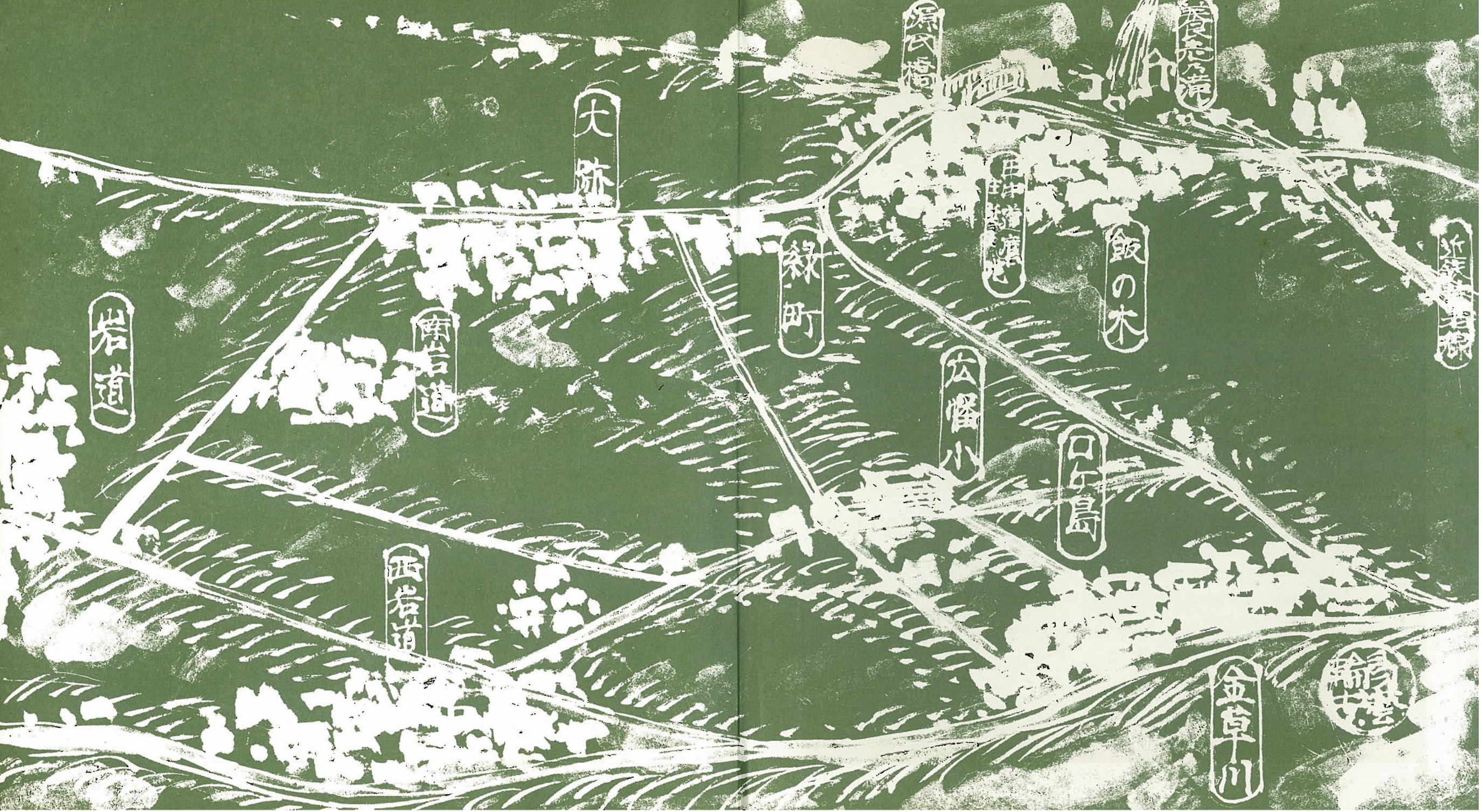
養老町立広幡小学校

ふるさと
広幡

広幡
小
学
校

昭和
三
十
年

金
子
川



近江老線

養老滝

源氏橋

飯の木

田中道廣

口ヶ島

大怪小

緑町

大跡

南岩道

西岩道

岩道

繪巻

金草川



源氏橋

源氏の大将義朝は、平氏との戦いにやぶれ、都落ちして、飯ノ木村の百姓清吉にたすけられた。義朝の縁者鷲巢源光は、源氏橋から柴舟の柴の下に義朝をかくして知多へと送っていった。

広幡小学校 編

ふるさと広幡

ひろ はた

村人たちの喜び悲しみ一〇〇〇年のものがたり

広幡のあゆみ 刊行委員会

(区長会 PTA 同窓会 長寿会)

このすばらしい広幡を

広幡小学校長 服部 真 六

ふるさと広幡の すべての人びとに この本をささげます。

広幡の大地にふんばって、先祖の志をついでいる人びとに。

広幡に生涯をうずめんと、各地からきてくださった人びとに。

広幡の郷土をなつかしみ、異郷でつよく生きている人びとに。

広幡で高齢をむかえられ、子や孫にはげましをのこす人びとに。

広幡の学校でまなびつつ、ふるさとを心に刻みゆく子らたちに。

広幡の未来をたくされて、将来ここで生まれ育つ子らたちに。

すばらしい 広幡一、〇〇〇年のこころを とどけます。

へ発刊を祝して

ふるさとかおの香りかおいっぱい

養老町教育長

小足幹雄

こんなすばらしい本が、広幡の皆さんの手で出来上がったことに、驚きと喜びをおぼえます。構成・内容・整理・編集・さし絵、等とくと数えきれない多くの方がたの熱意と努力、それにも増して、ふる里広幡への限りの愛情に強く心うたれます。この本には、広幡で生活し、そこから生まれたふる里の姿や、生きざまが、土くさく、あたたかくえがかれています。これこそ、ふる里だと感じられます。広幡の文化とも言えましょう。まさに、ふる里の香りいっぱいと言えます。この読物が、すばらしいふる里、広幡づくりに、大きな役割をはたすことを信じてうたがいません。

〈監修のことば〉

たのしい広幡の読みもの

養老町文化財審議会委員長

田中育次

『ふるさと広幡』は広幡千年の長いあゆみの中で多くの人びとが力を注いで村を支え、発展させて来たものがたりであります。

田中忠男氏が刊行委員長となり、多くの協力者の支援によって、歴史専攻の服部校長先生が、高い識見のもとに編集されました。

編集にあたっては、たのしい読みものとして、少年にも、若い人にも、おとしよりも、誰にもしたしんで読んでいただけるよう、わかりやすく、おもしろく書きあらわすことに苦心されています。どうか、このすばらしい読みものを一生手ばなすことなく、愛読して下さることを願います。

もくじ

巻頭のことば	このすばらしい	広幡を………	広幡小学校長・服部真六………	3
発刊を祝して	ふるさとの香り	いっぱい………	養老町教育長・小足幹雄………	4
監修のことば	たのしい広幡の読みもの………	養老町文化財審議会委員長・田中育次………		5
ふるさとの歌	広幡の歌・広幡音頭・広幡小学校校歌………			10

一の章 広幡のむかしむかしの 大むかし(古代・中世)

びようぶ山	広幡の大地が海の底から生まれてくる！	16
天つ神	広幡の神さま方の生き方を示す履歴書………	20
八幡さま	広幡五つの村に四つの八幡さんがあるのは………	26
オジロ	広幡の空をまわる大鷲がのこしたものの………	30
あしわら	広幡の閑閑地や熟田を帝へ捧げる貴族たち………	34
源氏橋	広幡に都落ちの大將がまいた源氏のたね………	42
九里半まわし	広幡をとおり九里半街道の入口・岩道………	46

大跡城の春	ひろはた	平和主義者、戸倉九右衛門のちえ	50
柔と剛	ひろはた	豪士丸毛六兵衛と徳永法印の友情	56
八中畷のたたかい	ひろはた	田中政清・関ヶ原西軍の落武者狩り	60
ムラのリーダー	ひろはた	村のドラマに必ず顔をだした庄屋名簿	64

二の章 広幡はむかしむかしの五つ村(近世・江戸)

村のひっこし	ひろはた	広幡が泥海に沈んだ！ 庄屋彦内さんの苦闘	66
入口の村	ひろはた	広幡をえがいた江戸時代三さつの本	76
飯ノ木輪中	ひろはた	広幡の人びとの汗の結晶、一万メートルの堤防	80
東岩道	ひろはた	広幡の一大論争 岩道に東はあったのか	84
村下の氏神さま	ひろはた	広幡の大水で、村上の氏神さまが村下に	88
大さきん	ひろはた	広幡をおそった三つの大さきん その苦しみ	92
龍の家	ひろはた	広幡に一大長者出現！ 学者知足斎のみたもの	96
白茂七	ひろはた	広幡がうんだ国学者 田中道磨の生涯	100
はだか村	ひろはた	広幡の三つの村を犠牲にした代官の治水政策	106
五人の男	ひろはた	広幡の悲喜こもごもをえがく 実物像	110

耕月庵……………広幡の俳人、蕉門十四世の六之丞さんの一生……………116

雪の朝……………広幡の農民がうったえた高田そどうの一夜……………120

百年前と後の広幡地図……………広幡も百年で村が変わる 心もかわる……………126

三の章 三の章 広幡村 今むかしのもの ものがたり (明治・大正)

ふたつの学校……………広幡にはじめて学校が生まれた！ その産声……………128

M・ハ・四……………広幡で死傷者を二十四名もだした濃尾大震災！……………132

西美濃大洪水……………広幡をすっかり泥にうめた津屋・金草の氾濫……………136

あばれ大蛇……………広幡の大水をつげる金草川の大蛇伝説……………140

ハ〇年前……………広幡の古老がかたる風物詩・明治の世の中……………146

ロケ島の口ばなし……………広幡の口から口へ ロケ島の人情ばなし五話……………152

送りおおかみ……………広幡まで西山から 狼に送られたこわーい話……………158

へっこき村長さん……………広幡のへっこき名人のゆかいな人生……………162

おかま池……………広幡の幻の池につたわる三つのこわーい話……………166

広幡こぼれ話……………広幡の心いっぱい ドッキリばなし……………174

厄おとし……………広幡の力もち久さが四十二の厄年にやったこと……………180

声なき広幡の若者たち……………海から陸から永久の平和まもれ　とうったえる…188

四の章　広幡の　未来をきづく　わたしたち（現代・昭和）

はらだいこ……………	広幡の今はなつかし　芋名月と豆名月の子ども達	190
砂だぬき……………	広幡のいたずらたぬきに一本とられた六助さん	194
化けむすめ……………	広幡ぎつねのばかり大会　それがんばれ	198
天筆つあん……………	広幡の一年のしあわせを祈る　どんどまつり	206
実盛さん……………	広幡の夜が燃える！　夏の風物詩・虫おくり	212
泥海の村……………	広幡を湖底にしずめた集中豪雨と伊勢湾台風	218
変身！　広幡……………	広幡が生まれかわった！　農地解放と土地改良	224
請願書……………	広幡小は新築独立！　議会も町長も方針変更	228
いのちの色……………	広幡の名物になった　みどり町の秋まつり	236
ふるさとの山……………	広幡に新市街誕生！　南岩道のふるさとしらべ	240
広幡小・百十四年史……………	広幡のこころを育てた　学校経営のあゆみ	244
ふるさと広幡千年史……………	広幡の喜びや悲しみをつづる四十万日	246
刊行のことは　広幡のぬくもりを味わう本……………	刊行委員長・田中忠男	248

広幡の歌

養老山下 風きよく

千里みどりの 花ぞのに

つどう 七つの 愛のさと

春の広幡 うるわし広幡

広幡 広幡 われらの広幡

金草 津屋の 川かぜに

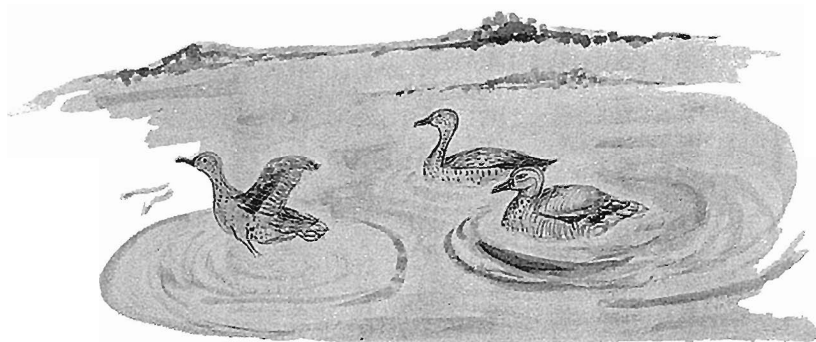
心あらへば 身もきよし

ほたる とびかう 水のさと

夏の広幡 きぼうの広幡

広幡 広幡 われらの広幡

作詩曲
江口夜詩



垂穂たれほの波なみの よろこびに

国くにも わが家やも さかえゆく

腕うでに 汗あせちる 稲いねのさと

秋あきの広幡ひろはた みのりの広幡ひろはた

広幡ひろはた 広幡ひろはた われらの広幡ひろはた

伊吹嶺いぶきねおろし つよくとも

おどる血潮ちしおの このうでに

村むらは はたらく 意気いきのさと

冬ふゆの広幡ひろはた のびゆく広幡ひろはた

広幡ひろはた 広幡ひろはた われらの広幡ひろはた



江口夜詩（郷土がうんだ一世を風靡した作曲家・一九〇三―一九七九 養老郡上石津町時出身 上野音楽学校卒）

広幡音頭 ひろはたおんど

作詩曲 さしききょく
江口夜詩 えぐちよし

ハアー

春 はる はなのはな チヨイトれんげそう
花 はな のなかからネ あかだすき

ソレ 広幡音頭 ひろはたおんど で ひとおどり

ヤーレ ソレソレ シャンとおどれ

ハアー

月 つき もでてみる チヨイトひろはたの
かわいいあの娘 こ のネ ぼんおどり

ソレ 広幡音頭 ひろはたおんど で ひとおどり

ヤーレ ソレソレ シャンとおどれ



ハ
ア
ー

だれに見^みしよとて、チヨイトうすげしう

あきの祭^{まつり}のネ むらむすめ

ソレ 広幡音頭^{ひろはたおんど}で ひとおどり

ヤーレ ソレソレ シャンとおどれ

ハ
ア
ー

山^{やま}ははつゆき チヨイトわたぼうし

やがてまた来る^くネ はつひので

ソレ 広幡音頭^{ひろはたおんど}で ひとおどり

ヤーレ ソレソレ シャンとおどれ



江口夜詩（昭和六年より四十年間 ヒット曲つづく・十九の春・緑の牧場・養老音頭・ひょうたんフギなど）

ひろはたしょうがつこうか 広幡小学校校歌

あさひ
 朝日
 かがやく
 伊吹山

たか
 高き
 すがたを
 あおぎつつ

こころ
 心を
 なおく
 身をたけく

ひろはた
 のびゆくわれら
 広幡の子ら

たき
 滝に
 なをえし
 養老の

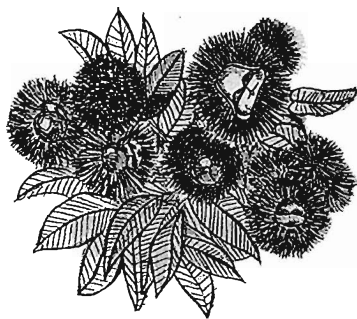
きよ
 清き
 みどりの
 風うけて

おや
 み祖の
 あとを
 のちの世に

ひろはた
 つぎゆくわれら
 広幡の子ら

各務虎雄（俳人・岐阜女子短大学長）

内本実（作曲家・大垣女子短大学長）



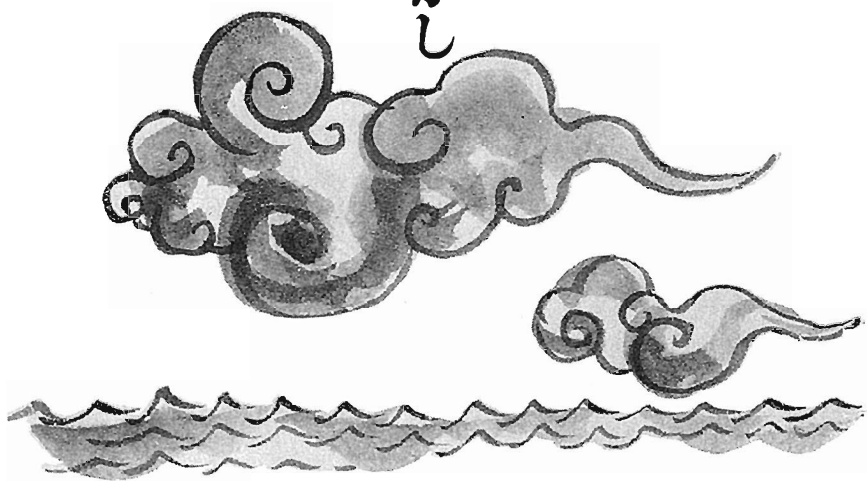
き
 作詩
 各務
 虎雄
 実

き
 作曲
 内本
 実

一^{いち}の章^{しょう}

ひろはた
広幡のむかしむかしの^{おお}大むかし

(^{こだい}古代・^{ちゅうせい}中世)



へ^{ひろはた}広幡の大地^{だいち}が 海^{うみ}の底^{そこ}からうまれてくる！

びょうぶ山^{やま}

むかし、むかしの、大^{おお}むかし。

もうひとつ、むかしの、そのむかし。

はるか、かなたの、大^{おお}むかし。三^{さん}お^{ねん}く^{ねん}年の大^{おお}むかし。

広^{ひろはた}幡^{だいち}の大地^{だいち}は、そして西^{にし}の養^{よう}老^{ろう}の山^{やま}やまは、ずーんとふかい海^{うみ}の底^{そこ}であつたと。ゆらゆらとゆらめく光^{ひかり}のくらしい海^{うみ}の底^{そこ}に、しずかに、砂^{すな}がたまり、粘^{ねん}土^どがたまっていく。米^{こめ}つぶがふわふわというているようなフズリナや、ユリの花^{はな}がさいたようなウミユリなどのとうぶつの死^しんだからが、雪^{ゆき}のように海^{うみ}の底^{そこ}にたまっていく。

なん千^{せん}メートル なん百^{ひゃく}メートルたまっていく。こうして、いま、





ひろはた 広幡をかざる屏風となつてゐる養
ろうやま 老の山の地そうや岩に、ふかい海
その 底の歴史がたたみこまれている。
そして二おく年まえの大むかし。
うみ 海のそこが、しだいしだいにも
うみ りあがり、やがて海のうえに顔を
うみ だし陸が生まれ、大地となつた。
やま 山が生まれ、川がうまれた。
イチョウやヤナギや、カエデや
しごぶ シダなどの植物が生まれ、キョウ
ちじょう リュウやトリがでてきて、地上は
にぎやかになつてきた。

かざん あちこちで、火山がふきでてい

る。このとき、地下^{ちか}からふきあげたマグマが、地表^{ちひよ}ちかく、あるいはふかいところで、ひえてかたまり、岩^{いわ}となった。こういう岩^{いわ}が、養老^{ようろう}の山^{やま}にもあるという。

そして、まだまだ、一おく年^{ねん}まえの大^{おお}むかし。

大地^{だいち}のふかいその中^{なか}で、がたがた、ごとごと大^{おお}ゆれ、大^{おお}ゆれ。

大地^{だいち}にさけめができ、大^{おお}きなひびがはいり、その片^{かた}方^{ほう}の大地^{だいち}が、ざざざとすべりだし、やがてふかくおちこんだ。そこへ海^{うみ}の水^{みず}がはいりこみ、広^{ひろ}幡^{はた}はもちろん、濃^{のう}尾^び平^{へい}野^やは海^{うみ}の底^{そこ}。

このとき、がんとのこつてできたのが養老^{ようろう}山^{やま}。南宮^{なんぐう}山^{やま}やら鈴鹿^{すずか}山^{やま}。まわりはとつぷり海^{うみ}の水^{みず}。みどりの島^{しま}となっていた。

養老^{ようろう}山^{やま}のてっぺんが、なだらかな平^{たいち}になってひろいのは、むかしむかしの大地^{だいち}あと。養老^{ようろう}山^{やま}の東^{ひがし}がわ、きゆうな坂^{さか}でくだっているのは大地^{だいち}がすべりだし、おちこんでいった断^{だん}そうあと。その先^{さき}つぽが

三角面にきれているのは、断そうがさいごにけずったかけのあと。

広幡からながめると、そのすべてを屏風の山がかたっている。

五千万年そのむかし。まだまだ、ふしぎな海の底。しずかにしず

かにもりあがり、海の水がひいてゆき、養老、南宮、鈴鹿の島じま、

ひとつづきの陸となる。

一千万年そのむかし、木曾、長良、揖斐、それに牧田川がうまれ

土や砂をはこびだす。濃尾平野がしだいしだいにきづかれる。

百万年のむかしより、雨がふり、水がながれ、山をけずり、谷を

つくる。養老山にふかくきざまれた十一の谷。そして、そのけずつ

た土砂を、ふもとにつみあげてできた養老扇状地。広幡の大地。

そして、ようやくこの世に人がうまれてきたのは、五千万年まえ

のこと。石をどうぐにして一万年。広幡の歴史は、ほぼ千年という。

ながーいながい、ふしぎな、ふるさと大地のものがたり。

へ広幡の神さま方の生き方を示す履歴書

天つ神



いま、広幡のお宮にまつられている神がみをしようかいしよう。

どの神さまも、むかしむかしの大むかし、日本ではじめて書かれたものがたり『古事記』にてくる神話の主人公である。

そのはじめは、日の本の国がまだ生まれるまえに、天つ神としてかつやくした神さまたちの話である。広幡の神さまたちが、『古事記』の中で、どんなに生きてみえるか、あじわってみよう。

天つ国の女王さまで 天をあかるくてらす女神、アマテラスオオミカミ（天照大神）のところへ、あばれんぼうの弟のスサノオノミ



コト（素戔鳴尊）がやってきた。

「なにしにきたの。」

「姉さんにあいたくてさ。」

「ここであばれちゃ、いやよ。」

「うん。決して悪くないから。」

「じゃ、ここでちかって！」

「うん、わかった。」

このちかいとして 姉のオオミ

カミは 弟のスサノオがさしだす

つるぎ（剣）を 口にふくんでか

んだ。すると、かわいい女の子が

生まれた。イチキシマヒメノミコ

ト（市杵島姫命）である。

こうしてスサノオノミコトは、天^{あま}つ国^{くに}にいることをゆるされたがやがて、いたずらの虫^{むし}がうごきだした。はじめは、田^たのあぜをこわしたりなどしていたが、ついには、馬^{うま}をころして、織^{おり}姫^{ひめ}がはたおりをしている上^{うへ}へおとすという、大^{たい}へんな悪^{わる}さをするようになった。日^ひごろ、やさしいオオミカミは、なげき、かなしみ、おこつてしまった。そして天^{あま}の岩^{いわ}屋^やのなかへはいり、岩^{いわ}の扉^とをしめてしまった。すると世^よの中^{なか}は、まっくらになり、わるものたちがあばれだした。たくさん神^{かみ}さまたちは、頭^{あたま}をよせあつてそうだんした。そして岩^{いわ}戸^とのまえで、火^ひをあかあかとたき、若^{わか}くうつくしい女神^{めがみ}、アメノウズメノミコトが、にこにこおどりだした。オオミカミは、外^{そと}があまりにぎやかなので、ふしぎにおもつて、中^{なか}から扉^とをすこしあけてみた。するとその扉^とのそばにいたアメノタジカラオノミコト（天手力男命）が、早^{はや}くその扉^とをあけ、オオミカミを外^{そと}へおつれした。

世界はまた、もとどおり明るくなった。

つっぱり神さま、スサノオノミコトは、この天の岩屋事件のあと手足の爪をはがれて、根の国へながされた。そしてイズモの国で、八つの頭をもつヤマタノオロチという大蛇をたいじして、里人をたすけたり、シラギの国へわたり、船材の木をもちかえり、山に植林をさせたり、食物をまもったりして、いい神さまになられたという。

この話を通して、私たちは古代人の姿をしのぶことができる。

口ケ島の大神宮と、飯ノ木の神明さまは、アマテラスオオミカミをまつている。大跡の六社神社の中の熊野那智神社のケツミコノカミ（家都御子神）は、食をまもる神としてのスサノオノミコトの別名である。また、六社神社の境内に素戔嗚神社がまつられているが、神さまはスサノオノミコトである。

そして スサノオノミコトがアマテラスオオミカミにちかわれた
ときに生まれたイチキシマヒメノミコトは、水みづを守る神かみとして、西
岩道いわみちと口ケ島くちがしまの八幡神社はちまんじんしゃの境内けいだいにまつてある。巖島神社いづしまじんしゃである。

天あまの岩屋事件いわやしけんで、アマテラスオオミカミがちよつと外そとをみようとな
されたとき、さつと早く扉はをあけてオオミカミのおでましをねがつ
たのは、岩道いわみちの早扉神社はやとしんしゃのアメノタジカラオノミコト（天手力男命）
である。その名なのとおり、天あまつ国くにで、手ての力ちからのつよい男おとこの神かみさまで
あった。

さて大跡おおあとの六社神社ろくしゃじんしゃには まだ五つの神社じんしゃがのこっている。
その一の宮みやは、加茂神社かもじんしゃである。神かみさまはワケイカズチノミコト
（別雷命）。すべてのものをこわしてしまふ強い雷つよ かみなりさんである。

この雷神らいじんのおとうさんは ホノイカズチノミコト（火雷命）で、
おかあさんは、タテツノミノミコト（建角身命）のむすめであるタ

マヨリヒメ（玉依姫）である。ピカピカと火をだし、ツノをタテ、ゴロゴロと玉をころがす雷さん一家である。

二の宮は、春日神社のタケミカズチノミコト（武甕槌命）である。この神さまは、かしこく勇氣があり、アマテラスオオミカミのいっつけて イズモの国へくだり、オオクニヌシノミコトとはなしあって、その国をたたかわずして、さしださせたといわれる。

三の宮は、諏訪神社のタテミナカタノミコト（建御名方命）。

オオクニヌシノミコトの第二王子で、いちはやくイズモから、長野の諏訪湖へきて、この地方をひらいた。（飯ノ木にも諏訪社あり）

四の宮は、白髪神社で、サルタヒコノミコト（猿田彦命）である。

アマテラスオオミカミのまごのニギノミコトが、この国をおさめるため天からくだってきたとき、出迎えて道案内をした。体が大きく、白髪をはやし、鼻がたかく、目をひからせた神さまであった。

へ 八幡五つの村に四つの八幡さまがあるのは……

八幡さま

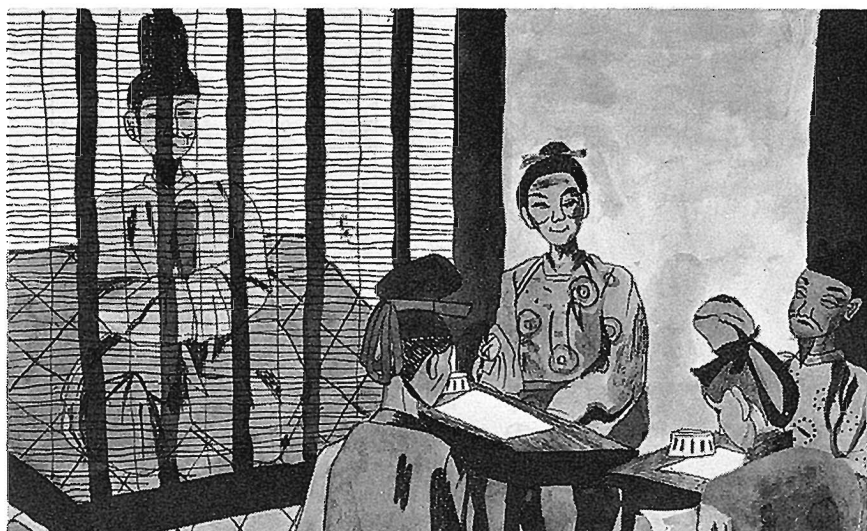
むかしから、八幡の五つの村に、五つのお宮があり、それぞれの村をまもってきた。鎮守の神であり、氏神さまである。

そのいずれも、いつたてられたのか、はつきりしない。それほど古いのである。

そしてその五つの社の中の三つまでが、八幡神社である。岩道、口ヶ島、飯ノ木のお宮である。いや、大跡の六社神社は六つの神社があつまっているが、そのなかのひとつは八幡神社である。だから五つの氏神さまのうち、四つまでが八幡さまだといえる。

じつは日本中に、八万の神社があるが、その半分の四万は八幡さ





さまである。そして養老町ようろうちやうだけでも二十九社しやもあるのだから、広幡ひろはただけに、八幡さまはちまんがおおいのではない。

さて、口ケ島くちがしまと大跡おおあとの八幡さまはちまんにおまつりしてあるのは、応神天皇おうじんてん皇のうだけである。しかし、飯ノ木はんのきの八幡さまはちまんには、応神天皇おうじんてんのうと、そのおとうさんである仲哀天皇ちゆうあいてんのうと、おあさんである神功皇后じんぐうこうごうがおまつりしてある。また、西岩道にしいわみちの八幡はちまんさまには、応神天皇おうじんてんのうとそのおよめさんである比咩神ひめのかみと、おかあさん

の神功皇后じんぐうこうしゅうがおまつりしてある。

このように八幡はちまんさまの中心ちゅうしんは、応神天皇おうじんてんのうなのである。なぜこの天皇てんだけが、氏神うじがみとして、日本中にっぽんじゅうにこんなまつられたのだろうか。

じつは、むかしむかしの大むかし、『古事記こじき』にかかれた物語ものがたり。

あのクマソせいばつや、エゾたいじで有名なヤマトタケルノミコトのお子こさんが、仲哀天皇ちゅうあいてんのうである。そして仲哀天皇ちゅうあいてんのうのお子こさんが、応神天皇おうじんてんのうである。じつは仲哀天皇ちゅうあいてんのうも、おとうさんのヤマトタケルノミコトと同じおなように、その一生いっしやうをクマソせいばつなどにうちこんで途中で亡なくなっている。そしてそのお后きさきの神宮皇后じんぐうこうしゅうは、仲哀天皇ちゅうあいてんのうが亡なくなってからも、九州きゅうしゅうだけでなく、朝鮮ちようせんのシラギの国くにまでせめ、したがえている。

こうしてようやく応神天皇おうじんてんのうのとき、ヤマトの天皇てんのうを中心ちゅうしんとする倭わの国くにがひとつにまとまったのである。それまでの天皇てんのうは、ヤマトの

力を外へ外へとのばしていったが、応神天皇はそのひろくなった国
のなかをおさめ、文化の花をさかせた。朝鮮のクダラの国から、漢
字や学問を、シラギの国から、おりもの、かじや、ふねづくりなど
の技術を、中国から、蚕をかい、糸をつむぐ方法などをとり入れた。
こうして、倭の国の土台ができあがり、この天皇が統一国家とし
てのいちばんの先祖となったのである。なんといってもヤマトにと
って、九州はだいじである。だから九州宇佐に、応神天皇をまつる
さいしよの八幡宮がうまれ、ヤマトと九州の心をむすんだ。

天皇家の先祖は、伊勢神宮にまつるアマテラスオオミカミである。
だからお伊勢さんと八幡さんとは、二つの先祖といわれ、日本中
伊勢まいりがさかなように、八幡さまがひろがったのである。

広幡という地名も、村じゅうが広く八幡さまの氏子であるとい
うことから、明治三十年につけられたといわれている。

へ広幡ひろはたの空そらをまわる大鷲おおわしがのこしたものへ

オジロ

むかしむかし、とんとむかしのこと。

まいとし春はるになると、養老ようろうの山やまおくから 一羽いちわの鷲わしがふたつのつ

ばさをぴーんとはって、さつとまいおりてきた。山やまからふきおろす

春風はるかぜにのってくるのである。そして、千年杉せんねんすぎのてっぺんにとまる。

天てんをついてならんでいる三本杉ぼんすぎである。そのはしつこの、いちばん

背せのたかいこずえが、鷲わしのおもみでゆれている。この鷲わしが、春はるをも

つてくる木きだから、このあたりを春ノ木郷はるのきごうといった。

春ノ木郷はるのきごうは、のちの飯ノ木村はんのきむらである。いや、もともとは、鷲わしがハ

ネを休めるハネの木郷きごうであつたという人ひともいる。





「おう オジロがきたぞう。」千年
杉にとまったぞう。」

わっぱの声に、おじいやおとう
も、くわを休めてふりむいた。お
かあも、うちの中からとびだした。
「ほんに、ひさしぶりのオジロじ
やのう。」

「オジロの元氣なすがたを見ると
なぜか、ほっとするよのう。」

いつのまにか、こずえのゆれも
おさまり、つばさを休めた大きな
鷺は、まるで彫像のようにそよと
もうごかず、下界をみおろしてい

る。いつもロバシをむけている方を、ロガシマと呼ぶようになった。一とき以上もじっとしているその静かなおちついた姿には、王者のかんろくさえあった。その千年杉のてっぺん近くには、鷲の巢もあって、さながらオジロの王宮でもあった。

やがて、オジロは大きなはばたきを二つ三つすると、ふわりと天空へまいあがった。そして、この多芸荘いったいをぐるりと旋回する。里の人びとは、それをみあげて息をのむ。体ぜんたいが、やや黒っぽい濃い茶色であるが、尾だけはまっ白である。

里の人たちが、親しみをこめてオジロとよぶのは、この尾羽の白さが、心のそこにあざやかにのこったからであろう。ふとくて、先が大きくまがっているくちばしと、あしのつめ、そしてするどいふたつの目が、オジロのいかにも勇ましく強いことをしめしている。

春ノ木のひがしに、まだ開かれていないアシばらがある。アシが

そよそよと風^{かぜ}にゆれている。地下水^{ちかすい}が地表^{ちひょう}にちかく、いつも、しめ
った土地^{とち}である。だが一部^{いちぶ}にはかたい野^のっぱらもある。だから、サ
ギやカモから、キジやハト、そしてウサギやイタチから、キツネや
オオカミまでがすがたをみせる自然^{しぜん}の楽園^{らくえん}であつた。

そこがオジロのえさばでもあつた。驚^{おどろ}は、こういう鳥^{とり}やけものを
天空^{てんくう}よりねらつて、さつとすべりおりる。ねらつたものははずさな
い。あつというまに、えものをわしづかみにしてしまふ。里^{さと}びとた
ちは、ときにこの野^のっぱらで驚^{おどろ}の大きな足跡^{あしあと}を見た。大跡^{おおあと}である。

養老寺縁起^{ようろうじえんぎ}には、ここへ驚^{おどろ}がとんできたこと、その巣^すには卵^{たまご}があ
つたこと、赤坂^{あかさか}の大岩^{おおいわ}へとび(岩道^{いわみち})、加賀^{かが}の白山^{はくせん}へ向^むかつたところ。
そのオジロが、いつか白山^{はくせん}へかえつたきり、ついにもどつてこな
かつた。里^{さと}びとたちは、その雄姿^{ゆうし}をおもひ長く語^{かた}りついだ。そこか
ら春^{はる}ノ木^{きの} 驚巢^{おどろのす} 大跡^{おおあと} 口ヶ島^{くちがしま} 岩道^{いわみち}などの地名^{ちめい}がのこつたという。

へ広幡ひろはたの空閑地くうかんちや熟田じゅくでんを帝みかどへ捧ささげる貴族きぞくたちへ

あしわら

むかしむかしのそのまたむかし。

京きょうのみやこに、美濃国みののくにからひとりの役人やくにんがやってきた。大きなへいにかこまれた藤原良相ふじわらよしすけのやしきである。

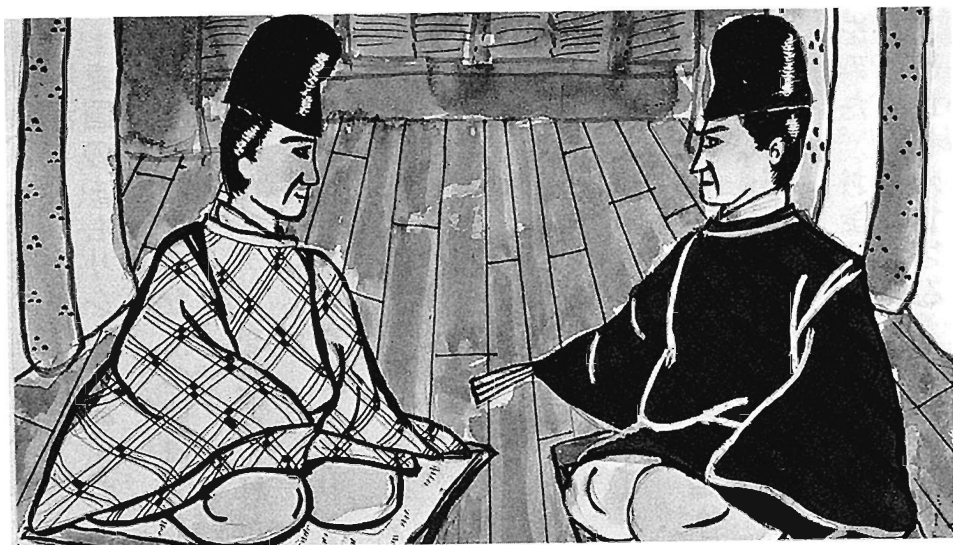
「おお、とおいところ、よくきた。まっていたぞ。

十二月しふすまろ磨まろ。不破ふわのまもり、いつも、たいぎであるよのう。」

「はい、右大臣うだいじんさま。いつもお目をめをかけてくだされて、うれしくぞんじます。」

わかわかしい宮勝みやまさ十二月しふすまろ磨まろは、ときの右大臣うだいじんとしつかとむきあつて話はなのできることに、大きなよろこびを感じかんじていた。十二月しふすまろ磨まろのよ





うな一地方いちほうのこうぞくが、右大臣うだいじんから こんなにやさしいことばでむかえられるのは、よほどのことである。

もちろん十二月しわすまろ磨ころには、それがなにを意味いするかわかっている。

今日きょうは、それなりのはらをきめてきたのである。

「右大臣うだいじんさま、あたたかいおよびだしのこと、まことに、ありがとうございます。」

「うん。十二月しわすまろ磨ころよ。そなたはいま、不破ふわの権少領ごんのしりょうであつたの。」

「はい、美濃国の国府と、不破関をかかえる不破の郡をあずかつて東国のまもりをかためております。」

「そうそう。そなたの曾祖父である宮勝木実どの、壬申の乱のとき大きなたてをたてられた。そこでときの帝は、多芸郡をふたつにわけ、不破郡をつくり、それをあたえて、木実どのを不破の大領となされた。そうであつたの。」

「はい、右大臣さまのおっしゃるとおりでございます。わたしが先に宮づかいで、右大臣さまのもとでつとめさせていただけたのも曾祖父、木実のおかげでございました。」

「いまに そなたも、きっと曾祖父以上の人物になるであらうよ。」
右大臣、藤原良相は、そこまでいって、じつと十二月磨のひとみをみた。おまえのことは、すべてわかつておる。先ぎのくらのことも考えておる。だから……と、いうのである。

十二月しわすまろ暦れきは、いまこそと、口くちをきつた。

「右大臣うだいじんさま、わたしは多芸郡たぎごほに六十町ちようの空閑地くうかんちをもっておりまして、それをさしあげたいと、おもつてまいりました。」

「なに、六十町ちよう歩ふか。さすが十二月しわすまろ暦れきだ。ものわかりがいいのう。

それはわたしが、もらうよりも、兄あにの太政大臣たじやうだいじんから、帝みかどの貞観寺じやうがんじへきふしてもらおうのう。わたしも、昨年さくねん、多芸莊たぎのしやうの八十町ちよう歩ふを

貞観寺じやうがんじへさしあげたばかりでな。

帝みかどもたいへんよろこんでくださった。兄あにもはながたこうてな。

こんど、おまえを兄あににあわせ、先さきのことをたのんでおこう。」

「は、はい、ありがたい、しあわせてございます。」

こうして下したつば貴族きぞくである不破ふわの宮勝みやまさ十二月しわすまろ暦れきは、多芸郡たぎごほのあれはてた土地とち六十ヘクタールとひきかえに、天下てんかの太政大臣たじやうだいじん 藤原良房ふじわらよしふさにちかづけるようになり、大きな出世しゅっせがやくそくされた、十二月しわす

磨^{まろ}は、美濃^{みの}へかえるみちすがら、将来^{しょうらい}へのゆめがふくらみ、ふわふわと天^{てん}にもものぼるきもちで、足^{あし}が地^ちにかなかった。

このことは つぎのような文書^{もんじょ}になって、いまにのこっている。

「貞観^{じょうがん}八年^{ねん}の正月^{しょうがつ}二十日^{はつか} 不破^{ふわ}郡^{ぐん}の権少領^{ごんしょうりょう} 宮勝^{みやまき}十二月^{しふ}磨^{まろ}は、天皇^{てんのう}のおことばによつて、美濃^{みの}国^{のくに}多芸^{たぎ}郡^{ぐん}の空閑地^{くうかんち}、六十町^{ちようぶ}歩^ふを貞観^{じょうがん}寺^じへ寄進^{きしん}した。」

(『仁和寺文書』『三代実録』)

貞観^{じょうかん}八年^{ねん}は、八六六年^{ねん}であり、いまから千百年^{せんひゃくねん}ほどまえである。そしてこの多芸^{たぎ}郡^{ぐん}の空閑地^{くうかんち}というのが、いまのロケ島^{ろけがしま}のあたりであったといわれている。このあたりは、牧田川^{まきたがわ}や金草川^{かなくさがわ}のたびかさなるはんらんで、土地^{とち}をひらくことができず、みわたすかぎり沼地^{ぬまち}のようなあしわらであった。そういうところを空閑地^{くうかんち}といった。

しかし、貞観寺は、太政大臣、藤原良房のまごにあたる清和天皇の寺である。こういう力のある寺は、全国から八百町歩という土地をあつめ、そこからねんぐがあつまってくるようになっていた。

右大臣になつた藤原良相が、そのお礼にと貞観寺へ寄進した八十町歩の多芸荘の中には、飯ノ木や大跡のふきんもはいつていた。とりわけ山に近い飯ノ木のあたりは、ばやくからひらけていた熟田であつた。

おそらく、奈良のみやこができるずっとまえ、大化の改新で条理制の区画整理をしたときに、すでにうつくしい水田になつていたにちがいない。この日本ではじめておこなつた耕地整理は、たてよこ六百三十四メートルのひろさを一区画として、その中をあぜで、また三十六にちいさくくぎつて、水田の形をととのえたのである。

いま となりの鷺巣に三反田、四反田、つづいて飯ノ木に五反田

という地名ちめいがのこっている。またこの多芸荘たぎのしやうではないが、安久荘やすひさのしやうとよばれた西岩道にしいわみちにも、六反長たんぢやうとよばれるところがある。これらは、いまから千三百年せんびゃくねんまえの条理制じょうりせいのなごりである。

右大臣うだいじんの寄進きしんした 八十町歩ちやうふのうちには、多芸荘たぎのしやうで、こういう熟田じゆくでんが十二町歩じふにちやうふふくんでいると、そのうちわけもきろくされている。

また、こういう力ちからのある貞観寺じやうかんじのような莊園しやうえんでは、十二月じふにがつ磨まろがさしだしたようなあしわらでも、川かわのつつみをなおし、土地とちをひらき、水をひいて、うつくしい水田すいでんにかえる力ちからをもっていた。

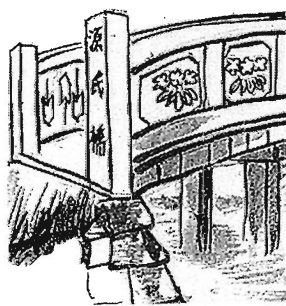
あしがおいしげり、手てのつけようもなかった口ケ島くちがしまふきんが、しだいにみどりの水田すいでんにうまれかわっていったのは、この貞観寺じやうかんじの莊園しやうえんになってからであらう。莊園しやうえんの役人やくにんのさしずをうけて、えいえいと汗あせみどろのかいこんをして、そこにすみついていった広幡ひろはたのせんのすがたが、まぶたにうかんでくる。

それにしてもバカをみたのは、宮勝十二月磨であつた。金草川の
ほとり六十町歩の土地を寄進したすぐあと、右大臣良相はおもい病
にたおれ、まもなくなくなつてしまったのである。兄の太政大臣良
房は、十二月磨の土地寄進のことを知らないはずはない。それなの
に、どんなに おせどたたけど、なしのつぶて。地方のこつぱ役人
のゆめは、かるくかわされ 死ぬまで権少領のままであつたという。



へ広幡に都落ちの大将がまいた源氏のたね

源氏橋



むかしむかし、京のみやこで、平氏と源氏のはげしいあらそいがあつた。平氏の大將は平清盛、源氏の大將は源義朝であつた。

たたかいは雪のふるなかで、何日もつづいた。そして、ついに源

氏はやぶれ、ちりちりばらばらになって、東国へにげようとした。

義朝も三人の子どもと、いのちからがら青墓の大炊の長者の家ま

でにげてきた。とちゅうで、十三さいになる三男の頼朝は、雪のふ

かい道でおくれてしまった。青墓の宿では、二男の朝長が、矢のき

ずがおもく助かりそうにないので、義朝はその首をはねてやった。

そして長男の義平を、飛驒の方へ、みかたあつめに出立させた。



こうして親子おやこばらばらになった
 義朝よしとむは、ひとまず知多半島ちたはんとうの野間のま
 へむかうことにした。そこには、
 長田忠致おきだただむねという源氏げんじのけらいがい
 たからである。

義朝よしとむは あさぎりのなかを、小こ
 舟ふねで小金川こねがわをくだり、飯ノ木村はんのきむらに
 ついた。うつすらと、雪ゆきがふりつ
 もっていた。義朝よしとむはちかくで汗あせを
 ながしてはたらいていた百姓ひやうしやうの清せい
 吉きちに、昼飯ひるめしをたのんだ。

清吉せいきちは、たたかいと長ながたびで
 つかれきっている武士ぶしのすがたを

みてあわれにおもった。いそいで家にかえり、できるだけたくさんのにぎりめしをつくり、義朝のまつ八幡神社へといそいだ。

義朝らは、よこの榎えのきによるいをかけ、休んでいた。清吉がにぎり飯をさしだすと、ふかぶかと頭あたまをさげた。そして、ちかくのよしをおり、はしのかわりにして、ゆつくりと飯をたべた。

そして自分たちのために、心をくばってくれた清吉に、短刀たんとうひとつりと、源氏の白旗しろはた一本と、一枚のおすみつきをあたえた。そして、

「おまえの心をわすれまいぞ。きょうから東源氏の武士となり、伊藤の姓をなのるがよい。源氏がさかえる世となったとき、きつと重くとりたてようぞ。」と、清吉の手をとって礼をいった。

義朝を舟で野間まで送っていく大切な役目は、大炊の弟で、鷺巢村に住んでいた鷺巢源光（玄光）がひきうけていた。

「平氏のせんさくは きびしいのです。どうか、小舟につんである

柴のしたへかくれて、のがれてください。」

義朝は、源光のことばにしたがい、津屋川をくだっていった。こうして平氏の追手をぶじにのがれ、野間についたものの、長田忠致のうらざりによつて、義朝はふるばでころされてしまった。

しかし、源氏をやぶつた平氏のいきおいは、ながくはつづかなかつた。義朝の子どもの頼朝と義経らによつて、親のかたきである平氏は、こつぱみじんにほろぼされてしまったのである。

それから八百年。義朝が飯ノ木でやすんだところを休息所、昼飯のはしにつかつたよしを土にさかさにさし、「源氏さかえて、よし竹となれ」と歌をよんで、さかさよしがしげつたところは盧墳、義朝が柴舟にのりこんだところは源氏橋という地名になった。短刀とおすみつきは、八幡さまに長くつたわり、源氏の白旗は、神明さまのご神体にされたという。よろいかけの榎は、今何代めであろうか。

へ広幡ひろはたをとる九里半街道くりはんかいどうの入口・岩道いわみち

九里半くりはんまわし



むかし、金草川かなくさがわのつつみの上うへは、美濃国みのくにの中なかでも、大切な街道かいどうであつた。江戸えどや名古屋なごやなど太平洋たいへいようがわの町まちと、北陸ほくりくなどの日本海にほんかいがわをつないでいた。あるいはまた、木曾きそや郡上ぐじようなどの内陸ないりくの村むらや、太平洋たいへいようがわの町まちと、京きやうのみやこをつないでいた。

おもに、さまざまの品物しなものを、東ひがしへ西にしへはこぶための道みちであつた。広幡ひろはたの東ひがしの船附ふなつけ、栗笠くりがさ、烏江かすえの村むらに、大きな川かわみなどがあり、たくさんおほの舟ふねでにぎわつた。米こめや綿わた、塩しお、炭すみ、油あぶら、それに木曾きその木材もくざいなどおほが揖斐川いびがわのこの三湊みなとで、上あげおろしされた。

その三湊みなとから、岩道いわみち、西岩道にしいわみち、口ヶ島くちがしま、そして高田たかた、関ヶ原せきがはらをへ



て 米原^{まいばら}までのあいだは、にもつ
を牛^{うし}や馬^{うま}の背^せにつんではこぶ^{りくじょう}陸上
交通^{こうつう}である。

高荷^{たかに}といつて、馬^{うま}の背^せに高くに
もつをつみあげると、一頭^{とう}でほぼ
百五十^{ひゃくご}キロをはこぶことができる。
三湊^{みなと}から高田^{たかだ}（島田^{しまだ}）まで、高荷^{たかに}
ではこぶと、米^{こめ}一升^{しやう}七合^{しちごう}か、銭^{ぜに}二
十文^{もん}ときめられていた。これが
米^{こめ}の荷^にだと、米^{こめ}一升^{しやう}四合^{しごう}か、銭^{ぜに}十
七文^{もん}であつた。
米原^{まいばら}の朝妻湊^{あさつまなと}では、また船^{ふね}につ
みかえて、びわこの上^{うへ}をはこんだ

のである。

この三湊みぞと朝妻湊あさづまみぞのあいだは、九里半くりはん（三十八キロ）のみのりであった。だからこの道みちを九里半街道くりはんかいどうといい、ここへにもつをまわすことを、九里半まわしと呼んよでいた。

この九里半くりはんまわしの東ひがしの入口いりぐちが、岩道村いわみちむらである。いまでもこのつみの上うへにたつと、むかしの街道かいどうのおもかげがしのばれる。くねくねとまわっているその道みちのむこうから、高荷たかにをつんだ馬うまが、馬子まごにたずなをひかれて、いまにもそこにあられそうなききがしてくる。

そのつつみの下したのあちこちに、その昔むかしはいくつもの大きな池いけがちらかっていた。これは金草川かなくさがわのつつみが切きれたときに、掘ほりけずられてできたものもあるが、つつみをつくる土つちを掘ほりだすためにできたものもあった。三十センチ四角しかくの土つちを、モツコで、一回かいはこぶと銭ぜに一文もんと書かいた札ふだをもらって、せいだしたという。村むらびとたちの人じん

海戦術^{かいせんじゆつ}で、あの高い^{たか}つつみをきずきあげたのである。

赤坂^{あかさか}から石灰^{せっかい}をはこんできて、土^{つち}とまぜて、つつみのしんにしてある。石灰^{せっかい}は土^{つち}をかたくしめて、岩^{いわ}のようにしてしまふ。こうしてがんじょうな岩道^{いわみち}ができた。室町時代^{むろまちじだい}のことである。

岩^{いわ}などどこにもみあたらないのに、この九里半街道^{くりはんかいどう}の入口^{いりぐち}に、岩道^{いわみち}という地名^{ちめい}がうまれているのも、このつつみのつよさ、この道^{みち}の安全^{あんぜん}さを印象^{いんしょう}づけている。

そしてまた、このつつみからみると、村^{むら}や田^たは、金草川^{かなくさがわ}の川底^{かわぞこ}より、ずっとひくい。大水^{おおみず}でつつみがやぶれようものなら、ひとたりもない。ひとのみである。したがって、岩道村^{いわみちむら}ということばのひびきには、村^{むら}びとたちのつよいねがいもこめられている。

この九里半^{くりはん}まわしも、江戸^{えど}の中^{なか}ごろからしだいにおとろへはじめる。牧田川^{まきたがわ}が浅^{あさ}くなり舟^{ふね}がとおらず、大垣湊^{おおがきみなと}がさかえたからである。

へ広幡の平和主義者 戸倉九右衛門のちえ

大跡城の春

むかしむかし、大跡村に、大跡城があったと。

今もその城跡は残っており、大正頃までは二重の堀もあったという。もちろん城といっても、たかい石垣や天守閣をもつりっぱなものではない。その土地の豪族や武将が、自分の屋敷をかまえる中、そのいきおいを示し、敵のせめをふせぐためのとりでをつくっていたのである。

大跡城は、大跡村の戸倉氏の居城であった。いまから四百年ほどまえ、室町戦国の世のおわりごろである。

戸倉九右衛門は、村びとをさしずして新田をひらくために、村役





をあつめて計画^{けいかく}をねっていた。ぼ
んぼりのあわい光^{ひかり}が、よせあつた
頭^{あたま}の下^{した}の白^{しろ}い絵^え地^ち図^ずをてらしてい
る。夜^{よる}はすでに、ふけていた。

——と、けたたましく縁^{えん}づたいに
足^{あし}おとがひびいた。外^{そと}がにわか
そうぞうしくなっている。

「殿^{どの}、殿^{どの}、夜^{よる}討^うちでござる。すで
にうら手^ての納^な屋^やに火^ひをかけられ
ました。」

九^{きゅう}右^う衛^え門^{もん}は、しゅんかん、太^た刀^ち
を手^てにしてとびあがった。そして
まっかになって、どなった。

「誰じや！　せめてをいえ！」

「は、はい。鷲巢の渋谷でござる。いま、西脇、高木、桐山の面めん配下をあつめて防戦、女どもが火けしにまわりました。」

「なに　渋谷宗印か。ひきような奴め、思いしらせてくれる。」

おっとり刀でとびだしていく九右衛門、あとにつづく村役たち。

夜討ち、くに盗りは、戦国のならいとはいえ、九右衛門が新田開発に力をいれているスキをついてのつとりであつた。渋谷宗印は平家の血をひく末孫で、代だい、鷲巢城にすんでいた。弟の太左衛門は大塚にすんでいたが、この弟のために城ひとつうばってやろうと日ごろから大跡城をねらっていたのである。

九右衛門がわずかな手兵とともに、とびだしていったときには、すでに宗印と太左衛門の連合軍は、大跡城の中になだれをうつていた。多勢に無勢　九右衛門は二三の敵を倒したが、ここで一族郎党

が全滅し、城屋敷に火をかけられるのは、しのびなかった。

「ひけ、ひけ みんな裏口からとびだせ！」

と叫んで、女、子どもをまず避難させ、自分も残る手勢とともに、
ようやく脱出したのであった。

戸倉一族は、とりあえず直江城の丸毛三郎兵衛兼利のところへ
身をよせた。兼利は源氏の末孫であり、信長につかえた歴戦の武将
であつた。日ごろから渋谷宗印のやり方が氣にくわかつた兼利は、
九右衛門に同情し、その一族をあずかつたのである。

九右衛門にとっては、無念の退却であり、納屋を焼いただけで、
無傷のまま、城屋敷をうばわれてしまったのである。

九右衛門にとって、もんものの口惜しい日びがつづいた。どちら
かというと武将というよりは、新田開発などの村づくりの指導者で
あつた。いくさぎらいの平和主義者にとって、戦国の世の城とり合

戦は苦手である。いざ攻められたら、ひとたまりもなかった。そこをついた宗印であつた。だが九右衛門も、自分の村ごと城屋敷全部をうばわれて、だまつて指をくわえているわけにはいかない。なんといわれても武士のはしくれである。

そんなある日の夜明けまえ、九右衛門は丸毛兼利の軍勢をかり、ひそかに大跡城に近づき、にわかにときの声をあげた。宗印がねばけまなこで気づいたときは、すでに城屋敷は、戸倉・丸毛の軍勢でみちあふれていた。二十人余りで城をまもる渋谷勢は、圧倒的な軍勢の不意討ちに虚をつかれ、全く戦意をうしなつていた。

戸倉九右衛門の大音声が、朝方の白いもやの中にひびいた。

「渋谷宗印殿は、おめざめか。戸倉九右衛門・丸毛兼利殿のお力をいただいて城をかえしてもらいにまいった。おとなしく、驚巢へおかえりなされい。再び、わが先祖伝来の土地に、手をふれよう

となさるな。それまで お命はおあづけしておく。さあ、いそが
れい。裏戸があけてござるぞ。」

二百をこえる軍勢は、声をあげて、呵かとわらった。その嘲笑の
中を、ぶざまなかつこうをした宗印と女たちが、ほうほうのていで
にげてゆく。あつというまの 様がわりのできごとであった。

あつけなく城をうばいかえされた渋谷宗印は、この口惜しい恥さ
らしをぬぐおうと、まもなく押越城をきづいた。しかし、戸倉九右
衛門のうしろには、丸毛兼利がおり、そのうしろに百年つづいた城
とり、国とりの戦国の世を終わらせようとしている織田信長がいた。
渋谷宗印の不敵な心をみぬいた信長は、軍勢をだして一挙に押越
城をふみつぶし、鷲巢北二軒の在家で、宗印を殺してしまった。
宗印の弟の渋谷太左衛門は、信長に誓いをいれ、豪士として丸毛
兼利に力をあわせることになった。九右衛門に平和な春がきた。

へ広幡の豪士 丸毛六兵衛と徳永法印の友情

柔と剛



天下わけめの関ヶ原のたたかいは、いまからほぼ四百年まえの慶長五年（一六〇〇）の九月十五日であった。しかし、その一月まえの八月十六日に、すでに安八の福東城で、火ぶたがきられていた。飯ノ木村の丸毛六兵衛廉由は、福東城の家老であった。いとこの丸毛三郎兵衛兼利がとのさまであった。

海津の松ノ木城のとのさまである徳永法印寿昌は、六兵衛をよんで、ねっしんに話しこんでいた。

「のう六兵衛殿。わしらは太閤秀吉公につかえておったときから、親しい仲であった。それが東と西にわかれて戦わねばならんとい



うのは、まことにしのびん。」

「かたじけないお言葉でござる。」

徳永殿とくながどののあついお情けなさけは、わ

が殿とのにもよくつたえまする。」

「のう六兵衛殿ろくべえどの。もうすでに太閤たいこう

はこの世よになく、家康公いえやすこうの時代じだい

にうつっておるぞ。

なんともいうとおり、世よの太たい

平へいをきづくためには、石田三成いしだみつなり

ではどうにもならん。」

「徳永殿とくながどののお気持きもちはよくわかりま

してござる。

だが、前まえにも申しましたようよう

に、わが丸毛家は、太閤秀吉公にたいへんご恩をうけており、今さらその豊臣家に弓をひくことは、人の道としてできません。」

「そうか。六兵衛殿がそうまでいわれるならやむをえん。家康公はもう待てんとのさいそくしきりじゃ。」

丸毛六兵衛は徳永法印のあつい情と世の動きがわからぬではなかった。だが豊臣家に恩のある武將がつぎつぎと、徳川家にくらがえしていくのががまんできなかった。恩をわすれぬ武士として、かたくなに意地をはりたい氣持であつた。がんこなまでに剛い人であつた。

三日後、徳永法印ら東軍の武將は、徳川家康の命をうけて、福束城をはげしく攻めた。丸毛一族は、必死のたたかいをいどんだが、平野の中の小さなひとつの城は、どこからも助けがくることもなくひねりつぶされてしまった。

家老の六兵衛は、城がえんえんと燃えるのをみながら、とのさま

の三郎兵衛をたすけて、大垣城へのがれた。それも徳永法印が、情
によつて逃げみちをのこし、深追いをさせなかつたのである。

こうして丸毛家の二人の武將は、関ヶ原のたたかいのとき、すて
に城もなくけらいもなく、ふつうの武士にしかすぎなかつた。だか
ら西軍が敗れたときも、罪にとわれなかつた。そこにも法印がいた。
徳永法印は関ヶ原のたたかいのでがらによつて、五万石の高須城
のとのさまになつた。そのとき、飯ノ木や大跡がその領地となつた。
とのさまは、さつそく飯ノ木村にすむ丸毛六兵衛兼由を城へおよ
びになつて、彼に五百石をあたえて召しかかえられた。その場
にのぞんで柔かいかんがえ方のできるとのさまであつた。

柔の法印と、剛の六兵衛は、おたがいの人間につきぬ魅力をか
んじ、友情をもとめていたのであらう。のちに徳永家が幕府につぶさ
れたとき、六兵衛はあつさりと武士をすてて帰農した。

へ広幡の田中政清・関ヶ原西軍の落ち武者狩り

八中畷のたたかい

はつちゆうなわて



天下わけめの関ヶ原のたたかいは、土地のようすをいかした作戦からみれば、西軍の勝利はまちがいなかった。

関ヶ原の山地に、ぐるりとまるく陣をしき、平地をやってくる東軍をむかえうつ。そして、垂井の南宮山にひそむ二万五千の大軍がよこやうしろから、いつきにはさみうちにするのである。東軍はふくろのねずみで、さんざんにけちらされてしまうはずであった。

だがどっこい、たたかいは思わぬ方にうごいてしまった。南宮山に陣どった毛利、長曾我部、長束らの軍勢は、西軍やくそくののろしがあがっても、つかいがきても、とんとうごかない。西軍であり



ながら、東軍に氣をつかつている。

西軍は、大将たちの心がばらば

らで、力をあわせないばかりか、

うらぐりさえしている。勝てるは

ずはなかった。ほぼ二十万ちかい

軍勢が全国からあつまつたこのた

たかい、こうしてわずか一日で

けりがついてしまった。

西軍のうらぐり軍、南宮山の軍

勢はまだ一戦もまじえていないの

に、もうにげごして伊勢方面へと

とびだした。

東軍はすでにそのことも計算ず

みて、八中掇はっちゅうなわ（のちの口ヶ島くちがしま）や岩道いわみちに柵さくをつくり、陣じんをしいてま
つていた。八中掇はっちゅうなわとは、八中をとおるまっすぐな道みちのことである。
さきに福束城ふくづかじょうをおとした徳永法印とくながほういん寿昌としまさらの軍ぐんである。この軍は、
いきおいにまかせて、牧田川まきたがわまででむいて、南宮山なんぐうやまをおりてにげて
くる西軍せいぐんをむかえうった。

いまの名神高速めいしんこうそく、養老サ―ビスエリアの東ひがしの金屋かなやのあたりと、い
まの口ヶ島くちがしまの学校西がっこうにしの八中はっちゅうのあたりが、主戦場しゅせんじょうであつたという。金
屋川原やがわらのたたかいとか、八中掇はっちゅうなわのたたかいとして、里人さとびとたちがつた
えている。徳永法印とくながほういんにつかえる地元じもとの田中彦市郎政清たなかひこいちろうまさきよという武将ぶしょうが
ひきいる一隊いったいで、百五十ひゃくごの首くびを血ちまつりにあげている。血刀ちがたなをさげ
た兵へいが走りまわり、生首なまくびや胴どうがちらばっていて、里人さとびとにとってはと
てもこわかつたという。

田中彦市郎政清たなかひこいちろうまさきよは、彦市ひこいちとも、彦七ひこしちともいったが、このときの功こう

によつて、徳永法印から高二百石を有尾でうけた。また、この彦市郎の次男である彦右衛門は、京都所司代、奥平美作守信昌につかえて、やはり関ヶ原のたたかいで大きなたてがらをたてている。

彦市郎は、清和源氏のながれをくむ家柄で、その父は朝鮮出兵にでて、肥前の名護屋の陣につめていた。祖父は、豊臣秀吉と柴田勝家の越前、北ノ庄のたたかいで、武勇の名がたかかったという。

そして彦市郎の孫にあたる新兵衛が、口ヶ島の領主であり、犬山城主である成瀬隼人正からもらった短刀は、今につたわっている。

『濃陽志略』や『新撰美濃志』という江戸時代の二さつの本には「田中彦七（彦市郎）宅の跡は、いま田んぼとなつて、その子孫この村に住めり」とある。また『濃州徇行記』という本には、その子孫について、「頭百姓、田中弥平次。長屋門をかまえ、屋づくりよし。地頭より、苗字、帯刀の一札免許あり」としてある。

村のアイランドに必ず顔をだした

江戸と明治の広幡のリーダーたち

【ロケ島（くちがしま）】

（庄屋）（明暦）金右衛門・茂吉、（享保）彦左衛門・新右衛門、（元文）彦左衛門、（宝暦）弥藤次・田中弥藤次・新右衛門、（明和）森右衛門・新左衛門・新右衛門、（天明）常右衛門・元右衛門（文化）田中弥藤次、（文政）田中和右衛門・定四郎、（天保）弥市・田中倭右衛門、（弘化）恒三郎・田中和左衛門、（嘉永）和右衛門・常三郎、（安政）喜市郎・常三郎、（明治）田中孫市・田中恒右衛門、戸長田中恒右衛門、ロケ島村の内伊勢国香取郡法泉寺領百石庄屋奥田吉三郎

【飯ノ木（はんのき）】

（庄屋）（寛永）八郎右衛門、午兵衛、（明暦）五左衛門・助左衛門・利右衛門・小左衛門、（元禄）利兵衛（宝永）利兵衛・（正徳）久蔵・源次郎、（享保）権内・久蔵、（元文）久蔵・権内、（宝暦）権内・久蔵、（明和）久蔵、（安永）七兵衛・久蔵、新五兵衛、（天明）七兵衛、（天明）七兵衛・新五兵衛、（寛政）新五兵衛、（文政）伍兵衛・久蔵、（天保）久蔵・権内、（嘉永）久蔵・佐六・四郎兵衛・七兵衛、（安政）久蔵・七兵衛、浅右衛門・四郎兵衛、（万延）浅右衛門・七兵衛、四郎兵衛門・久蔵、（文久）浅右衛門・七兵衛・四郎兵衛・久蔵・伍兵衛、（元治）四郎兵衛・久蔵・伍兵衛・浅右衛門（慶応）四郎兵衛・久蔵、浅右衛門、（明治）高木久蔵・丸毛四郎兵衛・村瀬浅右衛門、戸長丸毛四郎兵衛

【大跡（おおあと）】

（庄屋）（明暦）長兵衛・利兵衛、（元禄）彦右衛門・源右衛門・源兵衛、（正徳）本左衛門・利兵衛（享保）久右衛門・治右衛門（元文）治右衛門・久右衛門、（寛保）久右衛門、（宝暦）久右衛門・次右衛門、（明和）次右衛門・久兵衛、（天明）久兵衛・次右衛門・久蔵、（文化）六之丞・治右衛門、（文政）六之丞、（弘化）八十八・源右衛門、（安政）八十八、（明治）陸田栄太郎・戸長―戸倉平吾

【西岩道（にしいわみち）】

（庄屋）（明暦）九郎兵衛（享保）源右衛門、（元文）源右衛門・平右衛門、（宝暦）喜三郎・武左衛門、（明和）武右衛門、（天明）平右衛門、（文政）角右衛門、（天保）栗田喜三郎、（嘉永）栗田喜三郎・岩次郎、（文久）西脇岩次郎、（明治）西脇岩次郎・戸長―西脇又次郎

【岩道（いわみち）】

（庄屋）（明暦）藤左衛門、（貞享）四郎兵衛、（元禄）藤藏新右衛門、（正徳）藤藏、（享保）藤藏、（元文）藤藏、（寛延）秀助、（宝暦）秀助、（明和）秀助、（安永）秀助、（天明）秀助、（寛政）藤四郎・藤三郎、（享和）藤三郎、（文化）藤三郎、（文政）藤三郎・藤四郎、（天保）藤三郎・楠藤三郎、（弘化）藤三郎（嘉永）萬平・藤左衛門・藤三郎・藤四郎、（安政）藤四郎・藤左衛門（万延）藤左衛門、（文久）藤左衛門・藤三郎・楠藤三郎、（元治）楠藤三郎、（慶応）藤三郎・楠藤三郎、（明治）藤三郎・楠藤三郎

二の章 にしょう

広幡のむかしむかしの五つ村 ひろはた いっむら

(近世・江戸 きんせい えど)



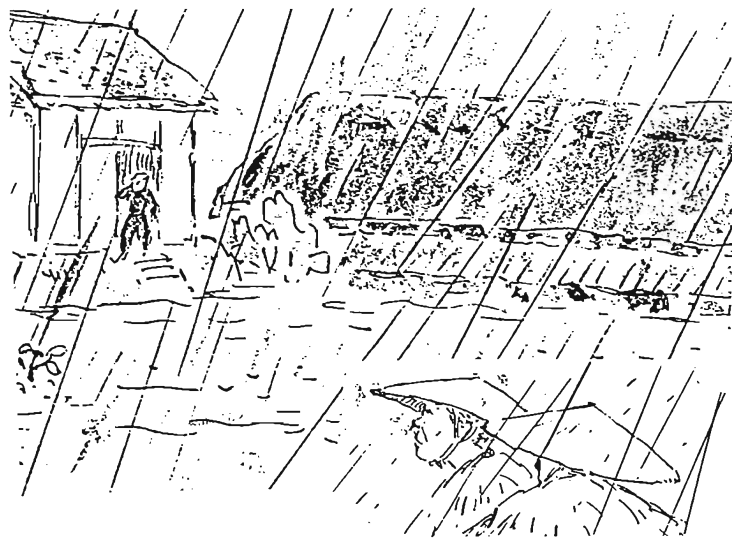
へ広幡が 泥海に沈んだ！ 庄屋彦内さんの苦闘

村のひっこし



むかしむかし、江戸のはじめころ、西濃いったいに、ひどい大水があつた。牧田川のつつみが、ずたずたにきれて、家も田畑も、ざんぶと水につかつてしまった。きろくによると、岐阜と養老のあいだは、いちめん泥海となり、舟でいききができたという。また、このとき、牧田川がおしながした土砂で、川の北には新宮野というひろい荒野ができたともいう。

くわしくいうと、これは慶安三年（一六五〇）の、九月二十六日と二十七日で、「ヤロカの大水」とか「枝広の洪水」といわれた。なくなつた人は三千人、死んだ牛や馬は七百頭、ながされたり、こ



われたりした家は三千五百戸にの
ぼる。百年にいちど、あるかなし
かの大水であつた。

とうぜんのことながら、広幡い
つたいも、この大洪水にみまわれ
た。とりわけ、大跡のひがしにあ
つた中村や笹墳のあたりは、もつ
とも土地がひくく、人びとは着の
み着のままで、飯ノ木の源氏橋へ
にげたのだつた。

寝耳に水というが、じつさい、
水のついてくるのははやい。ふり
かえてみると、もう自分たちの

村は、水の中であつた。

村じゅうが源氏橋のすこし上のところに陣どつた。ここは養老山の扇状地で、小だかい丘になっている。村びとたちは、田畑が泥にうまり、住みなれたわが家が水にながれ、途方にくれていた。

庄屋の彦内さんは、どしゃぶりの中を走りまわっていた。村びとをばげましながら、みんなそろってひなんできたことをたしかめ、仮ずまいや炊きだしの手はずをすすめていた。

一夜あけると、きのうまでの雨がうそみたいにはれあがって、まばゆい秋の陽がさんさんとふっていた。彦内さんは、みはらしのきく源氏橋のところへ村役をあつめた。つかれきつて青いかおをした村びとたちも、そろそろとついてきた。

目の下は、みわたすかぎり、いちめんの海である。まだ、水はいっこうにひきそうになく、日の光をあびたところが白くかがやいて

いる。

村びとたちは、大跡村おおあとむらの木立こたちのむこうに、かげをひそめている自分たちの中村なかむらをみた。鎮守ちんじゅの森もりがみえ、お寺てらのお御堂みどうがみえ、庄屋しやうやさまのうちの大屋根おおやねがみえる。あとは小さなわらやねだけが、島しまみたいに、点てんてんとすこしずつ水面すいめんに頭あたまをみせていた。

「のう。村むらのしゅう。」

いよいよ、これからいくさじゃ。なにもかも水みずの底そこだ。いつになつたら水みずがひくのか、見当けんとうもつかぬ。でも、かなしんだり、なやんだりしていて、なにになろう！」

彦内さんひこないにたいする村びとたちの信望しんぼうはあつい。村びとたちは、彦内さんひこないのひとことひとことに、大おおきくうなづいていた。

「のう。村むらのしゅう。きょうから、あたらしい村むらづくりにはいろう。こんどこそは、どんな大水おおみずにも水みずをかぶらんとところに村むらをつく

るんじゃ。ほら、あそこに金草川かなくさがわのつつみがみえるだろう。九里くり半はんまわしの並木なみきがみえておるあの八中郷はっちゅうきょうのつつみのそばよ。」彦内さんひこないは腕うでをのばして、つつみの下の稲いなの穂波ほなみを指ゆびさした。

「じつは。きのうここへきたときから、とっても気きになっていたんじゃ。それでけさ早く宇兵衛はやうへえさんの舟ふねで、八中郷はっちゅうきょうをひとまわりしてみて、おどろいたぞ。

ここからはよう見えんが、そばへいってみると、稲いねのこしから下したにしか水みずがついておらん。ふだん、それほど高いたかとはおもわなんだが、こうして水みずが定規じようきをひいてくれると一目ひとめでわかる。いままでの中村なかむらとくらべると、たいへんなちがいじゃ。」

彦内さんひこないは、不安ふあんそうな顔かおをしている村むらびとたちをみまわした。なんとか、その顔かおに、希望きぼうの色いろをとりもどしたい。

「どうじゃ、村むらのしゅう。」

こんど水^{みず}がひいたら、二度と水^{みず}のかぶらないあそこへ、村^{むら}じゅうで、ひっこそうではないか。ちようどあそこいったいは、わたしの土地^{とち}。みんながよければ土地^{とち}はだしてもいいぞ！

「ええっ」と、村^{むら}びとたちはどよめいた。

「ありがていこつです。あそこなら、水^{みず}はつかん。」

「子どもや孫^{まき}の代^{だい}まで、たすかります。庄屋^{しょうや}さまあ！」



両手^{りょうて}をあわせて、庄屋^{しやうや}さまをおがんでいる老婆^{らうば}もいた。村^{むら}びとたちは、地獄^{じごく}のそこで仏^{ぼつ}にあつたみたいによろこび、仮^{かり}ずまいの家族^{かぞく}にうれしいしらせをもつてはしつた。なみだをふきながらはしつた。泥水^{どろみず}の海^{うみ}がしだいにひいて、むざんな村^{むら}のすがたをさらけだしたのは、十日^{とおか}あまりもすぎてからだつた。そのあいだに、彦内^{ひこない}さんは、村^{むら}づくりの設計^{せつけい}をかんがえていた。代官^{だいかん}所^{しよ}へなんども足^{あし}をはこび、ゆるしをとりつけた。

村^{むら}びとたちはまずしいながらも、庄屋^{しやうや}さまのいいつけにしたがつて、けんめいにはたらいだ。彦内^{ひこない}さんは、あたらしい村^{むら}づくりにさいし、設計^{せつけい}図^ずに三つの特長^{とくちやう}をもたせようとした。

そのひとつは、氏神^{うじがみ}である八幡神社^{はちまんじんじや}をいちばん村^{むら}上にいちづけ、氏寺^{うじでら}である長誓寺^{ちやうせいじ}をそのつぎに地所^{じしよ}をとる。神仏^{しんぶつ}に村^{むら}のくらしをまもってもらい、神仏^{しんぶつ}をうやまう氣風^{きふう}を村^{むら}びとにもたせるためだ。

そのふたつめは、村のまんなか一本の道をしき、そのなによりに、一本の小川をはしらせる。そしてその両側に民家をならべ、共同で水を使うなごやかさと便利さと、あわせて防火用水にする。

そしてそのみつめは、村南のはなれたところに墓地をおく。村びとたちは野良がえりに、亡き親や先祖をおもい花をたむけることができる。あかるい陽の墓地で、風下に家もなく、衛生的にもよい。彦内さんは、村びとのいけんに耳をかたむけ、そのやる気をもやして、ちやくちやくと村づくりをすすめていった。まことにすばらしい構想力であり、決断であり、指導ぶりであった。

そして、村づくりがおわったお祝いの席である。彦内さんは、きわめてごきげんで、村びとたちをまたまた、おどろかせたのである。「のう、村のしゅう。」

せつかくすばらしい村ができたのじゃ。あたらしい村にふさわ

しいあたらしい村の名まえをつけたい。どうじゃな。お上とそう
 だんしてのことじゃ。八中郷あらためて口ヶ島じゃ。九里半街道
 から、村むらへはいる西の入口の村じゃ。そして、ここは水がつか
 ないたかい島じゃ。すなわち入口の島、口ヶ島村じゃ。」

「庄屋さま、桃太郎の鬼ヶ島じゃなくて、口ヶ島じゃろ。」

村びとたちは、じょうだんをいいながら大よろこびであつた。

「そして、もうひとつあるぞ。村のしゅう。」

じつは西岩道や東岩道やほかの村といつしよに、なんかいもお
 願ひしていた押越からの落水お囲いの新除つつみのおゆるしがで
 たんじゃ。新除つつみとは、牧田川や津屋川をやぶってくる新し
 い水をこのつつみでとめて金草川にながしこもうとするんだな。
 これで口ヶ島は万ばん歳さ。村のしゅう。よかつたのう。」

「庄屋さまあ。そりゃあ。新除つつみじゃのうて、あほ水を除ける

あほよげつつみじゃねえですか。」

村びとたちは、どつとよろこびの声をあげ、「あほよげ、あほよげ」と唱和した。たのしくてたまらん一夜となった。

庄屋田中彦内さんは、村びとのそこぬけのうれしい顔をみまわして、目をほそめていた。この人、またの名を、田中十左衛門政近といい、苗字も刀もゆるされた頭百姓であつた。もともと源氏のながれをくみ、ロケ島の初代は犬山城につかえた武将であつたという。

このロケ島の村づくりについては、近世村落の研究者がここを調査にきている。江戸時代の『濃陽志略』『濃州徇行記』『新撰美濃志』にもふれられている。大跡の北がわの地下一、五メートルに、昔の村の地蔵堂のあとらしい石垣がのこつていたという。「あほよげつつみ」ができたのは、慶安の大水から六年目の明暦二年のことで、そのときの庄屋は金右衛門であつた。

へ^{ひろはた}広幡をえがいた 江戸時代三さつの本^{ほん}

入^{いり}口^{ぐち}の村^{むら}



むかしむかし、いまの^{くちがしま}口ケ島の人びとの先祖^{せんぞ}は、そのころの大跡^{おおあと}
村^{むら}の北^{きた}がわにすんでいた。村^{むら}の名^なを、中村^{なかむら}といった。このことは、
江戸時代^{えどじだい}の『新撰美濃志^{しんせんみのし}』という本^{ほん}にかかっている。

大跡^{おおあと}もながいあいだに、だんだん西^{にし}へうごいているのか。その中^{なか}
村^{むら}というのは、いまの大跡^{おおあと}の東^{ひがし}にあたる。ちやうど金草川^{かなくさがわ}のつつみ
の南^{みなみ}がわのいくつかの村^{むら}のなかでは、まん中^{なか}あたりの村^{むら}であり、中^{なか}
村^{むら}とよばれたのかもしれない。

ところがここは土地^{とち}がひくく、いったん大水^{おおみず}がでたらとつぷり水^{みず}
につかってしまう。洪水^{こうすい}のたびにくるしみぬいた人^{ひと}びとは、ついに



村じゅうあげてひっこすことにな
 った。いまの金草川のつつみの南
 がわ、八中郷というところへである。
 慶安三年、とらどしのことである。

そしてそのとき、その村の名ま
 えをあらためて、ロケ島村とよぶ
 ことにした。このことは、むかし
 の『濃陽志略』という本に、はっ
 きりとかいてある。

三百四十年ほど、まえのことで
 ある。

それまでの八中郷というのは、
 小字が八つあつまっている村であ

ったのか。八つの村のまん中になつた村なのか、わからない。

ともかく、口ケ島村ができたときには、そのなかには十四の小字があつた。村西、村前、八中、沖中、寺田、長丁、吉原、方六、茨原、元屋敷、池田、志水、打野、中島である。このことは、江戸中期にかかれた『濃州徇行記』という本にある。これが明治になると八中、寺田、中島、提外の四つの小字にまとめられていく。

そもそも、『濃州徇行記』をかいだ樋口好古という人は、大代官として美濃国をすみからすみまであるき、自分の目でみたり、耳できいたりして、この本をまとめている。この地理学者が、口ケ島をみて、島のように土地がたかかつたと、つぎのようにかいている。

——この村は、土地がたかい。だからいちめん麦をまきつけている。
——寛政七年の秋の洪水で、津屋川がぎれた。水田いちめんに水がのつた。でも、土地がたかいので、水ははやくひき、稲のいたみ

もなかった。だから、洪水であつたのに、ふつうのねんぐ（地頭定免）をだすことができた。

島というのは、水がついたとき水の上に頭をだす高い土地のことであり、人びとはそういうところに村をつくつてすんだ。だから、よそ村の人のことを、「あれは、どこのシマの人かな」などといったものだとも古老からきいた。シマとは、村のことである。

口ケ島の口は入口のことであろう。九里半街道から、飯ノ木輪中、下笠輪中などの村むらへおりる入口の村が口ケ島である。

また、この三冊の本にはどれにも、「口ケ島村に、伊勢香取の法泉寺領百石」とあり、昭和の初めまで法泉寺墓地があつたという。

『濃陽志略』という本は、漢文ばかりでかかれているためか、口島となっている。『新撰美濃志』や『濃州徇行記』は口ケ島である。これからは表音式かなづかいだから、口が島となつていくであろう。

へ^{ひろはた}広幡^{ひと}の人^{あせ}びとの汗^{けつしやう}の結晶^{まん} 一万メートル^{ていぼう}の提防[！]！

飯^{はん}の^き木^わ輪^{じゆう}中



むかし、土地^{とち}がひくくて水^{みず}がつきやすい村^{むら}では、そのまわりをつみでぐるりとかこつたものだ。そうすれば水^{みず}は村^{むら}にはいらず、家^{いえ}や田^た畑^{はた}をまもることができる。この輪^わになつたつつみの中^{なか}を、輪^わ中^{じゆう}という。

たとえば広幡^{ひろはた}の五つ^{むつ}の村^{むら}をはじめ、およそ三十^{さんじゅう}の村^{むら}が、そのまわりを大^{おお}きなつよいつつみにかこまれている。北^{きた}は金草川^{かなくさがわ}と牧田川^{まきたがわ}下^か流^{りゅう}、東^{ひがし}は伊尾川^{いびがわ}、西^{にし}と南^{みなみ}は津屋川^{つやがわ}のつつみがつながって、ひとつの輪^わ中^{じゆう}になつていのである。これを多芸輪中^{たぎわじゆう}という。

しかしこの輪中^{わじゆう}はあまり広^{ひろ}いので、その中^{なか}のそれぞれの村^{むら}が自分^{じぶん}



の村のまわりを、もうひとつ、つみでかこつて小さな輪中をつくっていた。大きな輪中のなかに、小さな輪中がいくつもできた。

この小さな輪中のひとつに、飯ノ木輪中がある。飯ノ木村と、大跡村と、大跡新田村の三つの村をぐるりとかこつていたのである。

牧田川や伊尾川の洪水のときはほとんど津屋川や金草川もつつみをきつて、はんらんする。いくたび飯ノ木や大跡が水につかり、田畑がながれたかしのれない。

それでこのはんらんから村をまもるため、江戸のはじめごろ、飯ノ木輪中がつくられた。飯ノ木村二千七百メートル、大跡村二千八百メートルという大きなかけめぐりつつみである。

「ええ、耕地整理のまえまで、このつつみはのこっていましたよ。

飯ノ木の北のつつみの下から、うつくしい水がわいていて、よく

のどをうるおしたものです。そのあたりを、清水のたんぼとか、

清水の提防とかいっていましたねえ。」

飯ノ木の古老が、なつかしそうにかたってくれた。

この飯ノ木輪中に、あとからなまいりしたのは、大跡新田村で

あった。飯ノ木輪中ができたころ、小倉村の長兵衛、新兵衛、四郎

兵衛、五左衛門、七兵衛、九兵衛、十太夫が五百両の金をかけて、

ひらいた村である。津屋川のつつみ九百メートル、大跡村との中除

つつみ七百メートル、悪水おとしのつつみ千六百メートルというつ

つみの中の村であつた。

しかし、どんなにしても水はけがわるく、つぎつぎとたかい土地へうつっていき、江戸のおわりごろは五戸二十一人の小さな村であつたが、明治の中ごろには、ついに村は消えてしまった。

大跡村でも、雨がふりつづくと、上の村むらからどんどん水をおとしてくるので、つつみの外が水にあふれている。だから、うちにたまつた水を外へだすための落込の戸をあけることができず、水つきそのまま、こまってしまうのであつた。

昭和三十六年（一九六〇）の耕地整理のとき、三百年つづいた飯ノ木輪中のつつみは、すがたをけした。輪中つつみで、水とたたかつてきたひとつの歴史がおわつたのである。

いまは大跡の北がわに、この輪中つつみの一部と、おとしがきという込戸の蛇柱が一本たっていて、昔のおもかげをかたっている。

へ広幡の一大論争 岩道に東はあったのか

東 岩 道

ちよつと、むかしのはなしやが、岩道村に彦さというえらい人が
ござつてな。ある日、駐在所へ電話をかけなさつたそうな。

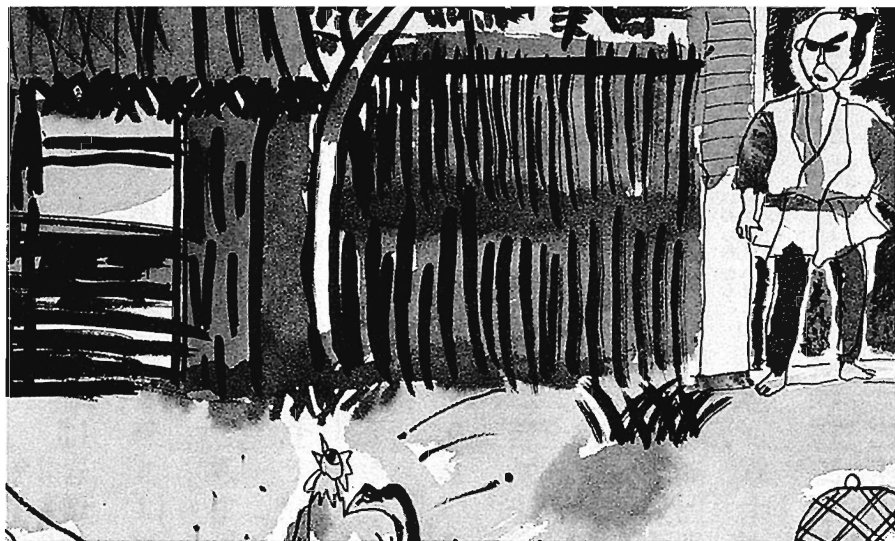
「もしもし、駐在さんかな。えらいこつちや。

いま、西岩道の金やんどこから、にわとりがひとつとびだしてな。
わしんどこの庭へ、不法侵入してきたんや。

はよう、たいほして、金やんどこへ、犯人ひきとりにくるよう
にいうたつてくれ。

まえにもあったが、だいたい、西岩道は、分家のくせして、本
家の岩道へ、にわとりをばつて、えさをひろわせるとはけしから





ん。あんたも、しっかりしとつてくれ！」

あまりのけんまくに、駐在さうざいのおまわりさん、目をまるうして、にわとりのたいほに、とんでいかしたということじゃ。

こんな調子ちようしじゃから、西岩道にしいわみちの人が、

「そりや、東岩道ひがしいわみちのほうできいてくれ」とか、

「そりや、東の村ひがしむらのことでああ」などと、

うっかりいおうものなら、たいへ

んなことになる。

「むかしから、おれたちは岩道村じや。東岩道などという村なんぞないわい、本家の岩道を、ばかにするんじやねえ！」

「常性寺のふるいご伝書をみても、美濃国多芸郡岩道村とちゃんと書いてある。ようおぼえておきんさい!!」ということになる。

——だが、どっこい。むかしむかしは、どうも、東岩道村と西岩道村が、なかよう名まえをならべておったようなんじや。

だいぶ、むかしのことやが『慶長郷帳』という村のことをくわしくしらべた本をみよう。江戸のはじめ、慶長十八年のことである。

東岩道村 四百九十石あまり (日根野氏領)

西岩道村 四百五十六石あまり (堀直寄氏領)

それから、もうすこしあとの時代の『正保郷帳』という本をみると、ここでもやっぱり、東岩道村になっておる。

東岩道村 ひがしいわみちむら

四百九十八石あまり ひやくしゅうはちじゅうはちいし

(高須藩) たかすはん

西岩道村 にしいわみちむら

四百五十六石あまり ひやくごじゅうろくにいし

(尾張藩) おわりはん

このきろくは、正保元年しょうほがねんであり、いまから三百四十年ひやくしよねんまえである。さて、そのあと、『天保郷帳てんぽごうちやう』という本ほんになると、ころんと村むらのなまえがかわってくる。百五十年ひやくごねんまえ、江戸えどの中なかごろである。

岩道村 いわみちむら

四百九十八石あまり ひやくしゅうはちじゅうはちいし

(幕府領) ばくふりやう

西岩道村 にしいわみちむら

四百六十二石あまり ひやくしよくわにじいし

(尾張藩) おわりはん

ここで東ひがしがとれて、岩道村いわみちむらになったのである。じつは、まえの正保元年しょうほがねんから、ほぼ五十年ごねんたった元禄四年げんろくねんに、東岩道ひがしいわみちは小さな高須藩たかすはんから幕府領ばくふりやうにかわったのである。いままで西岩道にしいわみちは、「わしら尾張おわりさまは、高須たかすさまのご本家ほんけよ」と、ながいこと東岩道ひがしいわみちをみくだしてきた。しかしそれが逆転ぎゃくてんし、「わしら天領てんりやうや。尾張おわりさまのご本家ほんけやで」となって、本家ほんけらしく東ひがしをとってしまったのであろう。

へ広幡の大水で 村上の氏神さまが 村下に……

村下の氏神さま

むかしむかし、西岩道という村は、ずっと南のほうの笹墳のあたりにあったという。

そこは土地がひくく、たびたびの大水にこまっていた。だから、土地のたかい金草川のつつみのそばへ、村ごとひっこしてきたのである。

それまで氏神さまのやしらは、村のいちばん上にあった。上というのは、こよみでいう戌亥の方向で、いまだいう北西である。村びとのうやまいのきもちが、そこにあらわれていた。

だが、村びとたちも、背に腹はかえられない。大水のあるごとに





「氏神^{うじがみ}さまあ、どうぞ、おゆるし
くださいまし。」

と、頭^{あたま}をじめんにすりつけて、こ
とわつては、ひっこしをしていっ
た。

もちろん、氏神^{うじがみ}さまは、

「いいともいいとも、かわいい氏^{うじ}
子^こたちのしあわせをまもるのが
わしのつとめじゃ。」

いいところへひっこしできて
よかったなあ。」

というように、だまってお許^{ゆる}しく
ださった。

ともかく、こうして一けん、また一けん、村むらびとたちは、氏うじ神がみさまのまえをすどおりして、つつみのちかくへうつっていった。そしてついに、氏うじ神がみさまだけが、村むらのいちばん下の田しもんぼの中に、ぽつんと、とりのこされてしまった。

村むらびとたちは、けっして氏うじ神がみさまをそまつにしたのではない。村むらびとたちは、氏うじ神がみさまのやしろを、城しろのようなたかい石垣いしがきをきづき、その上うへにおまつりした。

「氏うじ神がみさまだけ大水おおみずのなかにおいて、自分じぶんたちだけ水みずのつきにくいところへひっこしたとあつては、もうしわけないでう。これで氏うじ神がみさまも、安心あんしんして、氏うじ子こをまもってくださるにちげえねえ。」

「いやあ、村むら下の氏うじ神がみさまも、わるうないよ。なんといつても、村むらびとたちが、いちばん目めにつきやすいところじゃもん。つとめにくにしろ、田たんぼにくにしろ、村むらびとたちが村むらをでると、ま

ず目につくのが、ありがたい鎮守の森なんじゃ。」

「でもさ、ちよつとこれをみてくれよ。とんと発展しん村だよ。」

宝暦六年 (二百三十年まえ) 四十一戸 二百四十一人

『濃陽志略』

寛政八年 (百九十年まえ) 三十戸 百九十七人

『濃州徇行記』

明治四年 (百五十年まえ) 四十八戸 二百三十六人

『町村略誌』

昭和四年 (現在) 四十三戸 二百二人

『養老町統計』

一けんが分家したりしてふえると、どこかで一けんが、村をはなれていってしまふんさ。ふしぎな村さ。氏神さまが村下へいかしてから、村の発展がとまってしもうたんとちがうんか。」

村びとたちは、なんとも氣になつてゐるのである。

西岩道の氏神さまは、八幡さまである。その神さまは、中国や朝

鮮から、文化や学問をおおいにとりいれ、古代の生活をたかめた応

神天皇であり、村下のことなんか、氣になさる方ではあるまい。

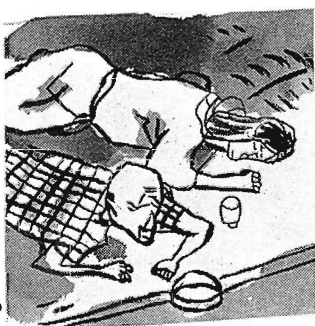
へ広幡^{ひろはた}をおそった 三つ^{だい}の大ききん。その苦し^{くる}み

大^{だい}ききん

むかし、まずしい百姓^{ひやくしやう}は、ききんでくるしむことがおあった。

作物^{さくもつ}がみのらず、食^たべものがなくなって、うえ死^じにのでる大^{だい}ききんが、二十年^{ねん}に一度^どはおそったものだ。とりわけ、広幡^{ひろはた}の人^{ひと}たちが今^{いま}につたえている三^{だい}大^{だい}ききんは、身^みぶるいするほどのすごさであつた。享保^{きやうほ}、天明^{てんめい}、天保^{てんぽ}と、ちようど五十年^{ねん}ごとの大^{だい}ききんであつた。

享保^{きやうほ}のききんは、五月^{がつ}六月^{がつ}と、しとしとと長雨^{ながあめ}がふりつづき、いつまでもさむい日^ひがつづいた。しかも八月^{がつ}になるとイナゴの大群^{たいぐん}がでて、稲^{いね}の実^みをまたたくまに、くいあらしてしまった。収獲^{しやうかく}はほとんどなかった。いぬやへび、木^きやくさ、生^いきているものは、すべて





食べようとした。うえ死に百万。

そして五十年あとの天明の大き
きんも、そうだった。春から夏に
かけて、まいにち雨がふりつづき
気温があがらず、秋のはじめには
冬のようなさむさになってしまっ
た。その上、ふりつづいた雨が、
洪水をおこしたからたまらない。
稲は、まったく実らなかった。
そしてその冬は、ぽかぽかとい
か陽気になって、十二月だとい
うのに、なたねの花がさき、たけ
こがでてきたという。

それから春^{はる}になると、またさむくなり、四月^{がつ}五月^{がつ}と雨^{あめ}がふり、冬^{ふゆ}のようなさむさとなった。そして、浅間山^{あさまやま}の大噴火^{だいふんか}による冷害^{れいがい}がかさなった。三年^{ねん}め、四年^{ねん}めも、おなじような凶作^{きようさく}・不作^{ふさく}であった。そして、五年^{ねん}めは、五月^{がつ}から雨^{あめ}がふりつづき、晴^はれた日は夏^{なつ}のうちに三日^{みつか}もなかった。七月^{がつ}の土用^{どよう}には、ことにさむさがつよくなり八月^{がつ}九月^{がつ}と二回^{かい}の大風^{おおかせ}で、ふんだりけつたりの大凶作^{だいきようさく}。こうして不作^{さく}が五年^{ねん}もつづき、うえ死^じにしたものは、数十万^{すうまん}といわれている。口^{くち}ケ島の古老^{こうろう}が、先祖^{せんそ}から聞^ききつたえるところによると、こぬか、マツの皮^{かわ}、エノキやシャクナゲの葉^は、ドングリの実^み、トコロの根^ねなど、食^たべられるものはなんでも口^{くち}へいれたという。口^{くち}ケ島^{がしま}の大神宮^{だいじんぐう}の境内^{けいだい}に、そのころふといマツ二本^{ほん}と、大きな一本^{ほん}の石ケヤキ^{いし}があった。その木^この葉^はが、口^{くち}ケ島^{がしま}の人^{ひと}たちのたいせつな食糧^{しょくりょう}であった。そしてこれは口^{くち}ケ島^{がしま}のことではないが、地獄^{じごく}のようなおそろしい

つぎのような話もつたわってきたという。

「食べものの全^{また}くつきた村^{むら}では、死^しんだ人^{ひと}の肉^{にく}を食^たべているん^と。」

「いやいや、生^いきている人^{ひと}を、ころして食^たべるところもある^{つて}。」

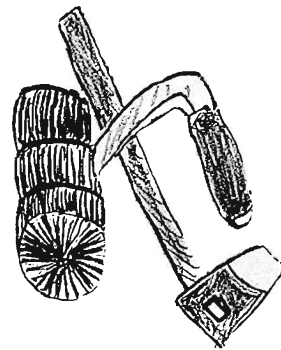
それから、また五十年^{ねん}たった天保^{てんぽ}の大き^{だい}きん。ここでもやはり五年^{ねん}にわたる大凶作^{たいきょうさく}である。

一年^{ねん}めは、雨^{あめ}がふらず作物^{さくもつ}はかれてしまい、二年^{ねん}めは、大^{おお}じしんと雨^{あめ}つづき、三年^{ねん}め四年^{ねん}めも、春^{はる}から秋^{あき}まで雨^{あめ}おおく、五年^{ねん}めは、大洪水^{だいくわうずい}となる。広幡村^{ひろはたむら}にちかい、根古地^{ねこじ}の松永清九郎^{まうながせいくろう}は、このときのようにすを、つぎのように書^かきのこしている。

「道^{みち}や山^{やま}や町^{まち}に、うえ死^じにしたものがすてられている。根古地^{ねこじ}でもすでに三げんの家^{いえ}が、うえ死^じにした。だれもかわいそうと思^{おも}わない。たべものを与^{あた}えるものもない。おわんに一ぱいのおかゆをもらうのに、一里^り（四キロ）の道^{みち}をでかけていく。」

へ広幡に一大長者 出現！ 学者 知足斎のみたものゝ

龍の家



むかし、金草川かなくさがわのみなみがわのつつみのうえは、九里半街道くりはんかいどうとい
うて、なかなか人ひとどうりがおおかった。船付ふなづけのみなとで舟ふねからおり
た、ひとりの武士ぶしが、岩道いわみちをとおリ、西岩道にしいわみちのうらまできて、足あしを
とめた。

「ほほう、これが西岩道にしいわみちか。きょうのしごとはじめの村むらだが――」。
武士ぶしは、街道かいどうのはしに立ち、つつみの下のひとつの小さい村むらをみ
つめた。一見いっけん、平和へいわにみえる村むらも、喜びよろこや悲しかなみをひめている。

武士ぶしは、ちよつと空そらをみあげ、太陽たいようのいちをたしかめた。街道かいどうは
川のながれにそつて、ぐるぐるまわっているので、西にしをむいている



かとおもうと、いつのまにか、南をむいているばあいがある。

武士は、すぐに大福帳のようなみのがみの帳面と、こしの矢立をとりだした。矢立は、すみつぼのついた筆入れである。

武士はたったまま、かきなれた手で、すらすらと筆をはしらせた。

西岩道村。

西北に、金草川通りあり、つつみの東がわに、わらやねの民戸たちならぶ。

そこまでかいた武士は、もうい

ちど村をみなおした。まず大きなたてものは、寺であり、総がわらの家も二けんある。かなりがっしりしたかまえである。村はずれのすこしはなれたところに、鎮守の森がみえている。

村の東南に、麦をまきつけた田がひろがり、村北や池のまわりは畑となっておる。この村はいつたいに土地がたかいようである。

武士は、たかいつつみの上から、村全体のようすをみて、ちいさな略図にかきこんだ。そして、つつみの小みちをとおって、村の中へおりにいった。これからこの村の聞きとり調査をはじめるのである。毎日のしごとながら、新しい村へ足をいれるときは、心がひきしまる。えりを正して、その村のしあわせをいのりたい気分になる。武士は、まず庄屋のいえにいく。さすがの大地主、家のかまえがいい。門立ちの総がわらである。庄屋の喜三郎にいろいろたずねてから、村のだれかれにもきいてみる。そして、筆をはしらせる。

——小字は四つ。村東、村南、村北、池廻りなり。

——村南には田が十二町五反、村北には畑が十四町四反あり。

——昔は四百五十六石あまりの村高があつたのに、今は二百七十二石あまり。

——昔は二百四十九人、馬二十五ひき。今は百七十七人、馬三ひきなり。

——武士は筆をやすめ、その数字をにらんだ。石高も、人口も、馬の

数までが・た・んとへっている。村の貧しさが身にこたえる。

——そういう中で格別なるは岩次郎。総がわらのりっぱなまえ。

——もともと、この家も貧なりしが、岩次郎の父親がよく家業おこす。

はじめ、薩摩守のお手伝いぶしんのとき、人夫にでて金一分もう

け、それから米あきないになり、身代をきづく。高七十石持なり。

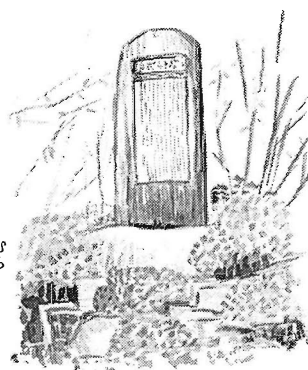
——武士は、筆をとめた。村じゅうが、とたんの貧しさに落ちてゆく

とき、この家一けん、大長者となり、龍、天へ昇つたのである。

——この武士。尾州藩士、樋口好古足斎。『濃州徇行記』著者。

へ広幡がうんだ国学者 田中道磨の生涯

白茂七



むかし、飯ノ木に茂七という男が、ふたりおつてな。村びとたちは、色が白くて、せのたかい方を白茂七、赤らがおで、せのひくい方を赤茂七とよんでいた。

ふたりとも、まずしい百姓のこせがれであつた。だが赤茂七は、口がたつしやで、汗をながしてはたらくことより、いつも、かしこそうに村のせわなどをしていた。白茂七は、すすでまっくろになつて屋根ふきをしたり、泥まみれになつて堤づくりの人夫をしたりしていた。白茂七は、いつも昼のあいだは、黒茂七であつた。

その白茂七には、年老いた母があつた。その母がなくなると、白



茂七^{もひち}は、ある夜^よ、ぼつねんと村^{むら}を
でて、どこかへいつてしまった。

それから、どこからともなく、
風^{かぜ}のたよりで、「白茂七^{しろもひち}が、東海^{とうかい}
道^{どう}でかごかきをしているそうな」
と、飯ノ木^{はんのき}の村^{むら}びとたちの耳^{みみ}にま
でながれてきた。

しかし、それも風^{かぜ}のようにきえ
ていくと、そのあとは、だれも白^{しろ}
茂七^{もひち}のことを、口^{くち}にするものはな
かった。

小さなわらやねの家^{いえ}もくちはて
て、ぺんぺん草^{ぐさ}がおおっていた。

そして三十年の月日がながれた。

ある日、頭のつるりとはげあがった白茂七が、なつかしいふるさとをたずねた。そして、これも頭のうすくなつた赤茂七と、村の辻堂のまえで、ばったりとあつた。

「やあ、茂七つあんではないですか。わたしも、茂七ですよ。」

「おうおう、だれかとおもえば白い茂七つあんですね。おたっしやでなによりですなあ。どこに、どうしておられますか。」

それから、ふたりは、辻堂のえんがわに腰をおろした。かたや、すっかり都会のいきよさんであり、かたや、あいかわらずの百姓姿であつたが、ふたりは幼友だちであつた。白茂七がいった。

「わたしは、子どものころ大垣の平流軒という本屋へこぞうにだされたでしょう。あれが、わたしの一生をきめたのでした。」

「そうでしたなあ。わたしは野良しごとばかりやったで、あんた

がうらやましかったよ。」

「いやいや。ずいぶん、こづきまわされて苦労しましたが、そのあいさに、本がすきになり、夜、かくれては、読みふけりました。」

「へえっ、そうでしたか。そして、いい若者でかえってきた……。」

「ええ、白茂七、赤茂七といわれたところですねえ。本を読む自由がほしくて、本を買うお金がほしくて、土方になったのです。」

「へえっ、それはしらなかった。そして、東海道のかごかきに……。」

「ええ、こんどはいい先生につきたくて、学問させてくれる人をつけたくてねえ。でも三年目に、いい人にめぐりあいました。」

白茂七は、それ以上くわしい話はしなかった。が、赤茂七には、

その苦労のほどがよくわかった。しかし、赤茂七をはじめ、飯ノ木の人たちには、このかつての白茂七が、田中道磨先生という、日本で指おりの大学者であろうとは、おもいもよらぬことであつた。

へ日本にっぽんの古いことばをしらべた大学者だいがくしゃへ

田中道磨先生のこと



- 一、江戸えどのなかごろ、飯ノ木村はんのきむらにうまれた。茂七もひちといった。
- 二、子どもこのころ、大垣おおがきの本屋ほんやではたらき、本ほんがすきになる。
- 三、わかいとき、土方どかたや、やねふぎとなり、勉強べんきょうにはげむ。
- 四、いい先生せんせいにつきたいと、東海道とうかいどうのかごかきになる。
- 五、三十四さいのとき、学者がくしゃ、大管中おおすがなか養父やぶの弟子でしとなる。
- 六、大管おおすがのしょうかいで、大学者だいがくしゃ、賀茂真淵かもものまぶちについてまなぶ。
- 七、国学者こくがくしゃとして大阪おおさかへでたが、うまくいかず、くろうする。
- 八、四十八さいのとき、名古屋なごやで講座こうざをひらく。弟子でし三百人ひゃくにんをもつ。
- 九、大学者だいがくしゃ、本居宣長もとのおりのながにまなぶ。万葉集研究まんようしゅうけんきゅうなど、十七冊さつまとめる。
- 十、六十一さいのとき、名古屋なごやでなくなる。国学こくがく五大人だいじんのひとり。

国学者・田中道磨があらわした本

- | | | |
|-----------|------------|------------|
| 一、選集・万葉徴 | 七、万葉集・地名抄 | 十三、手向草 |
| 二、万葉集・東語栞 | 八、万葉集・抄 | 十四、天明随筆 |
| 三、万葉集・問答 | 九、榛木翁・歌集 | 十五、古書・地名録 |
| 四、万葉集・類句集 | 十、道丸・随筆 | 十六、新刻・古今疑問 |
| 五、万葉集・類詞略 | 十二、田中道磨・歌集 | 十七、御国詞・活用抄 |
| 六、万葉・名所歌抄 | 十三、暗愚抄 | 以上十七冊 |

〔道磨の死をなげく本居宣長の追弔文〕（鈴屋集……一部）

ゆめか およつれかも 道まるは、いのちにきと 人ぞつけつる。
 かなしい。 ひさにし見ねば 恋しけく ありけるものを。
 えかなしゑ、 われは かなしい。
 ああ いたましく、 わたしは かなしい。
 えかなしゑ、 われは かなしい。
 いいつたえてきた 神無つき（十月） かみのいないつきというが、
 いひつぎきたる かみな月、神なき月とたまちはふ 神もなければ。
 ことばのころをさぐつてきた みちまろの いのちがきえたと 大きくが悲しき。
 言たまの道いそしみし 道まるを、いのちにきと

へ広幡の三つの村を犠牲にした代官の治水政策

はだか村



そのむかし、洪水にくるしんだ村びとたちは、じぶんの村のまわりに、大きなつつみをきづいて村をまもった。それを輪中という。

たとえば、飯ノ木村、大跡村、大跡新田村の三つの村は、ひとつのおかこいつつみをつくって飯ノ木輪中といった。上之郷村、下笠村、大野村、舟付村、栗笠村の五つの村も、ひとつのつつみにかこまれて下笠輪中をつくっていた。

ところが、どんなにつつみをつくりたくても、おゆるしのでない村が、多芸輪中のなかに三つあった。金草川にそって村をつくっている岩道村と、西岩道村と、口ケ島村であった。



「おらたちの村ばかり、すってんてんのはだか村でおれなんて、まったくひどいわな。」

「せめて、一まいのきものを着せてほしい。村をまもる一ぼんのつつみをつくらせてほしい。」

おらたちの村を、よそ村の犠牲にせんでほしい。」

村びとたちは、庄屋さんをうごかし、なんとなくお上へおねがいました。

しかし、お上のへんじは、きまっていた。

「おまえたちのねがい、すでにきいてある。慶安三年の枝広の大
水のあと、二つのつつみをつくらせたではないか。」

ひとつは、ロケ島くちがしまの上手かみてのあほよげじゃ。あれで村上むらかみからの落
水みずは、いちおう金草川かなくさがわへあつめることになっておる。

ふたつめは、三ツ屋みと有尾新田ありおしんでんをむすぶつつみじゃ。あれは、
いま、こわれているが、村下むらしもからおいあげてくる上水あげみずをくいとめ
ることになっておった。」

代官だいかんは、こうしてなんだかんだというけれども、村比むらひとたちは、
その治水政策ちすいせいさくのやり方かたをみぬいていた。言い分いぶんは、いっぱいあった。

「そりゃあ、押越おしこしのあほよげつつみは、落水おとしみずをひろってくれて、た
しかに、ありがたいわな。けど、あれはなにも、おれたち岩道いわみちや
西岩道にしいわみちのためにつくったんじゃねえ。飯ノ木はんのきや大跡おおあとから、下池しもいけの
方ほうへかけての多芸輪中たぎわじちゅう三十か村そんへの出水でみずをおさえるためじゃ。」

この三つのはだか村むらの中でも、とりわけ土地とちのひくい岩道いわみちにとつては、生きるか死ぬかの問題もんだいであつた。代官だいかんにだした嘆願書たんがんしょには、へ二十一年間ねんかんに九回かいの入水にゅうすい、村むらはほろびてしまふと書いてある。「まわりの村むらが、おかこいつつみで水をいれんようにするだけ、つみの外そとのわしらの村むらは、水みずがぐんぐんふかくなる！ 代官だいかんは、わしらの村むらを洪水こうずいのときの遊水池ゆうすいちにしようとしておるんじや。だから村下むらしもからの水みずをくいとめる三ツ屋みやの十八間けんつつみも、大跡新田おとしんでんにさしつかえるといつて、わしらがなんどたのんでも、なおす気きはまったくない。わざと岩道いわみちへ水みずみちをあけておる。そして、神明堂しんめいどうから西岩道にしいわみちの南みなみまで、ぐるつと七百七十間ひゃくしちそけんのつきめぐり普請ふしんをしてほしいとねがいでたら、上之郷村かみのこうむらがどえらい反対はんたいしておつてさ。ついにおじやん、ふんだりけつたりの話はなしさ。」
こうして三つの村むらは、ついにいつまでも、はだか村むらのままであつた。

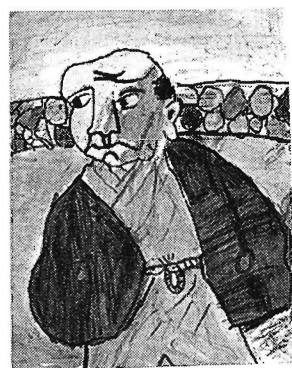
へ広幡の悲喜こもごもをえかく 人物像

五人の男

むかし、広幡にこんな人があつたと。

その一は、岩道の岡田藤左衛門さんである。江戸の中ごろ、宝暦の人である。『西濃風俗志』という本に、つぎのようにでてくる。

——うつればかわる飛鳥川とはいが、このように大きくかわるものか。この人、むかしは西濃の百姓大将とよばれるいきおいであつた。弟の寿安どのはひろい学問を身につけた名医であつたし、その下の弟の藤蔵どのも弁舌さわやかで、みな人の知るところであつた。そして、この三人兄弟のなかのよかつたこと、人もうらやむ一家であつた。





それなのに藤左衛門どのがなく
 になると、この家はみるまにおとろ
 えていった。その子の藤十郎ど
 が、不足いっぱいの人で身をもち
 くずし、家をたたんでしまったの
 である。

あとあと、藤左衛門どこの妻子
 のご難儀は、まことにあわれであ
 った。たとえ億万貫のあとをゆず
 っても、時がくると貧しくなっ
 てしまふことは、よくあることであ
 る。

藤左衛門どこの家がらは、なら

ぶもののないほどで、曾祖父は美濃国の名代官、岡田将監であり、その遠い先祖には、楠正成があるという。藤左衛門どのの弟の寿安どののは、本家のいくじない没落をわすれようとしてか。楠に姓をあらためてしまった。菊水の紋章や、正成の遺訓が伝わっていたと。

その二は、飯ノ木の田中家俊さんである。この人は、やはり江戸の中ごろに、『埴生のすず風』という本をだしている。その中にこんなおもしろいことを、ふたつかいている。

——義朝が、源氏の白旗を飯ノ木にのこしていった。それを土地の人たちは神としてまつり、あがめてきた。四十年ほどまえの宝永のころまで、高木といううちの屋敷に、小さなやしろがあつたのがそれである。しかし、いまはそれもくずれてしまつて、なにもない。

——二十年ほどまえ、享保のころであつた。榛ノ木の氏神、八幡神社にそのご神体がないのをかなしんで、丸毛という人が、ご神体をいれた。すると村の百姓たちは、口ぐちに、「むかしからなかったご神体を、いまさら、あらためていれても、なんのいいことがあるう」と声をあげた。丸毛という人は、あまりみんなが、口やかましくいうので、ついにもこのように、ご神体をすててしまった。

その三は、鷲ノ巢の鬼面山谷五郎さんであるが、この人の母親は飯ノ木の西脇庄八さんの娘である。鬼面山は、第十三代の横綱である。江戸の中ごろ、文政の世であつた。

子どものころは、母親といっしょによく飯ノ木の在所へあそびにきて、庭の柿の木などにのぼっていたという。また、母が来客のために、いもじるをすりばちにいっぱいづくり、ごはんを二升もたい

ておいた。そして、ちよつととなりの家へ用たしにいつて、るすにしていた。その間に、谷五郎はそれをすっかりたべて、そしらぬ顔をしていたとつたえている。

二十五さいで、すもうの世界へはいり、慶応元年に大関、明治二年に横綱になっている。米十二俵をくくつて、いつきにこれをおかづぎあげるほどのすごい力をもっていたという。

その四は、大跡の北村最證さんである。西源寺の和尚さまである。江戸の中ごろの天保のうまれで、幕末、安政のころから明治のはじめまで、寺子屋をひらいていた。

広幡で、ただひとつの寺子屋であった。ほぼ三十人の寺子たちに読み、書き、経文をおしえた。最證さん自身も、漢学がとくいで、『四書五経』などを大きなこえで、読ませていたと。

その五は、俳人はいじんの西脇梅岡さんである。飯ノ木はんのきの人ひとで、名なは善蔵よしぞうといった。江戸えどの中なかごろ、文化ぶんかの世よに生まれ、大跡おおあとの耕月庵こうげつあんさんとともに魯松庵ろしゅあんについて学まなんだという。

咲く花さ はなの きざしふくみて 落葉おちばかな。

源氏橋げんしばしのそばに、義朝よしともをしのんでたてたこの句碑くひがある。



へ 広幡の俳人、焦門十四世の六之丞さんの一生

耕月庵



むかし、大跡に戸倉六之丞さんという、ちよつとかわったおじいさんがあった。絵もなく、書もなく、漢詩もつくる、俳句もつくる人であった。ひとりでそういうものを、たのしんでいるかとおもうと、なかなか、つきあいのひろい人であった。

とりわけ、この人をいろいろるものに、ふたつあった。

ひとつは、耕月庵という名の俳人である。

遅楽や魯松という先生について、俳句をまなんだ。耕月庵がつくった俳句は、『有喜久佐集』という句集になっている。そしてついに、芭蕉のながれをつぐ十四代めの先生となった。



養老寺に、耕月庵の句をほりこ
 んだ石の碑がたっている。この寺
 は、老いた父親をだいじにしたた
 め、水がおさけになったという源
 丞内が、千年のむかしにたてたと
 いわれている。

孝の徳 世よにながれて
 滝すずし

耕月庵が、十四代の大先生にな
 ったおいわいは、本巢郡北方の西
 運寺でおこなわれた。全国から、

芭蕉はしやうの俳句はいくをまなんでいる人ひとたちがあつまつて、りっぱな句会くかいがひ
らかれた。そのときの俳句はいくを耕月庵こうげつあんがまとめている。『蘭らんの加保理かほり』
という句集くしゅうである。

そして、この日ひをきねんして、耕月庵こうげつあんたちは、芭蕉はしやうの俳句はいくを、石
にぎざんで、養老ようろうの千歳楼ちとせろうのまえにたてた。そのむかし、芭蕉はしやうが、
そのふたつの手てで水みずをすくつてのもうとしたら、もうおいしい水みずが
齒はにつたわつてきたという句くである。

擲むすぶより、はや齒はにひびく 泉いづみかな

もうひとつ、この人ひとをかたるものは、耕月庵こうげつあんという江戸えどの末すえごろ
の文化人ぶんかじんとしての社交しゃこうであった。じつにおおくの人ひとが、耕月庵こうげつあんを
たずねている。西美濃にしみのの学がくある人ひと、芸げいある人ひと、道みちをもとめる人ひとが、

すすんで、この人^{ひと}にちかづいた。はるばる、とおくからやってくる人もあつた。中^{なか}には、一年^{ねん}あまりもここにどまつた詩人^{しじん}や俳人^{はいじん}もめずらしくなかった。

耕月庵^{こうげつあん}は、おとずれる人^{ひと}を心^{こころ}よりもてなした。人^{ひと}をあかせることのない、みりよくがあつた。

大垣藩^{おおがきはん}の財政^{さいせい}をみごとにたてなおした小原鉄心^{おはらてつしん}も、

「わずらわしい街^{まち}のにぎわいよりも、老牛^{ろうぎゅう}のねむるような山^{やま}近い村^{むら}の方が、ほんとうのおもむきがある」

といつて、ここをおとずれ、酒^{さけ}をくみかわし、詩^しを語り宿^{とま}っている。

耕月庵^{こうげつあん}は、としおいてから脚^{あし}のやまいで、九年間^{ねんかん}も床^{とこ}についていた。むすめむこの竹圃^{ちくほ}は、詩人^{しじん}であり、書家^{しょか}であつたが、よく義父^{ぎふ}につかえ、孝養^{こうよう}をつくした。『養老山房詩鈔^{ようろうさんぼうししやう}』という二卷^{かん}の詩集^{ししゅう}がある。広幡小学校^{ひろはたしょうがっこう}の前身^{ぜんしん}である時習学校^{じしゅうがっこう}をひらき、校長^{こうちょう}となつた。

へ広幡^{ひろはた}の農民^{のうみん}がうったえた 高田^{たかた}そどうの一夜^{いちや}ぐ

雪^{ゆき}の朝^{あさ}



こがらしのふく、さむい夜^{よる}であつた。飯^{はん}ノ木村^{のきむら}の人^{ひと}びとは、夜^よな
べのしごとや子^こどもねかせの手^てをやすめ、じつと耳^{みみ}をすませた。と
おくの村^{むら}の寺^{てら}のかねが、きぜわしくなりだしたのである。

ひとつの寺^{てら}ではない。口^{くち}ケ島^{がしま}も、大跡^{おおあと}も、あちこちのかねが、い
つせいになりだしている。そして、ついに大^{おお}きなふといひびきが、
自分^{じぶん}どこのうちも、村^{むら}もつつみこんでしまった。すぐうらの長田^{ちやうえん}寺^{さん}
のかねもなりだしたのである。

すると雨戸^{あまど}のそとに、かんだかいこえがひびいた。

「おお、野火^{のび}だ！」



「石畑野のつみわらが、いくつも
もえておるわ。」

「あそこへいくんだ！」

それとかけだしてゆく、いく
つかの足おとがひびいた。寺のか
ねと、西の森のあかあかもえあ
がる野火が、村のしゅうをしきり
にさそっている。くろいおとなた
ちのかげが、三三五五といそぐ。

——それは江戸幕府がたおれ、あ
たらしい世の中にむかってゆれう
ごいていた明治二年の十二月二十
日のことであつた。

飯ノ木村をはじめ、まわりの村むらでは、まいとしつづく津屋川や金草川のこうずいで、米はろくにとれず、たべるものもなかった。それでもネングやシャッキンのとりたてはきびしく、土地を返すか。夜にげるか、娘をうるかのくるしさであった。こういう日ごろのうつぶんが、村びとたちをいやおうなく世なおしにかりたてていた。石畑野にあつまつた人たちは、いくつかのかたまりにわかれて、とりたてのきびしかった地主や、金かしなどのお金もちや大きな店をおそつた。はちまきやたすきをかけた男たちが、竹やりやむしろばたをおしたてていた。かけやや、くわをかたにしている人もあつた。ほら貝がなりひびき、村びとたちはときの声をあげた。村の八幡さんのちようちんをもつた人たちが、みんなをさしずしていた。人びとはめざす家につくと、あま戸やたてぐをこわし、土足でおりこみ、手あたりしだいに柱をきずつけ、かべをうちこわした。

やがて、ながもちやたんすをみつけると、ワツシヨワツシヨともちだして、家のまえのみぞへすてたりした。ちようちんをもつて、さしずをしていた男が、その中からネングやシャツキンのかきつけをとりだし、くしゃくしゃにやぶりさり、みぞの泥ぬまにおしこんだ。そこでみんなのかんせいがあがった。

また酒づくりの店へおしいった人たちは、いきおいにのつて、酒だるをつぎつぎとこわし、そこへはりついて、酒をむちやくちやにのみたくっていた。おおきな酒だるからながれてた酒は、まわりのへこみにたまつて、あたりいちめん、酒のいけになっていた。

こうして明方まで、あれにあらたれた人たちは、白くふりだした雪の中を、押越の八幡さんへもどつてきた。そしてあちこちで、たき火をたいて、体をやすめた。だれにもさむさはなかった。まずしさやくるしさの大もとであるネングやシャツキンのかきつけなど、もう

この世にのこつてはいない。雪のまう中で、まつかにもえた村びとたちは、かずをたのんだ大きな力にこうふんしていた。

——ここで、おにぎりをほうばったら、みんな笠松役所へおしかける。そして、笠松県知事に百姓のくるしみをうったえる。そんな計画であった。

だがそのまえに、急をきいた大垣城からたくさん藩兵がくりだした。そして、鉄砲隊がかまえるなか、つぎつぎと二百にのぼる人たちをとらえていった。

このさうどのいちばん中心になったのは、飯ノ木村の周吉さんであった。周吉さんは、ふだん、山のえだ一本、みなくちの石ひとつ、よそのものには手をつけない正直ものであった。だが村びとたちのくるしみをみて、じつとしておれなかったのであろう。

周吉さんは、なかまの若者たちによびかけて、村の人びとをたち

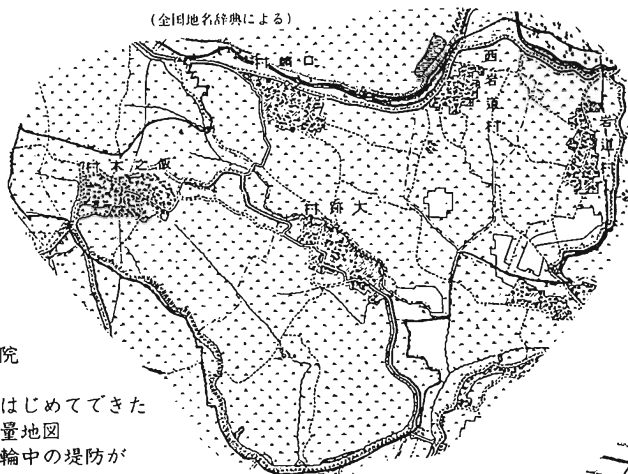
あがらせ、県知事^{けんちじ}にうったえていこうとしたのである。中心^{ちゅうしん}になつた十人^{じゅうにん}ほどの人^{ひと}たちは、からかさの骨^{ほね}のあいだに、たちあがる日^{にち}時^じと参加^{さんか}する村^{むら}の名^なを^をかいて、ひそかに村^{むら}むらをまわっていたという。押越^{おしこし}の八幡神社^{はちまんじんじや}でたくさんの人^{ひと}たちがとらまつたその夜^よ、三十七人^{さんじゅうしちにん}をこす雪^{ゆき}の牧田^{まきだ}が^がわらに、前夜^{ぜんや}をしのぐ、五百^{ひゃく}の人^{ひと}びとがあつまり、世^よなおしをもとめて高田^{たかだ}のまちへくりだしたと伝^{つた}わっている。



めいじ こ あきめい
明治のころの小字名

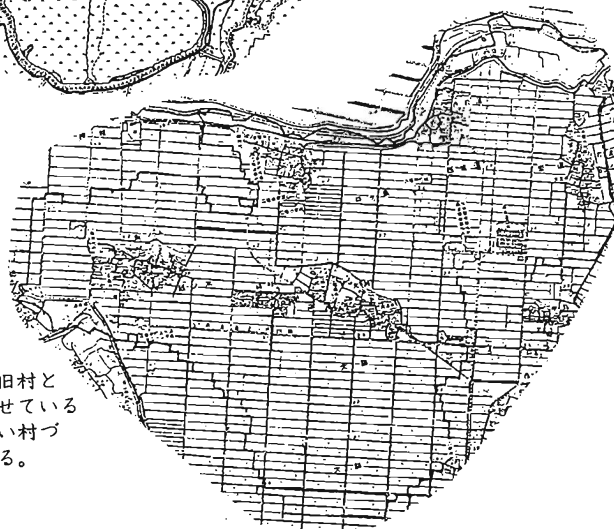
【広幡付】	八中 寺田 中島 堤外
口々島	藤ノ木 東倉 大墳 源氏橋 山道 五段田 扇田
飯ノ木	殿海道 番匠田 居村 東海道 盛墳 市道 休息所 安久
大 跡	田中 宮前 番戸 赤池 東畑 以ノ戸 段割 空 町 堤外 平
西岩道	中新白 下新白 戸井ノ口 笹埴清水 東浦 村前 西川 道ノ上 茶ノ木原 六段長 中道 飛地 下中道 長代 南屋敷 東屋敷 北屋敷 西楽畑 中楽畑 川北 村北 井敷
岩 道	村内 林 榊柳 広田 小橋 一本木 長代

(全国地名辞典による)



明治24年
1891
国土地理院

- 日本ではじめてできた近代測量地図
- 飯ノ木輪中の堤防がしつかりのこっている。



昭和60年
1985
中日本航空

- 緑町・南岩道が旧村とちがつた姿をみせている
- 土地改良で新しい村づくりがうかがえる。

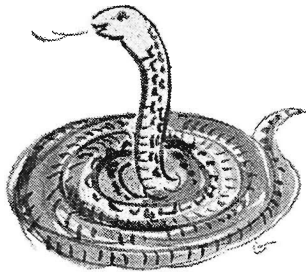
村がかわる 心もかわる
ひやくねんまえ あと ひろはたちす
百年前と後の広幡地図

三^{さん}の章^{しょう}

広幡村^{ひろはたむら}

今^{いま}はむかしの
ものがたり

(明治^{めいじ}・大正^{たいしょう})



へ広幡^{ひろはた}にはじめて学校^{がっこう}が生まれた！ その産声^{うぶごえ}

ふたつの学校^{がっこう}

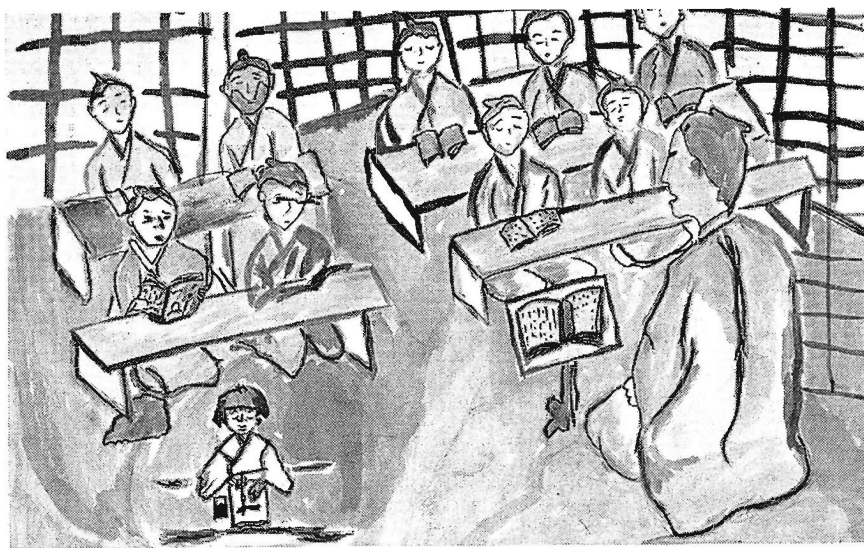


むかし、百年^{ひゃくねん}ちよつと前^{まえ}のことである。

さむらいの世^よの中^{なか}がおわつて、バイカラさんは、ざんぎり頭^{あたま}で洋服^{ようふく}をきはじめ、昔^{むかし}なつかしい人^{ひと}は、まだまだ、ちよんまげをのこしていたころである。明治^{めいじ}六年^{ねん}の五月^{がつ}であつた。

大跡^{おおあと}と岩道^{いわみち}に、ふたつの学校^{がっこう}が生まれた。

大跡^{おおあと}は時習^{じしゅう}学校^{がっこう}といい、岩道^{いわみち}は立心^{りつしん}第二^{だいに}学校^{がっこう}といつた。国^{くに}から「この村^{むら}にも、学校^{がっこう}をつくれ」という呼びかけがでて、雨^{あめ}のあとのたけのこのように、のこのこ生^うまれたのである。この二つの学校^{がっこう}は岐阜^{ぎふ}県^{けん}の第百三十六番^{だひゃくさんじゅうろくばん}、第百三十七番^{だひゃくさんじゅうしちばん}と、第百三十八番^{だひゃくさんじゅうはちばん}の小学^{しょうがく}区^くであつた。



校舎もない。運動場もない。お金もない。でも、やっぱり子どもに、読み、書き、かんじようは、学ばせたい。汽車がはしり、電話でしゃべれる世の中に、しっかり生きる力をつけさせたい。

大跡村、飯ノ木村、ロケ島村、明徳村の戸長さんがあつまって、

「そんなら、大跡の随陽寺さんを借りよまいか。」

「そうや、そして校長さんには、学園のある戸倉さんにたのもまいか。」

と話がきまった。

戸倉竹圃さんは、この話をきいて、うーんとうなった。ひきうけたからにや、りっぱな学校をつくりたい。うんと勉強する子を育てたい。そうや、勉強というのは、時どき、くりかえすことで身につく。時どき、習うことで、学んだことを忘れない。そして深めていくことができる。がんばる心が育ってくる。

竹圃さんは、ここまで考えて、はたとひぎをたたいた。

「時どき復習する。くりかえし、がんばる心。——時習学校。これはいい名まえだ。これを開学の心としよう。」

六さいで入学させ、四年生で卒業させる。一年を二つにわけて、勉強の中味を八級にわけろ。そして、半年ごとに試験をやつて、うかつたら上へあげることにする。中味は、読物と算術、習字と作文、そして、世の中のことや自然のことは、問答という時間で学ばせる。

体操の時間もつくる。よし。楽しい学校にするぞ！

四つの村の戸長さんは、竹圃さんから、学校のめあてや、勉強の中味をきいて、さっそく、子どもと先生をあつめにかかった。

授業料は一銭から六銭。家の財産や収入によってきめられた。

「どん百姓に、学問なんかいますかい。へたに学問させたら、う

ちのあとをとつてくれんようになる。それに金がいってねえ。」

という家が多かった。じっさい時習学校へ入ったものは五十五人（男

三十五、女二十）入らなかつた子どもは百七十一人であつた。先生

は戸倉竹圃さんと田中三郎さんと戸倉三之介さんの三人ときまつた。

西岩道村、岩道村、上之郷村は、岩道の常性寺に、立心第二学校

をつくつた。第一は下笠、第三は大野にあつた。校長は、常性寺の

和尚の弟にあたる野村嶺律さんで、子どもは三十人であつた。立心

とは、志をもつ、めあてをもつ——という意味である。

へ^{ひろはた}広幡で死傷者^{ししやうしゃ}を二十四名^{めい}もだした濃尾大震災^{のうびだいしんさい}！

マクニチユード

M 八・四



むかし、ちようど百年^{ひゃくねん}ぐらいまえに、とつても大きな地震^{おおいしん}があつたと。もう、そのときのことをしている人^{ひと}は、広幡^{ひろはた}にはいない。

そしてそのときのこわさを、親^{おや}からきいた人^{ひと}も、もうほとんどいない。関東大震災^{かんとうだいしんさい}を、はるかにしのぐ大地震^{おおいしん}であつた。

あさがたの六時半^{しはん}すぎであつた。とつぜん、ゴウーバリバリツと天^{てん}がくずれるような音^{おと}がした。と、おもうまもなく、グラグラと大地^ちがゆれ、つづいてガタガタと上下^{うえした}に大きくゆれた。人^{ひと}びとはおもわず、ころげるように外^{そと}へとびだした。なにをもつひまもなかった。

「地震^{じしん}だあ。やぶへにげろ。」声^{こゑ}をかぎり^{こゑ}にいった人^{ひと}も、大地^{だいち}のゆ



れで、たつておれなかった。

——ものすごい音^{おと}がして、目のまえの寺^{てら}がたおれていく。かねつき堂^{どう}もたおれた。あちこちの家^{いえ}がくずれ、かたむく。戸^とや、しょうじ、戸^とだなや、壁^{かべ}が、こわれていく。

——もうもうと、天^{てん}へ土^{つち}けむりやほこりがまいあがる。あわてふためた人^{ひと}びとは、あるくこともできず、よつんばいになって、大地^{だいち}にしがみついている。

はじめのゆれは、西^{にし}から東^{ひがし}へ、ダ、ダ、ダ、ダ……と、すすんだ

ようにおもえたが、それからのゆれは、東西、南北、上下、左右、むちやくちやにゆれつづけた。

「たすけてくれえ。体がいたいよう。」

こわれた家にはさまって、さけんでいるもの、その下じきになつて、びくともうごかぬもの。手をおられ、足をとられておるもの。

親は子をよび、子は親をよび、まるで地獄であつた。

田んぼは、いたるところがおちこんで、そのすきまから泥水がふきでている。あちこちの池の魚は、水とともに、ザブンザブンと大きくうちあげられ、水もごっそりすくなくなつた。

二十分ほどの大ゆれで、世の中はかわってしまった。広幡もひどかつたが、となりの舟付や栗笠が、養老町ではとりわけ、ひがいがおかつた。この二つの地区で四十人が死に、百人が負傷した。

明治二十四年の十月二十八日であつた。濃尾大震災といわれ、マ

グニチュードハ・四という激震だった。揖斐川の上流で、このときできた断層は、百キロにおよんだ。

十二月のはじめまで、ゴトゴト、ゴトゴトと余震がつづき、一か月ほども、庭にこやがけをしてくらしていた。

広幡では、岩道で三人、西岩道で二人、大跡で三人のあわせて八人が、にげおかれて家の下じきになって死んだ。そして、大けがをした人は、岩道の五人をはじめ、ぜんぶで十六人もあったという。すつぺりこわれた家は百二十五けんもあり、半分いじょうこわれた家は二百八けんにのぼる。あまりこわれなかった家は、広幡ぜんぶで六けんしかなかった。どんなにひどかったかが、わかる。

大垣町をかかえる安八郡は、千二百十三人が死に、二千二十五人が大けが、一万六千げんが、こわれたり、やけたりした。

それ以来、こんな大地震は、まだ日本におきていない。

へ広幡^{ひろはた}をすっかり泥^{どろ}にうめた津屋^{つや}・金草^{かなくさ}の氾濫^{はんらん}へ

西美濃^{にしのみ}大洪水^{のだいこうずい}

むかし、百年^{ひゃくねん}に一度^{ひと}あるかなしかの大地震^{おおじしん}があつてまもなく、これ^{ひゃくねん}もまた、百年^{ひゃくねん}に一度^{ひと}あるかなしかの大洪水^{のだいこうずい}がやってきた。

広幡^{ひろはた}の人^{ひと}びとはもちろん、西濃^{せいろう}いったいが、ふんだり、けつたりであつた。

明治^{めいじ}二十九年^{にんねん}の七月^{がつ}十九日^{にち}、夜半^{やはん}より、雨^{あめ}と風^{かせ}がふきあれた。翌^{よく}二十日^{にっか}の朝^{あさ}、雨^{あめ}はますますはげしくなり、どの川^{かわ}もまんまんとあふれだした。堤防^{ていぼう}のあちこちが、きけんとなつた。昼^{ひる}すぎになつて、いよいよ、水^{みず}かさをまし、ついに堤防^{ていぼう}をこすところがでてきた。

どしゃぶりの雨^{あめ}は、まるでたらいの水^{みづ}をくつがえしたようで、水^{みづ}





防作業はすすまなかった。そして
二十一日、ついに金草川や津屋川
のつつみが切れ、広幡の方へ、水
がどんどんあふれてきた。

カンカンカン、カンカンカン、
あちらでも、こちらでも半鐘が
なりひびき、人びとは着のみ着の
ままにげだした。泥水がそのあ
とを追い、またたくまに泥の海に
なってしまった。

二十二日には、ようやく雨はあ
がったが、この集中豪雨のつめあ
とは、大きかった。広幡をふくむ

養老ようろういったいのつつみは、ずたずたに切れ、橋はしはおち、家いえも田たも、
ざんぶと水みずにつかつてしまった。養老町ようろうちやうだけで、堤防ていぼうのきれたところ
九十四しよか所、おちた橋はしは八十しよか所、床ゆかの上うえまで水みずがついた家いえは八
百五十四ひやうじよけん、こわれてしまった家いえは二百六十六ひやうじよけんであつた。

人ひとびとは、あまりのむざんな姿すがたに、どこから手てをつけてなおした
らよいか、途方とほうにくれてしまった。そこへまたまた、台風たいふうがおそつ
て、きずあとをひつかきまわしたのである。一月つきあとの八月がう三十日にち
であつた。朝あさから雨あめがふり、北風きたかせがぶきみにふいていた。それが夕ゆう
方がたになって、はげしいあらしとなった。屋根やねがわらがとび、家いえは、
メキメキとなき、やがてくずれおちた。大洪水だいこうずいでよわりきつたとこ
ろへ、あらしのおみまいであつた。

そして、さらにひどい大洪水だいこうずいがおそつたのである。台風たいふうがとおり
すぎたというのに、空そらはいっこうにはれあがらない。雲くもがどんどん

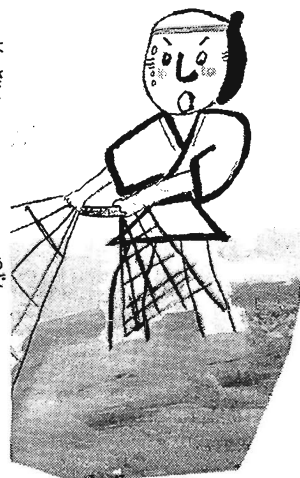
わいてくる。こんなことはないはずだと、空をみあげる村びとたちは、ぶきみな予感におそれおののいた。

冷たい雨がふったりやんだりの一週間め、九月六日の昼すぎであった。にわかに、かみなりがなりひびき、どしゃぶりがはじまった。夕方になって、その雨はいっそうのきびしさをもち、天をくつがえした。それは朝までつづいた。そして七日の夜からまたふりはじめ、八日、九日、十日とふりつづけたのである。七月の雨どころではなかった。十一日夜からまたきつい嵐となった。

七月に切れた堤防はまだなおっておらず、弱りきっていた。北は赤坂から南は伊勢湾、西は養老山から東は岐阜の金華山まで、ひろく大きな泥の大海になった。七月より一メートルも深い海であった。広幡をはじめ養老いっただいで、千の家が水につかり、千六百の家がこわれ、ながされたという。西美濃の大洪水である。

へ広幡の大水をつげる金草川の大蛇伝説

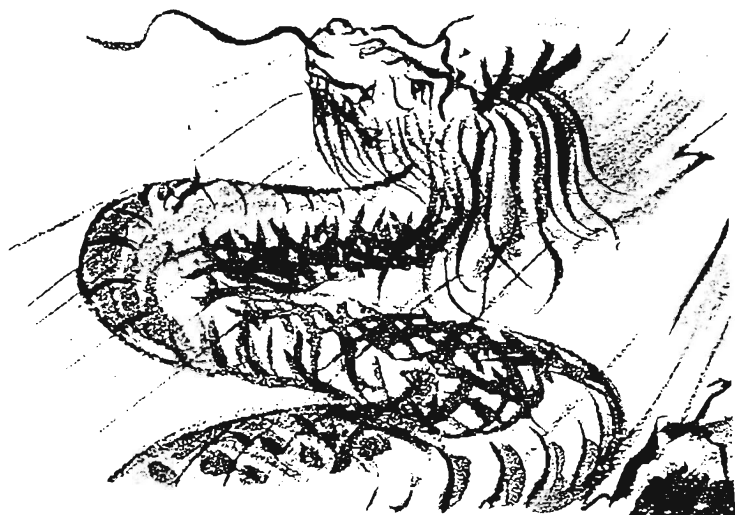
あばれ大蛇



ちよつとむかし、下高田に、喜平さと与作さという腕のたつたりのりようしがおつてな。まいにち、ロケ島のうらの金草川へでかけておつた。

そのころの金草川は、いまの西岩道の遊水地のように、よしや青草が、せだけほどもおいしげつていて、ひるまでも、ふつうの村人はあまりよりつかなかった。いわばここは、喜平さと与作さだけの魚とりばであつた。

ある夏の日、日がしずんでも、なんだか、むしむしする日ぐれどきであつた。喜平さは、いつものように、かたにじごくあみをかつ



いで、金草川^{かなくさがわ}のつつみをおりて
った。よしの中^{なか}をわけいって、水^{みず}
辺^べちかくにきたとき、喜平^{きへい}さの足^{あし}
は、とつぜん、くぎづけにされて
しまった。

よしや青草^{あおくさ}が、おびのように、
べったりとたおれているのである。
まるで、大きなまるたを、ずるず
るとひきずったあとのように、ず
っとむこうまでつづいておる。

「これは、いったい、どうしたこ
とじゃ。けさ、あみをあげにき
たときは、どうもなかったに。」

喜平^{きへい}さはつぶやきながら、おもわず、ぞみつとした。それはけつしてまるたのあとではない。ふとい生きものである。喜平^{きへい}さのあたまには、子^こどものころ、じっさまからきいた大^{だい}じやのはなしがひらめいた。

それは金草川^{かなくさがわ}のつつみがきれた大洪水^{だいにうずい}のまえに、大^{だい}じやのすがたをみたものがあつたというはなしである。そこから、大^{だい}じやがすがたをみせたら大水^{おおみず}になると、じっさまはいった。

まさか――、喜平^{きへい}さは、あたりをみまわして、ぶるぶるつとみぶるいをした。そして足^{あし}ばやに、じ・ご・く・あ・み・を・か・た・に・か・け・た・ま・ま、金草川^{きさがわ}のつつみをかけあがり、与作^{よさく}さのうちへむかった。

与作^{よさく}さは、喜平^{きへい}さのはなしをきいて、うーんとうなつてしもうた。ふたりは、どうにもがてんがいかなので、また川^{かわ}へやってきた。うすぐらい水^{みず}のほとりで、よしのたおれをみた与作^{よさく}さも、がたがたと

足をふるわせてしまった。

それからふたりは、十日ぐらい、金草川へいくのをためらった。

しかし、背に腹はかえられない。たべていくためには、あみをはらねばならぬ。ひるまのぞいてみたが、金草川にはなんのかわりもない。ふたりは、もう、じつとしておれなかった。

そんなおり、大雨がふって、金草川にあふれんばかりの水がでた。

「今日は大物がとれそうじゃ。もう、がまんできんわい。」

ふたりは、あみをかたにして、家をとびだしてきた。

明るい月が、水辺をてらしていた。川はばいっぱいにあみをはつて、あみのうごきをじつとみつめている。水の中では、大きなこいやふななどが、どんどんながされてきて、かかっているにちがいない。ふたりは、いきをころして水面をみつめていた。

と、そのとき、バシヤ、バシヤという水の大きくはねる音がきこ

え、なにかが、あみをぐいぐいとひっぱった。

喜平^{きへい}さと、与作^{よさく}さは、それとばかりに、あみをたぐった。はじめ、木のね^きっこでもかかったかとおもうほど、おもかったあみが、とちゅうから、すぽっとかるくなった。ふしぎな、てごたえである。ひきあげたあみをみて、ふたりは、あつとこえをあげた。あみはつかいものにならないほど、ぼろぼろにやぶけてしまっている。

「おお、あれは……。」

与作^{よさく}さは、ふつと川^{かわ}しみに目^めをみやったかとおもうと、声^{こえ}をとぎらせてしまった。喜作^{きさく}さも、その声^{こえ}でふりむいたとき、自分^{じぶん}の目^めをうたがった。

大水^{おおみず}の濁流^{だくりゅう}の上^{うえ}を、ふとい大^{だい}じゃが、みえかくれしながら、波^{なみ}をけって、川^{かわ}しもへくだっていったのである。

ふたりは、ぼうだちになってみていたが、われにかえると、あみ

をすてさったまま、ころがるようににげかえた。どこをどうはし
ったか。家^{いえ}についたときは、からだ^{からだ}がふるえ、口^{くち}もきけなかったと
いう。

その三日^{みっか}あとに、大^{おお}あらしがやってきた。どしやぶりの雨^{あめ}と風^{かぜ}が
一しゅうかんもふきあれた。金草川^{かなくさがわ}のつつみもきれ、広幡^{ひろはた}いったい
は水^{みず}すっかりになってしもうた。それはまことにあばれ大^{だい}じやのよう
であつた。あの喜平^{きへい}さと与作^{よさく}さがみた大^{だい}じやのせいであつたらうか。



へ広幡の古老がかたる風物詩・明治の世の中へ

八十年前



八十さいをこえて、ちよつと伝えておきたいことがある。広幡の五つの村の五つのはなし。わたしの子どものはなしである。

そのひとつは、オコリおとしの地藏さま。

ほら、ロケ島のお寺のまえに、こんどあたらしいお堂ができたやろ。あの地藏さまは、五十年ぐらいまえまで、もとの学校の東北のかどつこに、弁財天とならんでござった。

もつと前は、南の方の飯ノ木道のまがりかどにござらしたが、道がひろくなるたびに動かれて、とうとう、お寺の中へはいらした。



この地蔵さん。オコリおとしが
専門で、とってもご利益があつた
と。オコリというのは、今でいう
マラリアで、むかしは、ようはや
つたものである。

オコリにかかると、一日おきの
きまつた時間に、ひどいさむけが
でて、熱が高くなる。キナエンと
いうくすりはあつたが、みんなこ
の地蔵さまにたのんだものや。

朝はやく、だれにもみられんよ
うにおまいりすると、やがて、ケ
ロリとなおってしまう。じつは、

わたしも、そうしてなあったひとり。子どもをこころをおもいだすと、
ありがたくってねえ。そういう年寄りが、むかしのお礼にと、みん
なでお堂をたてさせてもらったんさ。

そのふたつめは、ピーヒョロ、ピーヒョロの伊勢神樂。

なつかしいなあ。大跡の戸倉さんどこへ、よう見にいったもんや
わ。タマリをつけた焼きもちや、あられをほうばりながらねえ。

二月ごろのあたたかい日に、カドいっぱいにむしろをしいて、一
日しっぽり見るんや。おとなも子どもも、みんなあつまって、たの
しみやったなあ。

はじめに、ドツケさんという道化役がでてきて、おもしろおかし
く万歳やら、茶碗つぎやら、剣の手さばきをやる。それから獅子舞
がはじまる。静かにうごいたり、激しくうごいたり、一ぴきでやつ

たり、雌雄二ひきでまったりする。天の岩戸のようすや、天狗のサルタ彦を演じたりする。さいごには、獅子が肩の上にたつて、花がさや扇でつやつぱい「おやまの道中」をやるのである。

いつも、おなじことをやるのやが、なんかいい見てもいいものやった。伊勢の松井嘉太夫さんの神楽ときまっておったよなあ。

そのみつつめは、農作物のできぐあいをうらなう御管。

一月十五日のあさ、飯ノ木の八幡さんの境内で、白米にあずきをいれたおかゆをたく。太いよしを二十センチぐらいに切りそろえて、麻ひもでゆわえて、神さまにそなえ、それを、おかゆの中へいれてたのである。すると、そのおかゆは、そのよしのあなの中へ、しずかにはいりこむ。そのはいりぐあいが、神さまのありがたいおつげなのである。

一本^{いっぽん}いっぽんのよしに、大麦^{おおむぎ}、小麦^{こむぎ}、麻^{あさ}、早稻^{わせ}、中稻^{なかて}、晚稻^{おくて}、大豆^{だいず}、小豆^{あずき}、唐きび^{とう}、里芋^{さと芋}、そば、ひえ、大根^{だいこん}、白菜^{はくさい}、平均^{へいきん}などと、きめてある。そのよしをしずかにわって、かゆの入り^{はい}ぐあいをみる。おかゆがたくさんはいつていると、その作物^{さくもつ}はたくさんとれるというのである。このうらないは、ようあたるといわれておった。

そしてそのよつつめは、わりめし、こがし、につき^{つき}の木^き。

まずごはんは、米^{こめ}三、麦^{むぎ}七のわりめしやった。まっしろの銀^{ぎん}めしなど、正月^{しょうがつ}とまつりしかあたらなんだ。ごはんのまえには、小麦^{こむぎ}をいつてこ^こなにしたコガシに番茶^{ばんちゃ}をかけて、ねってたべた。イモガユやニコミウドンなどもおおく、米^{こめ}をたべんようにしていたんやな。おやつには、肉桂^{にくき}の木^きのねっこをかじったな。すこし、ピリンとからかった。西岩道^{にしいわみち}の西脇^{にしわき}さんどこのうらに、ふとい木^きがあつて、

みんなでよく堀^ほらしてもらったものや。何でも口^{くち}へ入れたんやなあ。

さいごの　いつつめは　ピン・オトヨものごたり

口^{くち}ケ島^{がしま}には　ゆたかな水^{みず}がわいていて　村^{むら}のなかでは、大きな水^{みづ}車^{しゃ}が三つもまわっていた。水力^{すいりき}による糸^{いと}のべ工場^{こうじょう}である。広幡^{ひろはた}村^{むら}において最初^{さいしょ}に動力^{どうりき}をつかった家内工業^{かないこうぎょう}である。

広幡^{ひろはた}の農家^{のうか}では、畑^{はた}でつくった綿^{わた}をしぶ紙^{がみ}の上^{うへ}につみあげる。その上^{うへ}へ　木^きでコ^この字^じ型^{がた}につくった大きな弓^{ゆみ}を、天井^{てんじょう}からぶらさげる。それを左手^{ひだりて}で動か^{うご}かしながら、右手^{みぎて}で弓^{ゆみ}にはってあるつるを細^{ほそ}い棒^{ぼう}でたたく。すると、ピン・オトヨ、ピン・オトヨとかろやかな音^{おと}がして、綿^{わた}がふわっとほぐされる。それを糸^{いと}のべ工場^{こうじょう}へもっていく。

この糸^{いと}のべ工場^{こうじょう}でできた糸^{いと}を染^そめるため、やはり口^{くち}ケ島^{がしま}に、三軒^{げん}の染色工場^{せんしよくこうじょう}と、水力^{すいりき}をつかった三軒^{げん}の綿^{わた}うち工場^{こうじょう}があったという。

へ^{ひろはた}広幡の口^{くち}から口^{くち}へ　　^{くちがしま}ロケ島の人情^{にんじやう}ばなし五話^わ

^{くちがしま}ロケ島の口^{くち}ばなし



^{くちがしま}ロケ島でひろった五つのはなし。人^{ひと}の世^よのふしぎさ、おかしさ、かなしさ、こわさ、たのしさが、口^{くち}から口^{くち}へとつたわって――。

その一は、まぼろしの口^{くちがしまじやう}ケ島城^{じやう}ものがたり。

ちよつとまえのことやけど、名^な古屋^{こや}からひとりの人^{ひと}が、田^た中^{なか}さん
のうちへやってきた。そして、名^な古屋^{こや}市^{しろ}白^か壁^べ町^{ちやう}、山^{やま}中^{なか}文^{ふみ}夫^おという名^{めい}
刺^しをだして、「ちよつとおたずねしますが……」といった。

「わたしのうちには系^{けい}図^ずがあつて、先祖^{せんぞ}の初^{しよ}代^{だい}が口^{くちがしまじやう}ケ島城^{じやう}の城^{じやう}主^{しゆ}となつています。こちらの地^じもとには、そんなはなしは伝^{つた}わつてい



「ませんか。」

田中^{たなか}さんは、首^{くび}をかしげて、

「山中^{やまなか}、山中^{やまなか}、きいたことありま

せんなあ。まさか、中^{なか}は中^{なか}でも

田中^{たなか}ではありませんか。」

と、いわしたと。

はなしによると、その山中^{やまなか}とい

うおとのさまは、はじめ齊藤^{さいとう}道三^{どうさん}

につかえ、のち、織田^{おだ}信長^{のぶなが}の家臣^{かしん}と

なり、本能寺^{ほんのうじ}の変^{へん}で討^うち死^じにした。

そしてその子孫^{しそん}は、竹中^{たけなか}半兵衛^{はんべえ}

などにつかえ、のちてんでんとし

て、さては千葉^{ちば}にうつり、鳴海^{なるみ}に

うつり、いまは名古屋に住んでいる。その人は、そういつて、「どうぞ、この先祖からつたわる古文書をごらんください。」と、系図や文書を目のまえにひろげてみせた。

しかし、こちらの口ケ島には、そんな伝えはなしはない。どこか田中家の系譜にみる初代のはなしと似かよつてはいる。この人は、さんねんそうにかえつていった。それから、なんのれんらくもないし、白壁町へきいてみても、「そんな人、知りまへん」ということやった。まぼろしの口ケ島城ものがたりである。

その二は、うなぎやの大ぶろしき、源助さんのこと

口ケ島に、今尾から長浜をとつて京のみやこへ、うなぎをはこぶ中継所があった。そのうなぎにはたらく源助さんの大ぶろしきは、この地方きつてのものであった。

長雨^{ながあめ}がふりつづいて、村^{むら}のよりあいでは水^{みず}のはなしに花^{はな}がさいた。「みな^{みな}のしゅう。よう聞^きいてくれ。わしや、きようほど、なんぎしたことはなかつたわい。」

源助^{げんすけ}さんがはなしだすと、またはじまったぞと、村^{むら}びとたち。

「あのな。根^ね古^こ地^じまでけつてくると、にわか^{みず}に水^{みず}がでてのう。みるみるうちに深^{ふか}うなつて、頭^{あたま}のうえ三尺^{じやく}（ほぼ一メートル）にもなつてのう。そこをうなぎの荷^にを、にのうてきたんや」

「ほほう。頭^{あたま}のうえ三尺^{じやく}も水^{みず}があつてのう。うなぎはよろこんだやろうが、おまえはよう息^{いき}ができたなあ。たいがいにしとけ。」

「ああ、そーいやそーやなあ。」

源助^{げんすけ}さんはそーいって平氣^{へいき}な顔^{かお}。あとはみんなで、大^{おお}わらい。そんなふんいきで、あとのむつかしい話^{はな}しあいも、なごやかにすむんやと。娯楽^{ごらく}が少^{すく}なかつた頃^{ころ}、大^{おお}ぶろしきは人^{ひと}を楽^{たの}しませたまんやな。

その三、兄あにのゆうれいになやみつづけた あわれな男おとこ

こんどは悲かなしいはなし。そのむかし、口くちヶ島がしまに、つっぱりむすこがおつてな。いつも、父親ちちおやに、「おやじ、金かねよこせ」と、あいくちをふるっておどしていた。ある日ひ、あまりにあばれて、父親ちちおやがあぶないとおもった弟おとうとが、ついにうしろから棒ぼうで兄あにをなぐった。それが運うんわるく兄あにの頭あたまを直撃ちよくげきして、うーんとうなつたまま死しんでしもうた。心こころのやさしい弟おとうとは、「兄あにイ許ゆるせ」となき叫さけんだが、兄殺あにころしの殺ころ人罪じんざいで、おなわをうけた。村むらびとたちは、弟おとうとがあまりにかわいそうと、お上かみへお願い書ねがしよをだしたりして、無罪むざいとなった。

しかし、良心りょうしんにくるしむ弟おとうとは、やけになつて高田たかだの料理屋りやうりやで、あびるように酒さけをのんだと。そこで弟おとうとは、廊下ろうかのすみや、便所べんじよのまえで、ふっと人ひとかげをみた。うらめしそうな兄あにのすがたであつた。

弟おとうとは、とうとうなやみつづけて早死はやじにし、家いえもたえてしまったと。

その四 池のあやしいかげを追っぱらった巖島神社

そう、あの美濃の大水のときや。西岩道で、金草川のつつみがきれた。そしてちかくの家が、あつというまに家族もろとも、水にのまれてしまった。その時、そこに池ができ、あやしい話がひろがった。大蛇か、亡霊か、風もないのに水音がしたりする。西岩道の人たちは相談して、巖島神社をまつたら、静かにおさまったという。

その五、金草川をのぼりくだりする。ほかけ舟のこと

いまの金草川は土砂でうまって、舟などとおらん。でもそのむかしは、かなりの舟が下高田のみなとまで、いききしていたと。玉泉堂の酒は、このほかけ舟に三斗たるをのせて、名古屋までいったという。大倉忠八さんという名物船頭さんもいたし、風のないとき舟をひっぱりあげるつなも、西岩道の西脇さんのとこにいまもある。

へ広幡^{ひろはた}まで 西山^{にしやま}から狼^{おかみ}に送^{おく}られた こわーい話^{はな}◇

送^{おく}りおかみ

むかし、大跡^{おおあと}の庄作^{しょうさく}さんが、夜^{よる}おそう関ヶ原^{せきがはら}から西山^{にしやま}のふもとをとおって、うちへいそいでおった。するとどこからか、一ぴきのおかみが、うしろへ音^{おと}もなく、とことことついてくる。

庄作^{しょうさく}さんは、きもちわるうなつて、にげだしそうになった。だが「まてまて、おくりおかみをしげきしちやいかん。」

とおもいなおして、がまんして同じ調子^{おなちょうし}であるいていった。おくりおかみは、きゆうにとびだしたり、とまってうつむいたりすると、人^{ひと}をおそうということを思^{おも}いだしたのである。

やがて、そんなとき、ぞうりのはなおがきれそうになった。庄作^{しょうさく}





さんは、足のおやゆびに力をいれて、はなおがとれないように気にしながら、いっしょうけんめい、あるいていった。

「ああ、どうしよう。もう、だめだ。はなおがぬけてしまう。」

ついに庄作さんは、心をきめた。はなおが、ぽつんと離れた。庄作さんは、そのまま、わらぞうりを足からはなして、はだしのまま、さっさとあるいた。

昔の人が、わらじや、はばきのひもがきれても、とまったりしな

いで、そのままあるきつづけたというはなしが、庄作さんをはげま
していた。足のうらがいたくなつて、びっこをひきながらも、けん
めいにあるいた。

そのうち庄作さんは、ふところにマツチのあることに気づいた。
「しめしめ。いいものがみつかったぞ。これでおどしてやろう。」

庄作さんは、だんだん元気がでてきて、いたづら心もおきてきた。
びっこをひきながらマツチをすって、ぽいとうしろへすててやつ
た。いっしゅん、おおかみはたちどまったようである。だが、すぐ
にくらくなると、また、おなじようについてくる。

庄作さんは、また、一本マツチをすって、うしろへぽいとな
げた。おおかみは、ちよつとまって、またついてきた。

庄作さんは、またマツチをすって、うしろへなげた。すってはな
げ、すってはなげしながら、がんばつてあるきつづけた。

ようやく大跡おおあとの村むらへはいったとき、マツチのぼうも、すっかりなくなっていた。庄作しょうさくさんは、きゆうに心細こころほそくなった。そう思おもったとたん、石いしにつまづいてひよっとついてしまった。いまにも、たおれそうであつた。たおれたら最後さいご、おおかみは頭あたまの上うへをとびこえ、あつというまに、のどをねらつてかみつくにちがいない。

「おお、あぶないあぶない。せつかくこ、ここまでかえつてきて！」

庄作しょうさくさんは、胸むねをなでおれし、そつとうしろをみた。おおかみはじつと立ちどまつて、自分じぶんの姿すがたをみている。そのとき、庄作しょうさくさんは、ふと、自分じぶんのこしのふろしきに、塩しおがはいっていることに氣きがついた。塩しおはおおかみの大好物だいこうぶつ。その塩しおにひかれてついてきたのである。「よしよし、とおくまで送おくつてくれたお礼れいじゃ。なめてかえれよ。」庄作しょうさくさんは道みちのまん中なかに白い塩しおのかたまりをおいて、家うちへとびこんだ。やがておおかみは、おとなしくそれをなめて、かえつたと。

へ広幡のへっこき名人の ゆかいな人生

へっこき村長さん



むかし、広幡村に、へっこき村長さんがござらしてな。なんでも体がでっこうで、がっちりしていて、米一俵ぐらい、かたてでかく動かすほどの人じやった。

この村長さん、うちは口ヶ島じやったが、村では、ふたつの名人をもつてござらしてな。だれも知らんものは、おらんかった。

表の名人は、碁うちでな。なかなか、つよかったと。小学校の校長先生が、いい相手でな。休みの日なんか、朝から晩まで、パチンパチンといい音をならしてござらしたと。

だが、裏の名人はもっと有名で、この名人なればこそ、八十年た



った現在^{げんざい}まで、子^こから孫^{まご}へとつたわってきたんやなあ。そして、『ふるさと広幡^{ひろはた}』という本^{ほん}にのり、またこれから百年^{ひゃくねん}も、うわさがのこることになったんや。

なにもこの村長^{そんちやう}さん、村^{むら}の行^{ぎやう}事^じとして、へっこき大会^{たいかい}をやったとか、役場^{やぐば}のしごとはじめやおわりのあいずに、大きなラツパをならしたというわけではない。

仕事中^{しごとちゆう}は、大まじめの村長^{そんちやう}さんで、村^{むら}にむつかしい問題^{もんだい}がおきたときでも、

「それくらいのこと、へ、いっぱつじゃ。」

「そんなこというやつは、わしのへで、ふつとばしてやるわ。」

などと、わらいとばして、ばりばり仕事しごとのできる人ひとやった。

だが、へっこき村長そんちょうさんという名人めいじんになれた、ほんののところはな。となりの家いえへ、ふるをもらいにいって、そのかえりみち、自分じぶんのうちの門先かどさきまで、プップコ、プップコと、ひとあしごとに、小さちいなへをひりながら、演奏えんそうをたのしんでござったということじゃ。

「おらあのへっぴり、ずいぶん、のばしたもんじゃやて。ゆうべはなあ、もうひといきで、門先かどさきまでくるところじゃった。なさけなかな、二足ふたあしたらなんだわい。」

へのひりかたひとつでも、工夫くふうとけいこがかんじんじゃ。おらあ、このつぎは、一曲きょく、うたにあわせてみるつもりじゃやて——。」
どうも、へっぴりのけいこは、風呂ふろもらいだけじゃのうて、寄合よりあ

いや暮会こかいのいきかえりでも、ようやらしたとみえてな。うちの中なかで、お勝手かってをしていた人ひとが、うらの道みちをとおる村長そんちょうさんを、このプツプコ、プツプコで知しることができたという。

「村長そんちょうさん、いま東ひがしへいかしたよ。寄合よりあいがはじまるんじやろう。」

「村長そんちょうさん、さつき西にしへいかれるのをきいたよ。六ろくさんの家うちかな。」

こんな会話かいわが、うちの中なかでたくらいであつたと。

この村長そんちょうさんの名人話めいじんばなしは、明治めいじのおわりごろのことじやが、ご本ほん人にんさんが、あちこちでひろうされて、村むらびとたちを笑わらわせなされたものでさ。この人ひとの息子むすこさんは、そのあと陸軍少将りくぐんしやうしやうまでならした人ひとやが、ふるさとから広幡ひろはたの人ひとがたづねてくると、「わしのおやじのへっこき話はなしは、まだ有名ゆうめいかいなあ」と聞きかれたそうな。そして、「わしのおやじのへは、音おとがよかったんじやて。高たかいのから低ひくいのまで、なかなか芸術げいじゆつてき的てきやったそうな」と、大笑おおわらいさしたと。

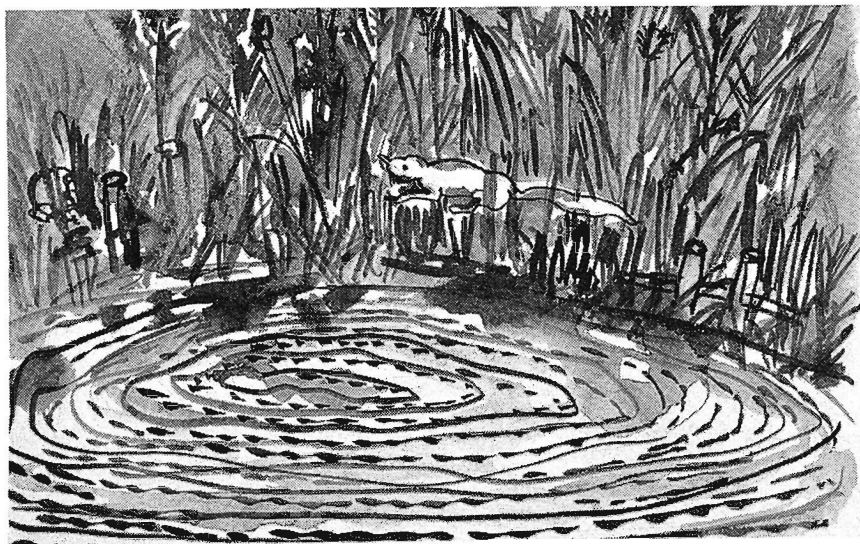
へ広幡^{ひろはた}の幻^{まよひ}の池^{いけ}につたわる三つのこわーい話^{まご}

おかま池^{いけ}



むかし、岩道^{いわみち}の村^{むら}ひがしに、おかま池^{いけ}いうてな。大きな池^{いけ}があつたもんじゃ。ちようど、おかまのようなまるいふちに、草^{くさ}が背^せたけほどもはえておつてな。いつも水面^{すいめん}が、しゃぶしゃぶ、しゃぶしゃぶと、音^{おと}をたててさわいでいた。なんだか、おかま池^{いけ}が、いつもひとりごとをつぶやいているような、かんじやった。

わしら子ども^このときやから、もう七、八十ねんも、むかしのことやが、どうしたわけか、そのおかま池^{いけ}には、きもちのわるいはなしばっかがのこつておつてな。いまおもいだしても、ぞつとするわな。そりゃあ、そのおかま池^{いけ}のちかくには、小さな池^{いけ}がいくつもあつ



って、魚^{さかな}つかましや、水^{みず}およぎな
ど、かつここの子^こどものあそびば
じやった。

だが、だれも、おかま池^{いけ}では、
ようあそばなんだな。

だいいち、おかま池^{いけ}は、底^{そこ}なし
ぬまみたいにおもわれておつての。
その池^{いけ}のぬしは、ドツチじゃとい
われておつた。

ドツチいうたら、いまでいうカ
ワウソのことらしい。なんでも、
イタチにてはいるが、くろぐろ
として、体^{からだ}もずっと大^{おお}きく、なが

いしっぽをもっておったそうな。

ともかく、ドッチはわるいやつでな。池いけのそこにすんでいて、とらえた魚さかなを池いけのふちにならべたり、人ひとのことはまねて人ひとをだましたりするんじゃないと。そして、ふらふらと、水辺みずべによっていくと、水みずの中なかへひきこんでしまうということじゃった。

じっさい、わしらの同級生どうきゅうせいで源五郎げんごろうというのが、ドッチにひかれて、しんでしまったわ。

ドッチはカワウソじゃのうて、スッポンじゃというのもおる。スッポンは人間にんげんのしりのあなに頭あたまをつっこんで、ノツコをひくという。ノツコは、はらわたのことじゃ。

ドッチは、カワウソか、スッポンか、そんなことドッチでもいいけど、ともかくきもちのわるい池いけやった。

そういうわけで、おかま池いけには、大きなこいやふなが、たくさん

おったけど、おとなでもようたらなんだな。みんながとらんもんで、コイやフナは、あんしんして、どんどん^{おお}大きくなるし、ふえるばっかしじゃった。

あるとき、大^{おお}じしんがあつてさ。きゆうに地^じめんがぐらぐらつとゆれたんじゃな。ちょうどそのとき、岩^{いわ}道のしゆうが、このおかま池^{いけ}のつつみにきていて、びっくらこいて、地^じめんにはいつくばったんやと。

そして、そつと顔^{かお}をあげてみたら、おかま池^{いけ}の水^{みづ}が、ザブーン、ザブーンと大^{おお}きなみうつてゆれておる。いや、ゆれておるといふようなものじゃあない。池^{いけ}がぐいっとかたむいたとおもったら、池^{いけ}の水面^{すいめん}がヒュルヒュルヒュルとしわがよるようにはしつていつて、池^{いけ}のふちにドーンとたたきつけ、まっしろな波^{なみ}頭^{がしら}が、つつみから上^{うへ}へたかくはねるのである。ちょうど、あらして海^{うみ}があれたとき、大^{おお}

きな波が、岩にうちあげ、天へむかつてくだけるようなもんさ。

——と、そのひょうしに、大きなコイやフナが、びゅうん、びゅうんと、みごとに空たくまいあがったそうな。村のしゅうは、ただ、ぼうぜんとして、地しのこわさを忘れてみておったと。

地しんがおさまってから、村のしゅうが、まわりの田んぼをみてみると、そこには、たくさんの大きなコイやフナがとびはねておったということじゃ。

でも、村のしゅうは、池のぬしのたたりがこわいといって、ようたばなかったというし、また、池のぬしからの、おあたえじゃといつて、よろこんでたべた人もおったそうじゃ。かつてなもんじゃ。

まあ、おかま池でこわいのは、どちらかというと、ひるよりもよるのほうじゃおかま池のすこし南のところに、シンメイドウというやしろがあつてな。

そこからでる火の玉^{たま}が、きまって、おかま池^{いけ}へとんできえるとい
うはなしだった。



これは、ほんとのはなしなんじゃ。

わしも、その火の玉は、何回もこの目で見たが、きもちのいいもんじゃねえ。そのころ村のしゅうで、おかま池にとぶ火の玉を見た人は、なんにんもいてな。

おとなになつてからでも、おかま池のちかくをとおるのは、いやじゃった。おかま池の方を、なるべく見んようにして、はしつてとおつたくらいじゃった。

いつでも、きまつて、雨のしとしとふる晩じゃった。はなをつままれても、わからんくらいの、まっくらな夜中ときまつておつた。シンメイドウは、笠郷村の七宮八堂のひとつでな。うっそうとした森につつまれておつた。その森の方が、ぱつとあかるうなる。ふりむくと、青白い火の玉が、ふわつと、まっすぐ上へあがる。そしておかま池の方へむかう。あれあれつとおもっている間のことだ。

おかま池いけの上うへへくると、あるいは池いけへおりるようなかつこうで、
ぱときえてしまふんや。いったい、あれはなんじやったのやろう。
人魂ひとたまじゃねえ。人魂ひとたまは、もっと赤あかくて、しっぽをひいて、ふわふわと、とんでくる。火ひの玉たまは、ぜんぜんちがう。もっとつめたいかんじやな。

でも、そのあと、この池いけのもちぬしのたつてのねがいで、池いけをつぶしてしもうた。シンメイドウも、耕地整理こうちせいりのときに、ちかくのお宮みやへいつしよにまつられて、あの森もりもなくなつてしもうた。そしてむかしのそうぞうもできんような、うつくしい一面めんの田たんぼになった。それから、あの火ひの玉たまはとんと、でなくなつてしもうた。あちこの電氣でんきが、夜よどおしあかるうて、火ひの玉たま現象げんしょうはできなくなつてしまったのやろうか。そして、あのおかま池いけのぬしであるドツチは、どこへいつてしまったのか。なつかしい、おもいでばなしのドツチよ。

へ 広幡の心いっぱい ドッキリばなし

広幡こぼれ話

ちよつとおもしろい、広幡の心をえがく小ばなし集。さあどうぞ。



一、ガキどもが、なりをひそめた大跡の鬼やぶ

むかし、大跡のわんぱくたちが、ちよつとガキあそびをすると、

「そんなわるい子は、鬼やぶの鬼にいつけるよ」とか、

「いうときかん子は、鬼やぶの鬼にやってまうよ」といわれた。

すると、みんなおとなしく、いい子になってしまったという。

大跡の中に、鬼やぶというところがある。二ひきの鬼がいて、一

びきは外からの悪者を、一びきは村の中の悪い子をにらんでいたと。



二、牛^{うし}をのみこんだ飯^{はん}ノ木^{のき}のガマ
むかし、飯^{はん}ノ木^{のき}の西^{にし}のつつみの
下^{した}に、コンコンと清水^{しみず}がわき、ブ
クブクツとアブクのでているガマ
があった。あるとき、ここへ水^{みず}を
のみにきた牛^{うし}が足^{あし}をふみはずした。
びつくりした牛^{うし}は、大^{おお}きな体^{からだ}を
うごかしてもがいた。すると、も
がけばもがくほど、ズブズブとお
ちこんで、底^{そこ}なしガマは、とうと
う、牛^{うし}をのみこんでしまったと。
そこを牛^{うし}ガマといい、村^{むら}の人^{ひと}も
気^きをつけていたという。

三、百二十年もつづいてゐる西岩道のいせまいり

むかしから、西岩道では、村びとが金をだしあつて、かわりばん

こに、いせまいりをするこゝがつづいてゐる。慶応のころははじめら

れ昭和六十年で百二十かいめである。いまは電車やけど、むかしは

根古地から舟にのつてのいきかえり。村中で送り迎えをしたという。

四、二百年も大水のことをかきとめた岩道の常性寺さん

一七七三 安永二年 口ヶ島の垈がきれ、寺の上椽の上十糶入水。

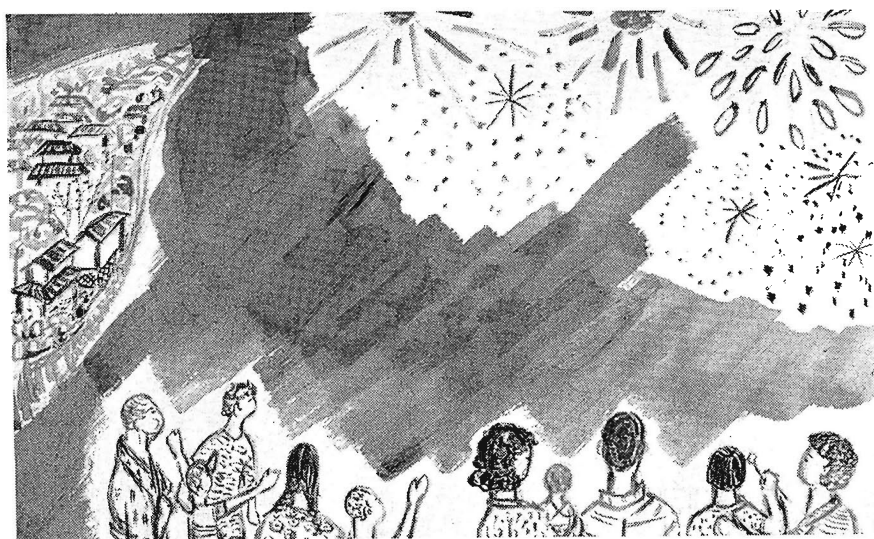
一七七八 安永七年 烏江南の堤がきれ、寺の椽の上十五糶入水。

一七八七 天明七年 津屋川の堤がきれ、寺の椽まで入水。

一七八八 天明八年 津屋川の堤がきれ、寺の台所の上十糶入水。

一七八九 寛政元年 津屋川の堤がきれ、寺の御堂の上一米入水。

ほんの一部である。よく水もついたが、だいじな記録でもある。



五、名物、西岩道の花火まつり

むかし、明治のころ 西岩道の

八幡神社の秋まつりには、まいと

し、花火大会があつて、村むらか

ら人がでて、にぎわつたという。

明治三十九年十月十八日村社祭

典煙火番組をみると、打上げ花火

が八十本と、番外としてカラクリ

小花火があつたとかかれています。

いまも、そのときの大筒小筒が

西脇さんどこにあるし、火薬を調

合した薬研という器具や、控帳な

どものこつている。

六、校舎建築で、土台がためや瓦あげをした子どもたち

つぎたし校舎が増築されたときである。校舎の敷地をかためるの

に、五、六年の子どもが、体操の時間に、はだして土ふみをした。

「オイチニ オイチニ」とかけごえかけて、一日に二時間ぐらいずっとふんだ。また、高等科の子どもたちは、瓦あげも手つだったという。

七 養老線の電車をたおした 日本一の網走風。

広幡は、風の日本一きついところだな。網走級やといわれている。

養老山と伊吹山から、ふきおろす風が、何本かの風道をつくつてい

る。広幡小の屋上からみると、風道になっているところには、古い

部落がなくずっと田沖になっている。小学校の校庭のサッカーゴー

ルが、突風でたおれたこともあるし、養老線の電車が、むかし脱線

し、ごろんと横だおしになったことがあったという。

八、鬼ヶ島おにがしまとよくまちがえられるくちがしま口ヶ島

「えーと、鬼ヶ島おにがしまへは、どの道みちいったらええでしょう。」

「鬼ヶ島おにがしまねエ。うーん、そりゃあ、口ヶ島くちがしまとちがいますか。」

「あつ、そうそう。口ヶ島くちがしまでしたなあ。こりゃア、失礼しつれいしました。」

「ええ、この村むらですよ。みんなええ人で、鬼おにはおりませんねえ。」

九、広い畑ひろはたがあつた広畑ひろはたから、広幡ひろはたへ

広幡ひろはたは、養老町ようろうちょうのどまん中なか、いちばん中心ちゅうしんの静しずかなところ。

広畑ひろはたは、広幡村ひろはたむらのどまん中なか、いちばん中心ちゅうしんの静しずかなところ。

明治三十年めいじねんに、口ヶ島くちがしま、飯ノ木はんのき、大跡おおあと、岩道いわみち、西岩道にしいわみちの五つの村むら

があつまって、ひとつの「ひろはた村むら」が生まれた。そのとき、五

つの村むらのまん中なかの小巷こゑぎの地名ちめい「広畑ひろはた」がもとになったという。学校がっこう

のずっと東ひがしの方ほうで、昔むかしの検地帳けんちちやうにもでてくる古い小巷こゑぎである。

へ広幡ひろはたの力もちちからもちの久さきゅうが四十二よんじふにの厄年やくとしにやったことへ

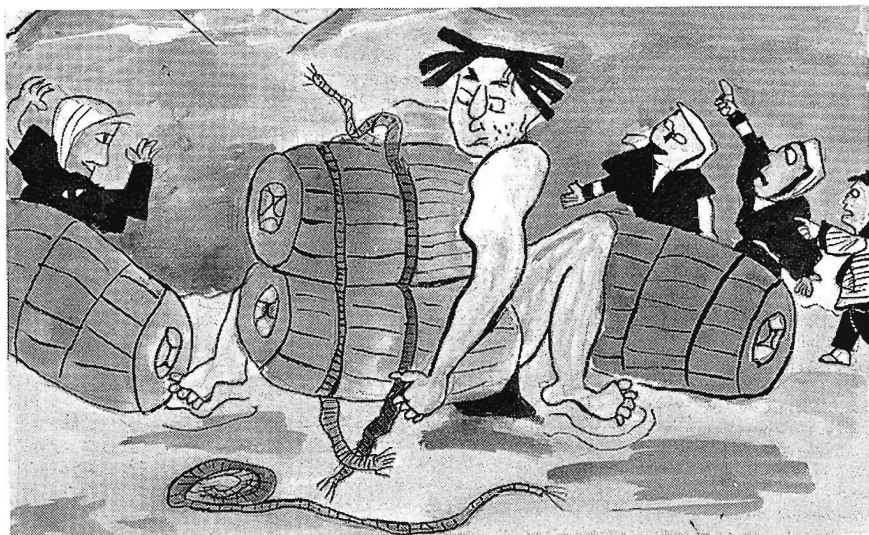
厄やくおとし



むかし、口ケ島くちがしまに、たいへんな力もちちからもちの久左衛門きうざえもんという人ひとがござった。この力もちちからもち、久さきゅうは、ようはたらく人ひとで、朝めあさしまえに、田たんば一枚まいの田たおこしを、かるくすませるほどであった。

だいたい、久さきゅうの三つぐわは、その中はらが、ふつうのくわの二ばいはあった。久さきゅうがとくべつに、かじやにつくらせたものである。おなじように、くわをひとふりしても、久さきゅうは二ばいのひろさをおこしていくのである。

その力もちちからもちの久さきゅうが、四十二さいの厄年やくとしをむかえたとき、嫁よめさがしみじみいったものである。



「ねえ、あんた。いよいよ厄おとしをせにやなんねえ。」

あんたのように、人の二ばいもようはたらく人は、しっかり厄おとしをして、人の二ばいも長生きしてほしいからねえ。」

「うん、そりゃあ、かわいいおめえたちのためにもなあ。」

「いったい、どういうふうに、厄おとしをしたらええじやろ。」
「そうねえ。なんぞ、でっけえことをするのよ。ふつうなら伊勢まいりなどの旅をして、気分を

がらつとかえればいいのよ。」

「うん、気分をかえる、でつけえことをなあ……。」

それから、二月もすぎたある日のこと。久さは、にわかに、嫁さや子どもたち、そして、久さのうちの田んぼをかりている三人の小作しゅうを庭へよんだ。ぽかぽかと、小春日和のいい日であつた。

嫁さは何ごとがおきたのかと、家の庭へでてみておどろいた。

いつもと、ようすがすっかりちがう。

「まあまあ、あんた、いったいこれはどうしたの。」

農作業のため、石灰などをいれてたきにしてある庭が、いつのまにか、きれいにはかれている。そしてそのまん中に、むしろが二枚ひいてあり、そこに米だわらが四俵も、ならべてある。庭の上手には、一枚のごぎをしいて、そこにもう、小作しゅう三人と、四人の子どもたちが座つて、ニコニコしている。九さいをかしらに、

二男二女の子どもたちが、何がでるのかと心まちにしている。

「よう、きたきた。これでそろうたな。これから、わしの四十二の厄おとしをするでな。みんなちゃんとみとつてくれ。」

「ヘエツ。だんなさま。なんのことかと思うたら、厄おとし……。」

小作で、家の出入りをしている作造が、びっくりして声をあげた。

「うん、そうや。おめえらにも手つだつてもろうて、わしや、ひとつ、自分の力だめしをしてみたいんや。いままでに、米二俵は、

かたにのせたことのあるわしやが、きようはな、この四俵をもつてみたいんや。一世一度のでつけえ厄おとしじゃでの。」

久さは、そういつて、出入りの作造・喜六、甚助に、手つだつてくれるよう、あごをしやくつた。

「おそれいりました。こんな厄おとし、生まれてはじめてですわ。」
喜六は感じいつて、久さのいうように、二俵のたわらを、なわで

三カ所^{しよ}まいて、かたくひとつにしばった。作造^{さくぞう}と甚助^{じんすけ}も、のこったそれぞれの一俵^{ひょう}ずつのまん中^{なか}に、なわをまいてしぼり、そのつづきのなわで、たわらが一俵^{ひょう}はいるほどの大きな輪^わをつくった。久さ^{きさ}は三人^{にん}に、そのもちあげ方^{かた}をはなしている。

そのころは、五斗^{とう}が一俵^{ひょう}であつた。ふつうのおとなは、一俵^{ひょう}七十五キロをかたにのせるのが、えんやらえである。四俵^{ひょう}で三百^{ひゃく}キロ。

「よしよし、それじゃあ、子どもたち。父ちゃん^{とうちゃん}が今^{いま}こそ、どんな力^{ちから}もちかみせてやる。ようみとつてくれよ。」

「ワー、父ちゃん^{とうちゃん}、がんばつてエ。」

はしやぐ子どもたちを、うしろからかかえるように手^てをのばしている嫁^{よめ}さは、心配^{しんぱい}でたまらん。「バカなこと、やめときやあ」ということばが、のどまででかかったが、じつとおもいとどまった。

どうせここまできたら、とめることはもちろん、氣^きをそぐことも

できん。嫁^{よめ}さは目^めをつむって、神^{かみ}に安全^{あんぜん}と成功^{せいこう}を祈^{いの}るしかなかった。
人^{ひと}一倍^{ばい}、体^{からだ}のでっかい久^きさは、すもうとりのように、足^{あし}をふんば
り、目^めをつむって心^{こころ}をしずめた。子^こどもたちも、笑^{わら}いをわすれて、
じっと、父^{ちち}親^{おや}の真^{しん}剣^{けん}なすがたをみすえている。

久^きさは、体^{からだ}をかがめ、しかと二俵^{ひよ}からげのなわに手^てをかけると、
「ええい！ うおっ！」



と気^き合^あいをかけて、一^{いっ}氣^きに二^ひ俵^{ばう}をかたにのせた。子^こどもたちは、わ
つと声^{こゑ}をあげたが、すぐにいきをつめた。二^ひ俵^{ばう}をかたにのせた父^{ちち}親^{おや}
が、体^{からだ}をちいさくしたまま、さらにふんばりをたしかにした。

すると甚^{じん}助^{すけ}が、かたの上^{うへ}の二^ひ俵^{ばう}を両^{りやう}の手^てでつかまえた。久^きさ^さは、
しずかに目^めの前^{まえ}の俵^{たわら}についている輪^わを両^{りやう}手^てでもちあげ、かたの上^{うへ}の
下^{した}の一^ひ俵^{ばう}に、前^{まえ}からかけた。作^{さく}造^{ぞう}と喜^き六^{ろく}は、久^きさ^さのうしろの米^{こめ}俵^{たわら}を
つりあげ、たわらについているまるい輪^わを、うしろから、下^{した}のたわ
らにかけた。

甚^{じん}助^{すけ}は、前^{まえ}と後^ごの二^{ふた}本^{ぽん}の輪^わの安全^{あんぜん}をたしかめた。

「う、う、う、うおっ！」

久^きさ^さは、顔^{かお}をまっかにして、ほえた。満^{まん}身^{しん}の力^{ちから}がこもって、体^{からだ}を
じりじりとおこし、腰^{こし}をきつて、たちあがる。

甚^{じん}助^{すけ}はまえのたわらを、作^{さく}造^{ぞう}と喜^き六^{ろく}は、うしろのたわらを、つる

ようにしてもちあげた。久さは、しつかとたちあがると、「うん」と、うなった。甚助はかかえていた手を、しずかにはなした。一俵がゴロンと、久さの胸にぶらさがった。つづいてうしろのふたりも、もちあげていた手をそつと、はなして、うしろへさがった。

「ワッー 父ちゃん もった！」

長男坊がかなきり声をあげた。子どもたちも、パチパチと手をうった。嫁さは、そのとき、はじめて目をあいた。涙があふれた。

「うーん。うん、うん、うーん。」

仁王のような父親は、さすがに重そうに、うなりながら、一歩、一歩と、あるいてみせた。足がブルブルとふるえていた。

力もちの久さは、こうして、でっかい厄おとしをはたし、七十七さいまで生きた。嫁さや子どもたちは、父親久左衛門の全身全力をかたむけたすがたをふかく心にきざみ、生涯の誇りにしたという。

海から陸から 永久の平和までもれ とうつたえる

声なき広幡の若者たち

日清日露戦争
口ヶ島 奥田喜太郎 明治32・8・10
口ヶ島 西脇 三一 37・9・26
台湾
清国旅順盤龍山

日中戦争

飯ノ木 伊藤 二一 昭和11・8・25
口ヶ島 田中 正男 12・10・13
飯ノ木 伊藤 佐平 12・10・14
伊藤 榮作 13・2・3
伊藤 清吉 13・11・23
伊藤 稔吉 12・5・17
伊藤 新 12・11・23
北村 新作 13・9・15
西脇 一義 15・11・21
西岩道 栗田 三吉 12・11・8
岩道 久保田 克己 12・10・29
久保田 寛夫 13・5・16
中華民國上海付近

大跡 北村 新作 13・9・15
伊藤 稔吉 12・5・17
伊藤 清吉 13・11・23
伊藤 榮作 13・2・3
伊藤 佐平 12・10・14
田中 正男 12・10・13
伊藤 二一 昭和11・8・25
飯ノ木 伊藤 二一 昭和11・8・25
口ヶ島 田中 正男 12・10・13
飯ノ木 伊藤 佐平 12・10・14
伊藤 榮作 13・2・3
伊藤 清吉 13・11・23
伊藤 稔吉 12・5・17
伊藤 新 12・11・23
北村 新作 13・9・15
西脇 一義 15・11・21
西岩道 栗田 三吉 12・11・8
岩道 久保田 克己 12・10・29
久保田 寛夫 13・5・16
中華民國上海付近

太平洋戦争

口ヶ島 奥田 進 昭和19・12・10
谷 道男 19・12・31
秀太郎 17・1・30
栗田 義治 18・5・28
栗田 藤蔵 20・12・28
古市 文雄 18・9・30
浅野 貢一 20・8・14
鈴浦 桁儀 18・10・21
栗田 光治 21・12・6
在郷死
中華民國河南省武安県担嶺

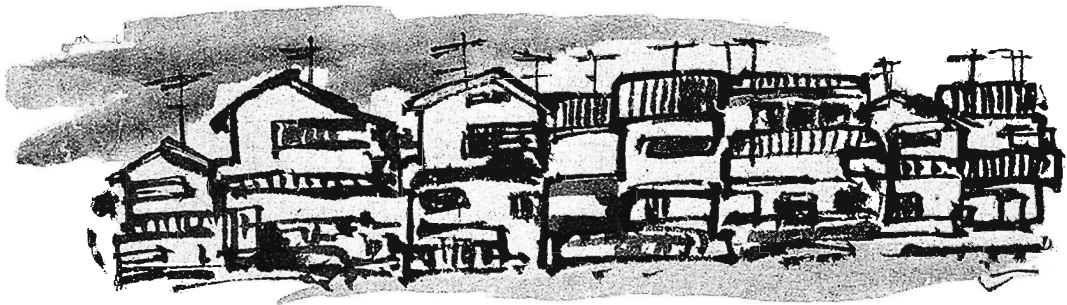
口ヶ島 栗田 行夫 昭和20・8・9
飯ノ木 細川 万年 18・2・25
近澤 泰己 19・12・12
近澤 重夫 20・3・26
近澤 宗隆 19・7・5
田中 實 19・6・22
伊藤 吉蔵 20・8・20
伊藤 長吉 20・8・29
伊藤 健三 20・8・12
伊藤 友治 19・8・25
丸毛 康男 20・4・20
中澤 政文 21・8・15
西脇 谷元 19・7・18
西脇 金一 19・10・23
西脇 文夫 19・10・3
陸田 国雄 21・8・28
高木 剛 19・5・25
陸田 繁義 19・7・17
近藤 繁尾 19・12・10
寺倉 弥助 19・5・5
佐藤 稔 19・7・18
桐山 久五郎 19・7・7
北村悦次郎 19・7・18
西脇 好勝 20・9・20
寺倉 米市 20・1・3
近藤浜次郎 19・11・6
西脇 松治 19・9・18
近藤 清也 18・5・29
久保田 眞一 19・10・31
久保田 進 20・7・12
久保田 正治 20・1・23
宮戸 兵次 21・8・15
馬場 恒夫 19・8・5
久保田 三夫 19・10・18

口ヶ島 栗田 行夫 昭和20・8・9
飯ノ木 細川 万年 18・2・25
近澤 泰己 19・12・12
近澤 重夫 20・3・26
近澤 宗隆 19・7・5
田中 實 19・6・22
伊藤 吉蔵 20・8・20
伊藤 長吉 20・8・29
伊藤 健三 20・8・12
伊藤 友治 19・8・25
丸毛 康男 20・4・20
中澤 政文 21・8・15
西脇 谷元 19・7・18
西脇 金一 19・10・23
西脇 文夫 19・10・3
陸田 国雄 21・8・28
高木 剛 19・5・25
陸田 繁義 19・7・17
近藤 繁尾 19・12・10
寺倉 弥助 19・5・5
佐藤 稔 19・7・18
桐山 久五郎 19・7・7
北村悦次郎 19・7・18
西脇 好勝 20・9・20
寺倉 米市 20・1・3
近藤浜次郎 19・11・6
西脇 松治 19・9・18
近藤 清也 18・5・29
久保田 眞一 19・10・31
久保田 進 20・7・12
久保田 正治 20・1・23
宮戸 兵次 21・8・15
馬場 恒夫 19・8・5
久保田 三夫 19・10・18
在郷死
中華民國上海付近
中華民國河南省武安県担嶺
朝鮮古茂山
北緯一二度一〇分、
東経一一九度

四の章 よん しょう

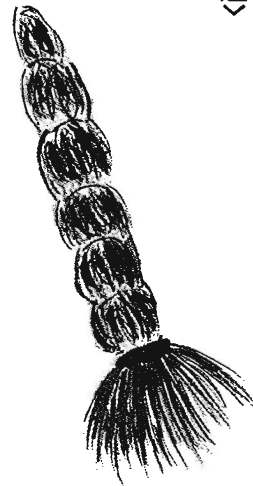
広幡の未来をきづく わたしたち ひろはた みらい

(現代・昭和) げんだい しょうわ



へ広幡ひろはたの今はなつかし芋名月いもめいげつと豆名月まめめいげつの子ども達こたちへ

はらだいこ



むかしのこよみて八月がつ十五日にちの夜よるは、いまの九月がつの満月まんげつの日ひにあ
たる。十五夜じゅうごやの名月めいげつである。

夕方ゆうがたになると、えんがわに机つくえをだし、びんにススキやオミナエシ
をさす。さんぼうの上うへのおさらには、月見つきみだんごやサトイモをにて
そなえる。

「おおい、よいいができたぞ。すばらしいお月つきさんや。」

とおとつあんがよぶ。するとおつかさんも、さとすようにいう。

「みんな、まんまんさんに、手てあわせておがむんや。みんなしあわ
せなんは、まんまんさんのおかげやで。」



まんまんさんは、まんまるさん
であろうか。子どもたちは、もみ
じのような手をあわせて、無心
におがむ。こうこうとかがやくお月
さんは、だまってこの家族をみて
ござる。

子どもたちは、このあと「十五
夜お月さん」のうたなどうたって、
うつくしいお月さんをたたえる。
岩道だけではない。広幡のどこの
うちでもおこなった芋名月の風景
である。

しかし、一月あとの九月の十三

日は、ちよつとようすがちがう。いまの十月がっである。満月まんげつちかい十じゅう三夜さんやの月つきをたたえる。このときは、枝豆えだまめをにてそなえる豆名月まめいげつであるが、子どもたちにとっては一つの年中行事ねんちゅうぎょうじがまつておる。

子どもたちのこの日ひのあそびは、はらだいこ。わらのたばをぐるぐると棒ぼうみたいにまいて、地面じめんをたたく。ぱんぱんといいい音おとがする。わらのねもとのふとさが五センチぐらいから、十五センチぐらいのものまで、いろいろあつて、音おとのひびきがそれぞれちがう。大きい子は、地面じめんをたたいたときにいい音おとがでるように、わらの中に里なかいものくきなどをいれたりする。

そういうわらのたいこをもった子どもたちが、いくつかのかたまりになつて、村じゅうの家いえをまわる。戸口とぐちのまえで、地面じめんをたたき、うたをうたい、一銭せんか二銭せんのお祝いわいをもらうのである。

たくさんのお祝いわいをもらうと、なんともうたをくりかえし、地面じめん

をたくさんたたく。お祝いをくれないうちでは、くれるまでまっていたり、はらだいこに水をつけて戸にまきちらしたりする。

九月せつくの、はらだいこ。

はらにつかえて、よううごかん。パンパン、パンパンパン。

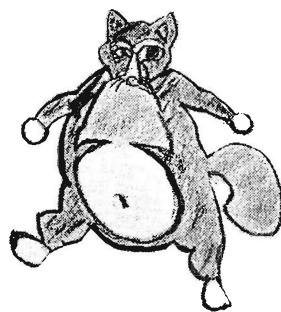
あーさは、ぼたもち、ひる おこわ。

よーるの うどんにいきついて、ようたたかん。バンバンバン。

秋の豊年を祝い、はらいっぱい食べたことを戸口で感謝するまつりである。村じゅうをまわりあるいた岩道の子どもたちは、村ざかいをこえて、西岩道や上ノ郷へくりだしていく。そしてはらだいでなぐりあったり、石をなげあって、けんかをしたりしたんやと。

へ広幡^{ひろはた}のいたずらたぬきに 一本^{ぼん}とられた六助^{ろくすけ}さん

砂^{すな}だぬき



むかし、ロケ島^{ろけがしま}の八幡^{はちまん}さまのよこの道^{みち}は、いまよりずっとせもう
てな。そのうえ、みあげるような大きな杉^{すぎ}の木^きが何本^{なんぼん}もならんでい
た。いちぶには竹^{たけ}やぶもあったりして、ひるまでも、なんとのうさ
みしいところやった。

あるばんのこと。ロケ島^{ろけがしま}の六助^{ろくすけ}さんは、しごとがおそうなつてな。
高田^{たかだ}のまちのではありませんで、ぐいっとお酒^{さけ}をいっぱいひっかけた。そ
してふらふらと、ほろよいかげんでかえってござったと。

八幡^{はちまん}さまのよこの道^{みち}へきたときやった。六助^{ろくすけ}さんは、大きな杉^{すぎ}の
木^きの下^{した}でたちどまった。杉^{すぎ}のはっぱが、ザワザワと音^{おと}をたててゆれ、



竹^{たけ}やぶがシヤラシヤラとなつて
いた。

「うーん。こんやはちいつと風^{かぜ}が
つよいのかな。なんだか、木^きも
竹^{たけ}も、ようさわぐわい。」

六助^{ろくすけ}さんは、はなをつままれて
もわからぬようなまっくらやみの
むこうに、そのとき、だれかがう
ごいたような気^きがした。

「そ、そこにいるのは、だれや。」
六助^{ろくすけ}さんは、「心^{こころ}をおちつかせる
ように、声^{こゑ}をかけてみた。」

と、そのあと、おもわずブルツと

身ぶるいした。なまあたたかい風が、さつとふいた。そして、パラパラと、小雨がふってきたのである。六助さんは両手であたまをかかえ、かたをはらおうとした。するとまた、パラパラパラと、ふってきた。手の甲にあたったのは、雨ではなくて、小砂であつた。うへつ、六助さんは、天からふってきた砂の雨にびっくりぎょうてん。おもわず走りだしていた。まっくらな中でのいそぎ足。どう道をまちがえたのか、すぐ目の先の口ケ島の村へなかなかつかん。おかしなこつちやおもったとき、うしろの方に家の灯がみえた。「なんじゃ。おれは。六十年もすんだ村のみちを、どうしたこつちや。どたぬきじゃ。八幡さまのどたぬきじゃ。」

六助さんは、酒のよいもどこへやら、ブツブツぶつつきながら、ようよううちへかえったと。

六助さんは、よくあさ、あかるうなつて、八幡さまへいつてみた。

おやしろのうしろのつつみに、たぬきのあなが五つもならんでいるのはしっている。

「どたぬきめ。ゆんべはいたずらをしおつて。いっぺん、かおをみせてみ。こんどみついたら、たぬき汁じゅうにしまうぞ！」

六助ろくすけさんは、やっぱりブツブツいいながら、なにげなくクマザサのあいてるところをみた。そして、ぎよつとたちどまった。たぬきがごろがった砂すなのあとがある。たぬきの砂すなあび場ばである。ここで体からだいっぱい砂すなをつけて、杉すぎの枝えだの上うへで、ふさふさと体からだをうごかして砂すなをまきよつたにちがいない。なんとにくい、どたぬきめ！

そこで六助ろくすけさんは、また、あつとおどろいた。だれかがじぶんをみているような気きがして、ふつとふりむいたら、そのうしろの小こだかい木きのまたに、どたぬきがたぬきねいりをしておったんやと。

へ^{ひろはた}広幡ぎつねの^{たいかい}ばかし^りぶり大会 それがんばれー

化^ばけむすめ



むかしは、よう、きつねが^{むら}村びとたちをばかしよったもんじゃ。
広^{ひろはた}幡にもあちこちに、大^{おお}きな林^{はやし}や森^{もり}があつて、ばかしぎつねがなん
びきもひそんでおった。今^{こん}夜^やはその広^{ひろはた}幡ぎつねのなつかしい^{むら}ばかし
つ^{むら}ぱりを、五^ごつの村^{むら}の長^{ちやう}老^{ろう}たちにはなしてもらおう。まゆげにつば
でもつけて、ばかされんようにきい^きとつてや。

これみんな、ほんまにあつたはなし ばつかやでー。

ほんなら、ま^{にし}ず^い西^わ岩^{みち}道^ちからい^にこう^しかの。西^{にし}岩^い道^わの村^{むら}におすわさん
という、ばあさが^はご^さざ^つてな。このばあさ、^は畑^{たけ}へ^く草^さむ^しり^りに^いつ^た
はずなんやが、^{ひる}昼^るめしになつても^けつて^こん。夕^{ゆう}方^{がた}く^ろう^なつても



けってこん。村じゅうの人^{ひと}にたの
んでさがしにいったんやが、どこ
にもおらん。

そしたら、あくる朝^{あさ}、舟付^{ふなつけ}の東^{ひがし}
の道^{みち}を頭^{あたま}に木ノ葉^{こは}をのせて、てく
てくあるいてござったと。それか
らこのおすわさん、ちょっと頭^{あたま}が
よわくなって、いわしることがつ
じつまあわんようになってしまっ
た。

なんでも、そのおすわさん^{はなし}の話^{はなし}
によると、昼^{ひる}すぎて腹^{はら}がへってし
もうたで、家^{うち}へかえろおもうてあ

るいていたが、いつまでたつても西岩道へかえらん。こりやあ、お
かしいと思つて、ぐるぐると、村中やたんぼ道をまわっておると
日がくれてしもうた。そして、どこをどうまわったか、気がつく
おいなりさんのまえにすわっておつた。

朝になつたで、おいなりさんの案内でうちへかえつてきたんやと。
案内したのは、おいなりさんじゃのうて、村の人たちやにのう。

それから、そのばあさのことを、「きつねつきのおさわさん」と
よぶようになったんやと。もう八十年も前のはなしやで――。

大跡にもそんな話ありましてなあ。たしか作蔵さんという人やが
法事にいって、重箱のごつおうをもつてかえつてくると、ちゃん
とあぶらげだけがとられていたということですわ。

高田の終電車でおりて、いっぱいかげんで気もちようなつて、口
島のさんまいのそばをとおつてくると、そこでちゃんと休みとう

なる。石垣いしがきの上にうえにごつつおうおいて休やすんどるまに、さんまいぎつねにとられてしまうんやなあ。どんなにふろしきのむすびをかとうしておいても、うまいことぬきやがったそうやわ。きつねは、あぶらだいが大好物だいこうぶつやでのう。

飯はんノ木のきでもきいたわな。山やまの方ほうにからかさ松まつがあつて、そのきつねはひどいやつでしてな。としごろのべっぴんさんにばけるのがとくいでさ。ずいぶん、ばかされた人ひとがおったそうや。

いちばんひどい話はなしは、あの養老線ようろうせんの電車でんしゃを二度どもとめてしまったことや。終電車しゅうでんしゃは、夜中よなかの十一時じごろやが、お客きやくはほとんどなく、からっぽではしとった。からかさ松まつのあたりは、電車でんしゃをうんてんしておつても、さみしいところで、トンネルのような林はやしをつぎからつぎへとぬけだすように、はしっていく。

ある夜よ、うんてん手しゅは目めをしばいた。むこうの方ほうのレールの上うへ

に、むすめさんがしょぼんとたっていて、うごこうとせん。あわてきゆうブレーキをかけたが、そのむすめさん、うんてん手の方をむいて、にこっと笑ったんやと。色が白うて、すごいべっぴんさんやったと。うんてん手は、電車からおりて、注意してやろうとレールの上へいくと、もうだれもおらん。

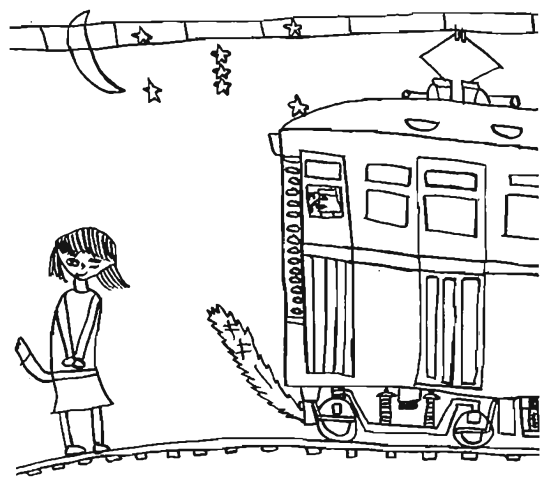
おかしなことやと、そのあたりをみたが、夜中の林がしーんとしているだけで、人っ気なんぞない。ゆめかいな。たしかにここに女がたっておったに。うんてん手はきゆうに気味がわるうなっしてしもうた。ひどい、どぎつねがいたもんじゃ。

二回目は、ちがううんてん手やが、電車の前をむすめさんがあるいてゆっくりとよこぎったんやと。やつぱし、うんてん手をみて、にこっとウィンクしたそうや。べっぴんがでたときいたのは、このあたりかなとおもったとたんのことやった。あんまり、化けむすめ

のことはつか^き気にしていたので、ひよっとしたらまぼろしかもしれん。
それでも人^{ひと}をひいてはなんので、うんてん手^{しゅ}はブレーキをかけ
てみた。どう考^{かんが}えても、きもちのわるい夜^{よる}やったと。

それにしても、走^{はし}る電車^{でんしゃ}にちようせんするとは、すごいやる気^きの
あるきつねですなあ。

いやいや、それにまけんような話^{はなし}もありますぞ。



岩道の領助じいさんが、栗笠の親類へ法事のおよばれにいつて、なかなかかえってござらん。うちの人^{ひと}が心配^{しんぱい}してさがしにいかしたら、九里半街道^{くりはんかいどう}のつつみの下^{した}のどつけつぽにはまって、「おーい、おーい」とよんでござるんやと。どつけつぽいうたら、どぶがめに下肥^{しもこえ}をためてくさらせておくところで、領助^{りょうすけ}じいさんはくそまみれというわけさ。

「どうしたんじや。こんなところにはまって、あれつ、まあまあ。」

「なになに、ええ風呂^{ふろ}じゃねえか。おめえらもかわってはいれ。」

領助^{りょうすけ}じいさんは、どぶがめ^{なか}の中で、ええ気分^{きぶん}でござる。

「うん。さつき、むすめが、ええ湯^ゆやではいつていけいうたんぞ。」

「やっぱし、九里半^{くりはん}まわしのどぎつねめのしわざにちげえねえ。うちのじいを、こんなめにあわせよつて。」

領助^{りょうすけ}じいさん。家族^{かぞく}につれられてうちへかえったが、よつぽど、

はずかしかったのか、寝間にこもってしまつて、村のものにも、よ
う顔をみせなんだと。

しかしなあ。このごろは、きつねもおらんようになったが、とん
と、きつねにばかされた話もきかん。なんで昔は、あんなにばかさ
れたんやろうのう。自分のぼけをきつねのせいにしたんかなあ。

そういや、ロケ島では、金吾という子どもがおらんようになって
村中で大さがしをしたことがあつたなあ。そのうち、だれかが、

「こりや、九里半まわしの、どぎつねにさらわれたんやないか。」

といいだした。それで村中のおとなたちがそうだんして、

「九里半まわしのおきつねさん。金吾かえされ。金吾かえされ。」

と、大声で村のまわりをさけんでまわつとつたら、そこへ、ひよつ
こり、金吾がかえつてきたと。金吾は、となり村の親の在所へあそ
びにいつておつたんや。きつねの方が、めいわくしとるわなあ。

へ^{ひろはた}広幡の一年のしあわせを^{いの}祈る　　どんどまつり

てんびつ 天筆つあん



むかしは、^{ひろはた}広幡のどの村でも、^{むら}どん・どをようやったものじゃ。

わしら^{にしいわみち}西岩道の^{はちまん}八幡さんでも、^{とりい}鳥居のまえて、^{どん・ど}どん・どをやること

にきまっておった。^{がつ}一月十四日^かで、^{しょうがつ}お正月気分も、ようやく、うす

らいだころじゃった。

^{きたかせ}北風のさむい^{ふゆ}冬の日がおおかつたな。^{がっこう}学校からかえったわしら

は、^{はちまん}すぐに八幡さんへとんでいき、^て手わけして、^{むらなか}村の中をまわった

もんじゃ。

「さぎつちよ^{だけ}竹　おたのみもうします。」

と、^{おおこえ}大声をはりあげていう。すると、まっていたというように、



「ごくろうさままで、ごぜえます。」
といいながら、竹たけや、わらや、な
わなどをだしてくれる。

こうして、小學生しょうがくせいがあつめた竹たけ
とわらで、村むらの若いしゅうが、左さ
義長ぎちやうづくりをはじめる。

まず、四本ほんのくいをうつ。ふと
いもうそう竹たけをしんにして、竹たけや
わらを、じゅんばんに、なわでし
っかりゆわえ、かさねていく。こ
うして、さしわたし五メートルに
もおよぶふとさになったとき、せ
たけも十メートルをこすような、

大きな左義長ができてあがる。

子どもたちは、正月二日にかいた書きぞめを、長い竹のさおの先につけて、ぞくぞく、左義長のまわりにあつまってくる。

大きい子たちの書くことは、きまっていた。

天筆和合楽

地福円満楽

が、ほとんどであった。えんぎのいいことばである。天も地も、なかよく平和にくらすことを、楽しみにしているというのである。

だからみんなは、この書きぞめを、「天筆つあん」と、よんでいた。なかには、もっとむつかしいことばを、書く子もいた。

少年易老学難成

一寸光阴不可輕

子どもは、すぐに年をとって、老人になってしまう。だが、学問はなかなかできない。すこしの時間も、むだにしてはならないという意味である。なかなか、有名なことばで、むかしの子どもは、こ

のことばなんぞ、みんな暗記しておぼえていたものだ。

もちろん、小さい子たちは

てんまで あがれ

と書いたり、自分のねがいをかいたりした。こういうのも、みんなまとめて、「天筆つあん」とよんでいた。

子どもたちは、この天筆つあんを大きく書いた。三メートルも、

四メートルもつないだみのがみに、くろぐろと、ふとぶと書いた。

この大きな天筆つあんを、ながーい竹のさきにつけ、左義長のま

わりにたてかける。どこのうちの子どもも、みんなもってくるので、

何十本という天筆つあんが、風にふかれているのは、なかなか、み

ごとなながめであった。

日の入りのころ、いよいよ、左義長に火をつける。青竹がパチパ

チとはぜる。ポンポンともえる音が、村じゅうになりひびく。

左義長は、天まで、どん・ど・といきおいよくもえる。だから、この左義長のことを、またの名を、「どんど」といったくらいである。おとなも、子どもも、男も女も、村じゅうがあつまって、このどんどを見あげる。ごうかな火のまつりである。

子どもたちは、われさきにと、天筆つあんをもやす。天筆つあんが、竹ざおからはなれて、ほのおにつきあげられて、天たかくまいあがつていく。

「おおっ、あがる。あがる。すげえなあ。」

おもわず、ためいきや拍手がわく。たかくあがれば、あがるほど自分のおもいや、ねがいがかなう。字もじょうずになる。みんな、そう信じていた。だから、たかくまいあがるごとに、子どもたちは大きくはやすたてる。

どん・ど・が半分いじょうもえると、また、若いしゅうのば・ん・であ

る。若いしゅうは、ことしの幸運のむいている方向を、こよみでしらべておき、もえさかっているどんどを、そちらへたおす。火の粉がとびちる。見物の村びとたちが、「ワアツ」と声をあげる。

やがて、どんどももえつきてしまう。すると、おとなも子どももこのり火にあつまって、もちをやく。家族のかずだけやく。

どんどのもちは、ひし形にきつてある。大火なので、もちはすぐに、まっくろにこげる。さらに灰がいつぱいついて、いっそうまっくろけである。このもちをたべると、ことし一年、やまいにかからないという。

どんどの芯になっていた、もえのこのりの竹を、みんながもつてかえる。これをやねの上にのせておくと、火事にならない。また、つばきの花をわらすべにとおして、この竹といっしょに、やねにあげておく。雷がおちないまじないである。なつかしいどんどであつた。

へ広幡^{ひろはた}の夜^{よる}が燃^もえる！ 夏^{なつ}の風物詩^{ふうぶつし}・虫^{むし}おくり

実盛^{さねもり}さん



むかしから、ずっとつづいてきた百姓^{ひゃくしやう}の火まつりに、「実盛^{さねもり}さん」という、おもしろいがある。大跡村^{おおあとむら}では、これを「虫^{むし}おくり」といい、ほかの村^{むら}では、「いもちおくり」というところもあった。

稲^{いね}のしるをすう虫^{むし}や、稲^{いね}のはっぱに赤^{あか}いつぶつぶのできる病氣^{びようき}をこの火^ひまつりで、おいだしてしまおうというのである。ほら、いまなら、すぐよくきくすりをまいて、虫^{むし}も病氣^{びようき}もあの世^よへおくつてしまうじやろ。あれじやな。ちよんまげの頃^{ころ}から、まいとし行^{おこな}っているが、「実盛^{さねもり}さん」という神^{かみ}さまにてつだってもらおうというわけさ。



その日は朝から六社神社へあつ
 まって、虫おくりのじゅんびをす
 る。白い紙をきつて、神さまのこ
 へいをつくる。わらをたばねて、
 蛇のような大きな虫を、三びきつ
 くる。

わらで、神さんの実盛さんと、
 馬をつくる。実盛さんは、わら人
 形に紙でつくったかみしもをきせ
 る。馬の方にも、紙でたてがみを
 つくる。

その実盛さんというのな。斎
 藤実盛というて、平安のころの強

い大将^{たいしょう}やった。けどその実盛^{さねもり}さん、戦^{たたか}いのまっさい中に、稲^{いね}につまづいてたおれ、首^{くび}をうたれてしもうた。実盛^{さねもり}さんは、そのとき、「もう虫^{むし}の方がいいわい」と、稲虫^{いねむし}にうまれかわってしまったんじゃ。それから稲^{いね}のしるをすう虫^{むし}をみると、「やや、実盛^{さねもり}さんがここにござる」ということになってしもうた。実盛^{さねもり}さんは、虫^{むし}のなかでも大将^{たいしょう}やったのかなあ。それで、実盛^{さねもり}さんにたのんで、虫^{むし}たちを村^{むら}の外^{そと}へおくりだしてもらうのかもしれない。

おかしなもんでな。これは日本中^{にっぽんじゅう}にひろがって、この虫^{むし}おくりを实盛^{さねもり}おくりというところがあるくらいじゃ。

そうそう。村^{むら}びとたちは、このほかにすぐくでっかいたいまつをつくる。ながさが五メートルもあって、数人^{すうにん}がかりでかついでいく。また、村^{むら}じゅうのすべてのうちが、一本^{いっぽん}づつのふといたいまつをつくってくる。六十けんの家^{いえ}から、六十本^{ぼん}のたいまつがあつまる。

さて、いよいよ夕方^{ゆうがた}になると、村^{むら}じゆうがぞろぞろと、六社^{ろくしゃ}神社^{じんしゃ}へあつまってくる。そして神主^{かんぬし}さんのうやうやしいのり^{のり}とで、虫^{むし}おくりのお祈^{いの}りがはじまる。お神酒^{みき}が、ゆのみじやわんに、なみなみとつがれる。この大^{おお}きな一^{いっ}ぱいが、みんなの気^き分^{ぶん}をほがらかにする。調子^{ちょうし}にのって、二はいめ、三はいめと重^{かさ}ねる人^{ひと}もあつて、行列^{ぎょうれつ}はほろよいかげんで、うごきだす。

いちばん先頭^{せんとう}にご・い・もち。そして、きようの神^{かみ}さまである実盛^{さねもり}さんと馬^{うま}。そのあとに三^{さん}びきの虫^{むし}がつづく。これらはみんな、一メートルあまりの青竹^{あおたけ}の先^{さき}につけられ、村役^{むらやく}がもつてあるく。

そのあとへ大^{おお}きなたいまつ、そして六十本^{ぼん}のたいまつがつづく。村^{むら}はずれで、たいまつに火^ひがつけられる。パチパチと炎^{ほのお}をあげ、煙^{けむり}をはきだす。つぎつぎと火^ひがつき、百^{ひゃく}メートルをこす大^{だい}行列^{ぎょうれつ}となる。あたりがぐらくなる。たいまつのは、いよいよ赤^{あか}くなり、調子^{ちょうし}

づいた村びとたちをてらしだす。虫おくりの行列は、いよいよ、ほそい田んぼのあぜに入っていく。百人ちかい人びとが、一本のあぜをとおるので。つるつるになって、まともにはあるけない。そこへお神酒がはいっているし、うたもはいってくる。たいまつのか勢もあって、みんな、ふらふらである。

たいこや半鐘が、つよく、よわく、うちならされる。

行列の人びとも、はやしながら、たいまつをふりまわす。

じぶんの田んぼのちかくでは、たいまつをとくに大きくふりまわす。火の粉でやけどをしないかと心配になるほど、火のいきおいをさかんにする。虫や病いを、しっかりおくりだしたいからであろう。たしかに、赤あかともえる炎のなかへ、稲虫の蛾がくるくるとまわってとびこんでくる。つぎつぎとさそわれて、飛んで火にいる夏の虫である。田んぼのあぜをぐるぐるまわって、二時間もすぎるところ、

ようやく火の祭典は、最高潮にたつする。

村じゅうの女や子どもたちが、どんどん田沖にくりだして、火まつりをみている。たいまつ行列も、見にきたものも、みんな村ざかの堤防の上にあつまる。ここが火まつりの最後の舞台である。

いよいよここで、たいこや半鐘にあわせて、みんなが虫おくりのおどりを身ぶり手ぶりおかしくおどくるう。そして、大きなたいまつがもえさかる中へ、それぞれ残ったたいまつをなげこむ。炎とおどりは、いつそう大きくなる。

そして最後に、実盛さんたちのわら人形やごへいを、すべて炎の中へなげいれて、この虫おくりはおわりとなる。

この虫おくりの行事は、どこの村もほとんど同じ日に行うので、養老の旅館や料理屋の座敷をかりきって、火まつりをみる人びともあったという。この夏の風物詩も、戦争をさかいに消えていった。

へ広幡^{ひろはた}を湖底^{こてい}にしずめた集中豪雨^{しゅうちゅうこうう}と伊勢湾台風^{いせわんたいふう}〈

泥海^{どろうみ}の村^{むら}



ちよつとむかし、もうかれこれ三十年^{ねん}にもなるが、広幡^{ひろはた}にとつて
わすれられた大水害^{だいすいがい}があつた。広幡^{ひろはた}いったいが、みずうみのようにな
り、まんまんと水^{みず}をたたえ、家屋^{かおく}だけがそこにういていた。

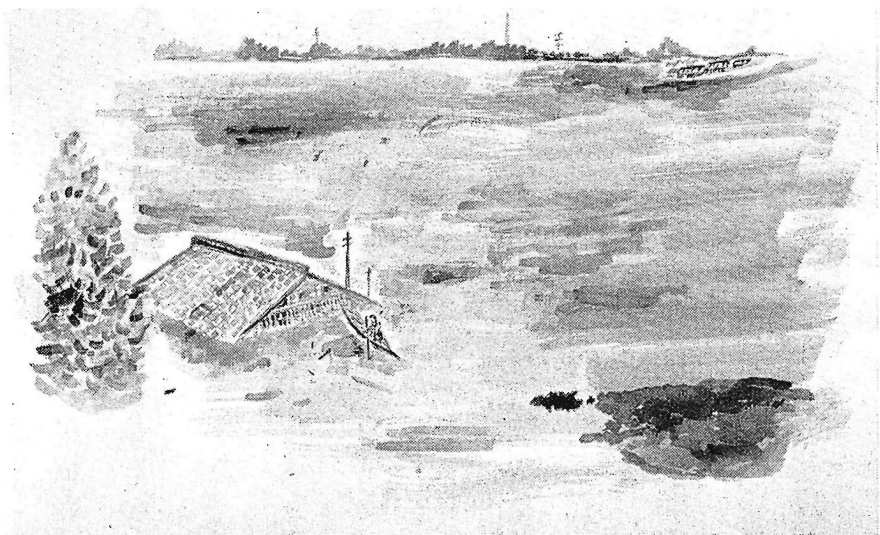
「おおい、水^{みず}がでたぞう！ みんな、飯^{はん}ノ木^{のき}へにげろ！」

どしゃぶりの雨^{あめ}の中^{なか}、人^{ひと}びとはびっくりして、村^{むら}の上手^{かみて}の金草川^{かなくさがわ}
や津屋川^{つやがわ}をみた。しかし、なんのかわりもない。

「下^{しも}からじゃ。下^{しも}から水^{みず}がおしよせてくるんじゃ。」

「ええつ。それは、どうしたことじゃ。」

「根古地^{ねこじ}がきれたんじゃ。どえらい大きな音^{おと}がして、牧田川^{まきだがわ}の堤防^{ていぼう}



が、けっかいしたんじゃ。」

「いまに、こっちへも濁流だくりゅうがおし
よせてくる。どえらいいきおい
でやってくるぞう！」

「源氏橋げんしはしへにげてくださーい。だ
れも村むらにのこらんように、はや
くしないと、きけんでーす。」

水防団すいぼうだんの人ひとびとが、てわけして
どなっている。年としよりも、女おんなも子こ
どもも、顔色かおいろをなくして、ぞろぞ
ろと、源氏橋げんしはしの方ほうへといそいでい
る。両手りょうてに衣類いらいや貴重品きちようひんのつつみ
をぶらさげたり、リヤカーに家財かざい

道具どうぐをのせたりしている。男おとこたちは、家いえの中なかをみまわって、二かいへ、できるだけのものをおしあげたり、病人びょうにんをかつぎだしたり、牛うしや馬うまをひきだしたりした。

水みずはついにおしよせてきた。ざわざわとざわめきながら、一メートルほどの波頭なみがしらをたて、あぜをこえ、田たをこえ、家いえの中なかへ。人ひとびとは、さいごの目めをくばって、道みちへにげる。もう道みちはひとつの川かわとなつてゐる。道みちを走る水みずのまえを、牛うしをぼっていく人ひとがいる。牛うしのあゆみと、ほとんど同じおなじはやさで水みずがせてゐる。

金草川かなくさがわの方ほうにも、濁流だくりゅうはあふれていた。水防団すいぼうだんが総出そうでで、堤防ていぼうをまもつてゐる。寺てらのたたみをはこびだして、ていぼうにあて、くいをうちつけて、水みずもれをふせてゐる。ていぼうは、グワグワになつて、ゆれつづけている。水防団すいぼうだんの人ひとたちの顔かおには、ゆげがあがつて、目めはちばしつていた。

あほよげの堤防ていぼうの上うへにも、土どのうをつみあげて、上かみからの水みずをこ
こでとめている。あほよげや金草川かなくさがわのつつみをくぐった水みずで、もう
広幡ひろはたの田たは、いちめんさざ波なみをうっていた。そこへ下しもからの水みずが、
どんどんせめてきて、一時間じかんほどのあいだに二十センチぐらいづつ
ふかくなる。床ゆかをこえ、ひさしにとどくほどになってきた。

昭和しやわ三十四年ねん八月がう十三日にちの夕ゆうぐれだった。台風たいふう六号ごうの豪雨ごううによつ
て根古地ねこじの堤防ていぼうが、百二十メートルにわたって切れたのである。そ
の流れながこむ濁流だくりゅうで、広幡ひろはた、笠郷かさごう、池辺いけべが水魔すいまにおそわれたのであつ
た。二千二百せんひゃくの家いえ、二千六百せんろくヘクタールの田た、一万二千まんせんにん人が被害ひがいを
うけた。十四日かあさ、明あかるくなつて、人ひとびとはひろびろとした海うみを
みてためいきをついた。生まれてはじめてみる泥海どろうみの村むらであつた。
十五日にち、その水みずはちよつとひきかけたかにみえた。しかしその朝あさ
七号台風ごうたいふうのつよい風かぜが、大きな波なみをさそい、やねまでしずんでいた

家にゆさぶりをかけた。この波でこわれたり、流れたりした家がまたふえた。

排水機も水のなかにしずんで、はたらかず、水がすっかりはけるまでには、二十九日もなかったという。ようやく堤防の仮しめきりも行なわれ、人びとは、なんとか元気をだして、自分のうちをなおしはじめた。水から顔をだした田畑は、まったくの茶褐色であった。そのときである。自然はあまりにも、きびしく非情であった。九月二十六日、夕方から夜半にかけて、風と雨がつよくなってきた。伊勢湾台風がまたも直撃したのである。せつかくできあがった仮つつみは、あつというまにおしながされ、ふたたび濁流が、多芸輪中へおどりこんだ。水はあれるるって、まえの水害でいたんだ家を、ひとたまりもなく、くずしこわしていった。

その上、瞬間の最大風速五十メートルという大強風にあおられて、

みるみるむざんな姿すがたになっていった。家は流ながされ、家財道具かさいどうぐはうばわれ、いねは全滅ぜんめつした。自衛隊じえいたいが鉄舟てつしゅうにのって出動しゅつどうし、人ひとをたすけ食糧しょくりょうをはこび、濁流だくりゅうと強風きょうふうにもまれている人ひとびとをはげました。

まことにおそろしい体験たいけんであった。この二回目かいいめの九月がつ、養老町ようろうちょうだけで千五百戸せんひゃっこがこわれ、ながされ、千八百戸せんひゃっこが水みずについた。総被害そうひがい、およそ六十億円おくえん。湖水こすいとなった水量すいりょう一億万トンおくまんといわれた。



へひろはた
廣幡が生まれかわった！
のうちかいほう
農地解放と土地改良へ

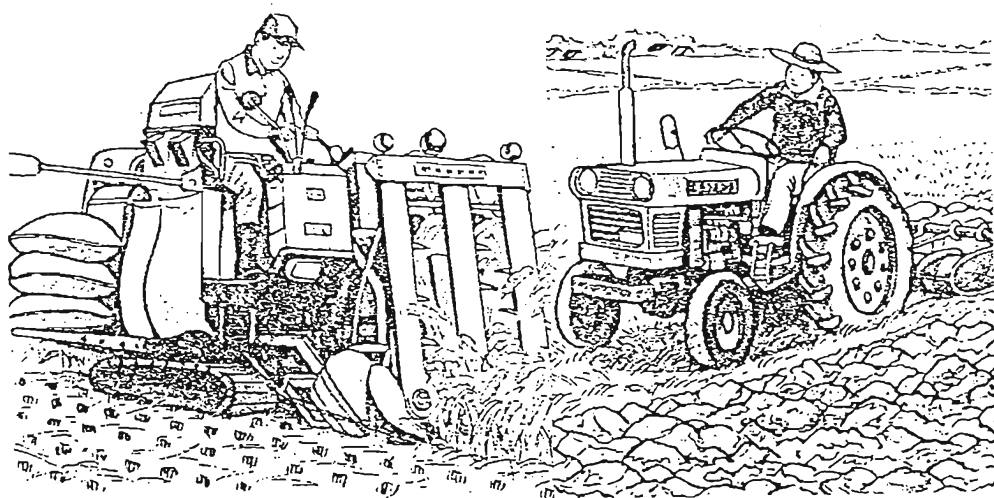
へんしん 変身！ ひろはた 廣幡

むかしからひろはたは、ひやうどこやった。そりやあ、いまもかわらん。
けどむらはかわった。うんとかわった。みちがえるほどや。

わしは、いま八十三さいじゃが、わしらの子どものころは、そり
やあ、いまからおもえば、みじめなもんやった。

いちばんのものは、すこしの地主さんがひろい土地をにぎって
て、そのほかのものはその田をかりて米をつくる小作百姓やったこ
とや。廣幡には、十町歩（約十ヘクタール）以上の土地をもっていた
大地主さんが、七けんあってな。五町歩（約五ヘクタール）以上でい





うと、十二けんもあった。

ひろはた
広幡の田んぼは、ぜんぶで二百八

ちようふ
十町歩(約二百八十ヘクタール)で

あったが、そのうちの二百五十町歩

が小作地であり、三百けんの百姓

が、それをたがやしていたんやな。

ねんぐ
年貢は、一段(約十アール)あた

り、ふつう、一石二斗(三俵、百

八十キロ)であった。米のとれ高

の、だいたい、半分であった。だ

から、百姓は、なかなか、楽には

なれなかった。

それで戦争がおわって、昭和二

十二年^{ねん}に、農地解放^{のうちかいほう}がおこなわれたとき。百姓^{ひやくしや}たちは万^{ばん}ばん歳^{さい}やった。わしらも、もう、うれしくて、うれしくて、とびはねておったよ。先祖^{せんぞ}から汗^{あせ}を流^{なが}してきた田^たや畑^{はた}が、自分^{じぶん}のものになった。もうだれにも年貢^{ねんぐ}をはらうことはない。

これで村^{むら}はかわったなあ。百姓^{ひやくしや}が生きいきとしてきて、米^{こめ}の生産^{とれだか}も、ずっとあがったもんや。働き^{はたら}がいがでてきたのよ。

そして、もうひとつ大^{おお}きくかわったのは、土地改良^{とちかいりょう}や。これで、むかしの広幡^{ひろはた}はおもいだせんほど、新^{あらた}しい農村^{のうそん}になつてしまった。

「わざわざ^{てん}を転^{てん}じて、福^{ふく}となす」ということばがある。ほんのこのいうと、あの集中豪雨^{しゆちゅうこうう}と伊勢湾台風^{いせわんたいふう}がきっかけやった。広幡^{ひろはた}の見た^みすかぎりの田^たんぼが、泥海^{どろうみ}のそこにか月^{げつ}もひたっていた。そのあれはてた姿^{すがた}を、もとの姿^{すがた}にもどすのなら、このときとばかり、おもいきつて、あたらしい農業^{のうぎよう}の土台^{どだい}をつくろうということになった。

あの大洪水は、昭和三十四年であつた。それでつぎの年に計画をたて、準備をして、三十六年から三年間かけての大しごとであつた。岩道と西岩道はちよつとおくれて、四十八年からじまつた。

一まいの田んぼが、三十八メートルと二十七メートルの長方形で、ほぼ三十アールのひろさになつた。道中も、五メートルと四メートルの二本立てで広くなつた。こうして、田うえも稲かりも、大型の機械がつかえるようになり、しごとの能率もうんとよくなつた。

田んぼに在る水は、自由に入れることができるし、田んぼに水がいなくなつたら、しっかりかわかすことができる。田んぼがよくかわくようになつたので、米づくりのほかに、ビニールハウスのイチゴづくりや、麦づくりなどもさかんになつてきた。

こうして広幡はかわつた。いま農家は二百三十八けんあるが、専業は三げんしかなく、農業中心の兼業も十六けんしかないという。

〈広幡小は新築独立！ 議会も町長も方針変更〉

請願書

十年ひとむかしという。この話は、ふたむかし前のことである。

そのころ、養老町には高田小学校を中心、東西南北に四つの学校があった。東に広幡小、西に多芸小、北に養老北小（もと沢田小）、南に養老南小（もと石畑小）である。この高田小をとりまく四つの学校は、どれも小さな学校で、六学級しかなかった。その上、どの学校も、じりじりと子どもの数がへりつつあった。

いちばん最初、口火をきいたのは、養老北小であった。昭和三十九年、ついに五学級となり、先生がひとりへらされてしまった。ひとりの先生で、二つの学年をうけもつことになり、四十五分の授業





でも二十分は自習をし、二十分は
教えてもらうという複式になった。
はじめてこういう授業をみた親
は、びっくりぎょうてん。これ
は、勉強の力がはんぶんしかつか
ないぞ。こまった。こまった。
そして、とうとう、PTAで、
ひとりの先生をやとったのである。
しかし、それはいつまでも続けね
ばならないし、ほかの学級もへっ
て、複式になりそうである。
「町長さん。なんとかしてください
いよ。これじゃたまらんです。」

町長^{ちやうちやう}さんは、頭^{あたま}をしぼった。そして、はたとひぎをたたいた。

「よし、それじゃ、こうしよう。南小^{みなみしょう}と北小^{きたしょう}をひとつにして、あたらしい養老^{やうろう}小学校^{しょうがっこう}をつくろう。どうじゃな。」

めいあん。めいあん。みんな大^{だい}さんせいで、南^{なん}北^{ぼく}まとめの委^い員^{いん}会^{かい}ができた。そしたら、また、いけんがでた。

「せっかく、南^{なん}北^{ぼく}ひとつにしても、子^こどもの数^{かず}は三百^{ひやうにん}人もいない小^{ちい}さな学^{がっこう}校^{こう}。もつと、もつと、大^{おお}きくしようよ。」

「それもそうやなあ。そんなら広^{ひろ}幡^{はた}小^{しょう}も、いっしょになつてもらおうか。高^{たか}田^{だしやう}小^{しょう}からも押^{おし}越^{こし}だけ、こつちへきてもらおうか。」

こうして広^{ひろ}幡^{はた}小^{しょう}をなくして、養^{やう}老^{ろう}小^{しょう}へはいるという案^{あん}が、広^{ひろ}幡^{はた}の人^{ひと}びとにつたわった。広^{ひろ}幡^{はた}小^{しょう}も、そのころ百^{ひやう}人^{にん}ほどの小^{ちい}さな学^{がっこう}校^{こう}だった。ひとクラス十六^{じゅうろく}人^{にん}ぐらいであつた。

「でっかいことは、いいことだ。大^{おお}きな学^{がっこう}校^{こう}へ、はいろいろよ。」

「反対、反対、大反対。そんなとおくへ、なぜいくの。」

飯ノ木を中心とするさんせい派と、岩道などの反対派が声をあげた。とうてい、まとまりそうになかった。

高田小でも、押越ちぎりに反対の声があがった。頭をひねった町長さん、いいことを考えた。

「高田小とまわりの四つの学校を、全部まとめて、でっかい学校をつくりましょう。すごく大きくて、天下一のりっぱな学校にするのです。」

養老町議会も、大さんせいで議決。五つの学校みんなが、今までの学校をなくして、あたらしい養老小学校をつくることになった。町長さんは、広い土地をかい、でっかい学校をたてるじゅんびに入っていた。でっかい教育に、夢をふくらませていた。

ところがどっこい。広幡の人びとは静かにこのことを考えた。

「ほんとうに、養老小へまとまるのが、いいのか。」

「でっかい学校は、でっかい教育ができるのか。」

「まいにち、小さな子どもを、そんなとなくまでかよわせてもか。」

「交通戦争のまっさい中、安心して子どもをだせるのか。」

「おじいさんも、おとうさんも勉強した学校がなくなってもか。」

「百年つづいた、おれたちの広幡小をつぶしていいのか。」

口ケ島、飯ノ木、大跡、岩道、西岩道の五つの地区で、なんか

も村中あつまって話しあった。大さんせいの人から、大反対の人ま

で、みんな自分のいけんをいいあった。

「自分たちがえらんだ町長さんや、町議会がきめたのだから、もう

しかたがないよ。民主主義やもん。」

「いやいや、広幡のたくさんの人びとがなっとくできんときは、そ

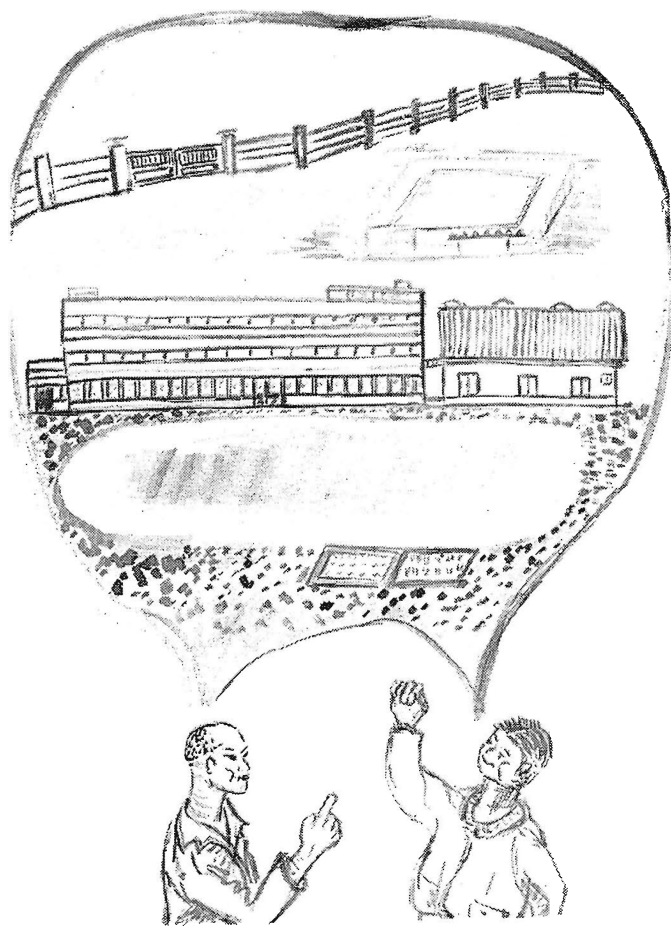
れをはっきりいって、かえてもらえるのが、ほんとの民主主義や

ねえのか。」

こういうものになる考え方も、話しあわれた。

「広幡^{ひろはた}も、学校^{がっこう}が小さいからこういうことになる。先生^{せんせい}がへらされ、設備^{せつび}もようならん。子ども^この数をふやすことや。」

「そういうたかて、わたしのようなばあさんでは、もう子ども^こももてきんしな。わけえ人^{ひと}に、がんばってもらうか。」



「そうじゃねえ。みんなして田んぼだしあって、この広幡に住宅団地の二つもつくるんや。でっかい会社もきてもらうんや。」

そういう見とおしをたてや、町長さんや議会も、決めたことをとりにけしてくださるにちげえねえ。それまで広幡の人びと、みんなが心をあわせることじゃ」

拍手がわいた。広幡小は、今までどおりつづけていこう——とい
ういけんが、だんだん大きくなった。

「そうじゃ。そうじゃ。学校をつぶすも、つづけるも百年の計画じや。おれたちや、子どもの時代はもうすんだ。これから生まれてくるまごやひまごのことを考えてやらなくちゃ。」

「そしてさあ。この明治や大正にできたつんばり学校を、まったらしのバリツとした鉄筋三階ぐらいのりっぱなものにしてもらいましょう。体育館もプールも、運動場も、よそにまけんようにして

もらったとき、はじめて、われわれの責任がはたせたことになる
んじゃないか。今がいちばん、だいじなときやで。」

広幡の人たちはあがった。でっかい学校にさんせいしていた人も
かげをひそめ、広幡小独立のいけんにまわっていった。

広幡の人びとのいけんは、『広幡小学校を新しくたててください』
という請願書になった。それには、①ふるい校舎で災害がしんぱい
なこと。②五校まとめの案にさんせいできないこと。③集団住宅や
工場をつくり児童数をふやすこと。④一日もはやく新しい校舎をた
ててほしいこと——が書かれていた。

そしてこれは、広幡地区学校問題協議会という名で、西脇正一さ
んほか八百三十二名の人びとが名をつらねて、町長と議会へだした。
昭和四十六年八月十一日、臨時町議会がひらかれ、請願書に示さ
れた広幡の人たちの熱い願いは、全面的にみとめられたのである。

へ広幡の名物になった みどり町の秋まつり

いのちの色



ほんのちよつと、むかし、――昭和四十六年三月二十六日。

みどりの田んぼのなかに、ひろい宅地が造成され、

喜びの七十七けんの家がたち、うつくしいみどり町が生まれた。

みどり、それは、いきいきした みどりのはっぱ、いのちの色。

それは、目をやすめ 心をやすませる、やすらぎの色。

それは、みんなで手をくみ 力をあわせる、平和の色。

そして十五年。子どもたちのふるさどが、そこに生まれた。



「なあ、区長さん。もうここへきたときに生まれたこの子が、高校生です。」

この子たちにとって、ここはいいふるさとなりました。」

「そうですね。わしらにとって、なつかしいふるさは、遠くにある。けど、ここで生まれ、ここで育つ子どもたちは、ここがだいじなふるさと。」

いいふるさとしてやるのはわしらのつとめ。楽しい秋まつりにしましょうや。」

その日は、町じゅうがわきたっていた。町のメインストリートや、集会所まえのおまつり広場には、万国旗がひらめき、紅白の歓迎アーチがつくられている。金魚すくいや、とうもろこしや、わたがしなどの屋台の出店もならんでいる。

すみきった秋空のもと、おとなも子どもも、ぞくぞくとあつまってくる。午前十時から、このおまつり広場で、お祝いの式がはじまるのである。氏神さまのない、新しい秋まつりの演出である。

集会所の玄関の屋根の上には、「祝、みどり町十五周年」という大きな横かんばんがあげられている。黄色のバックに、みどりの太文字である。黄金になみうつ稲穂の中に、街なみのととのったみどり町誕生のイメージが、デザインされている。

式典は、区長さんの「町民あげて、子どもたちのふるさとづくりにとりくもう」というあいさつではじまった。来賓の町長さんや議

長さんちやうも、「みどり町まち十五年ねんの町づくりの努力どりよくをたたえ、子こや孫まごにとつて、ここがすばらしいふるさとなるよう」うったえた。

養老町ようろうちやうの商工会しょうこうかいからは、大きなこもつつみの酒さかだるがおくられ、会長かいちやうさんが木きづちをふるつて、たるの上うわぶたをわる。大きな歓声かんせいがわく。たる酒ざけのかおりが、あたりいちめんひろがり、つぎつぎと櫛酒ますざけがくばられる。子こどもたちもジュースの栓せんをとつて、右手みぎてに高たかく、かかげる。小学校しょうがっこうの校長先生こうちやうせんせいが、「ふる里さと、みどり町まち、乾杯かんぱい！」と威勢いせいのいい音頭おんどをとる。秋あきまつりの幕まくがきられたのである。

集会所しゅうかいじよの中では、夜よるおそくまで、宴会えんかいがつづく。町中まちじゆうの大人おとなたちが、つぎつぎとやってきて、盃さかずきをくみかわし、語りかたあう。集会所しゅうかいじよのまえのテントには、生バンドなまが陣じんをとり、男おとこも女おんなも、自分じぶんののどに酔よっている。手づくりの子こどもみこしや、こもつつみの酒さかだるみこしが町中まちじゆうをワッショ、ワッショとねり歩あるく。まつりは最高潮さいこうちやうである。

へ^{ひろはた} 広幡に^{しんし} 新市街誕生！ 南岩道^{みないわみち}のふるさとしらべへ

ふるさとの山^{やま}

かにかくに、わがふるさとは、恋^{こい}しかり

おもいで^{やま}の山、おもいで^{かわ}の川

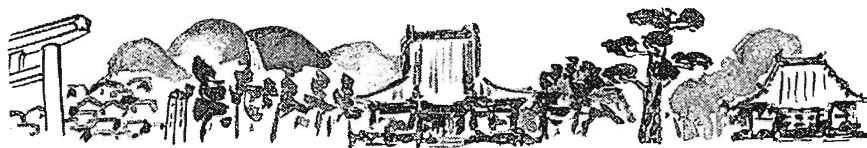
ふるさとの、山^{やま}にむかいて、いうことなし

ふるさとの山^{やま}は、ありがたきかな

この^{ぎふけん} 岐阜県養老町^{やうらうちろ} 広幡^{はた}を、永住^{えいじゆ}の地^ちとしてえらび、南岩道^{みないわみち}に^{きよ} 居を
かまえた世帯主^{せたいぬし} 夫妻^{ふさいひご} 百五十六人^{にん}の『ふるさと地図^{ちず}』。それは、ほぼ
全国^{ぜんこく}にひろがっている。そしてそこには、それぞれに、啄木^{たくぼく}の詠^よん



だ
な
つ
か
し
い
山^{やま}
や
川^{かわ}
が
あ
る。
い
と
し
い
父^{ちち}
や
母^{はは}
を
は
じ
め、
お
さ
な
い
日^ひ
の
友^{とも}
の
こ
と
な
ど、
思^{おも}
い
出^で
い
っ
ぱ
い
で
あ
る。
あ
あ、
わ
が
ふ
る
さ
と
よ。



南
北
道
世
帯
主
夫
妻
の
ふ
る
さ
と
地
図



南岩道は、ひろはたの中で、もつとも歴史のあたらしい町である。
 昭和五十二年に、この地に二戸がはじめてすまって、この町が生ま
 れた。だからまだ、その町づくりのあゆみも、十年にみたない。
 南岩道の街なみには、気品がある。静かなおちつきがある。五十
 四年に十四戸となり、五十七年に三十九戸となり、六十年には七十八
 戸となった。そして、いよいよ、うつくしいたたづまいをみせている。
 南岩道は、わかわかしい街である。ここにすまう二百八十人のうち
 もつとも多いのが二十代三十代で百二十五人、ついで十九さい以下
 の未成年者が百九人である。若さはちぎれる街である。
 南岩道は、教育熱心な街である。小学生四十人、中学生十三人を
 街ぐるみで見まもっている。区民体育祭を、町の中央体育館をかり
 きてやってったり、親子ソフト大会やキャンプや、仲よし旅行をした
 りして、地域をあげて、街づくり心づくりにとりくんでいる。

区長さんや町の人びとは、その抱負を口ぐちにいう。

「そりゃあ。なんといつても、こういう新しい寄合いの町内ですからねえ。おたがいに信頼しあえる街をつくることですわ。」

「みんなが、知りあつて、わかりあつて、すみよい町にしたいもんです。ともかく、たがいに、気らくに、声をかけあうことです。」

「隣は何をする人ぞ——と、疑心暗鬼の腹のさぐりあいにならないで、いい所へきてよかつたと、よろこびあいたいですねえ。」

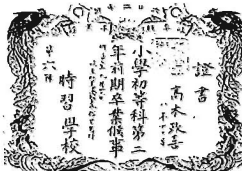
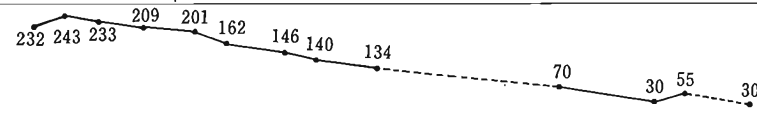
「団地の中だけでなく、すすんで広幡の人たちみんなとつきあつていきたいです。郷に入つては、郷にしたがえというでしょう。自分たちから、よそのものにならないようにねえ。」

「子や孫たちのために、ここを、すばらしいふるさとしてやりたいです。養老といい、広幡といい、本当にいい所ですよねエ。」

ここにも、「ふる里、ひろはた」の現代史をきづく人たちがいる。

広幡小百十四年史

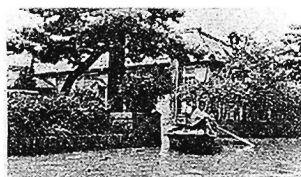
広幡のこころを育てた学校経営のあゆみ

大正のころ		明治のころ										江戸時代	時代						
70		80	90				100	110	114	130	何年前								
12 高木 貢	11 勝野 金吾	10 大久保休吾	9 児王 齊次	8 西尾 陶次	7 平野 愛二	6 中島 滋樹	5 横山又三郎	4 宮戸 慧海	3 戸倉谷三郎	2 野村 頼律	1 戸倉 竹甫	○北村 最澄	校長名						
  													スナツプ						
明44 卒業記念写真													明17 時習学校卒業証書	明9 学校跡地碑					
大													明	年					
10	7	6	2	1	42	41	39	38	37	33	31	30	25	19	17	9	5	1	
・ 寺子屋を大跡・西源寺(広幡五カ村と下笠村)にひらく。 ・ 学制がでて学校設立準備に動く。(大跡、飯ノ木、ロケ島、明德) ・ 五月一日大跡・随陽寺に時習学校をひらく。(授業料一〇六銭) ・ 五月一日岩道・常性寺に立心第二学校をひらく。 ・ 十二月時習学校の校舎をロケ島の民家へうつす。 ・ 不就学児百七十一、学校経費百四十一円うち寄付百十五円授業料四円 ・ 時習学校と立心学校が合併してロケ島学校となる。 ・ 十一月小学校令によりロケ島尋常小学校(授業料いる)と、ロケ島簡易小学校(授業料いらぬ)になる。 ・ ロケ島簡易小学校を岩道へうつす運動みのらず。 ・ 五月岩道尋常小学校(三年制)をひらく。日清戦争おこる。 ・ 八月ロケ島、飯ノ木、大跡、西岩道、岩道合併し広幡村となる。 ・ 十月岩道尋常小学校を合併して広幡尋常小学校をひらく。 ・ ロケ島の村西に、新しい校舎をたてる。 ・ 小使室をたてる。日露戦争おこる。 ・ 尋常科第四学年まで。貧しさのため不就学十二名。 ・ 職員二、学級二。校長も学級を担当している。 ・ 尋常科第五学年をおく。校舎のたてましをする。 ・ 尋常科第六学年をおく。職員六、学級六となる。 ・ 校舎たてましする。戸数三百十三戸、人口千六百十五名。 ・ 年間経費千三百九十七円。図書三百三十九円、器具千六百九十五円。 ・ 広幡尋常高等小学校となる。高等科二年おく。 ・ 村立農業補習学校(二学級)をおく。世界大戦おこる。 ・ 不就学0となる。高等科授業料一人二十五銭。													て	き	こ	と			
													就学児童数						

昭和 和 の 戦 後													昭和 和 の 戦 前					
0		10		20		30		40		50		60						
31 服部	30 野村	29 田中	28 細川	27 杉山	26 佐藤	25 森	24 渡辺	23 内田	22 酒井	21 芳田	20 高木	19 小寺	18 伊藤	17 渡辺	16 高木	15 近藤	14 土川	13 杉野
真六	利夫	誉章	務	佐一	義実	一雄	靖	静雄	不二夫	亮司	安正治	伝治	種三	勇	四郎	献太郎	政鶴	松二



昭49 鉄筋三階校舎



昭36 水害をうけた広幡小

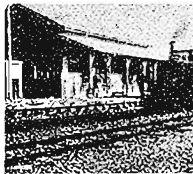
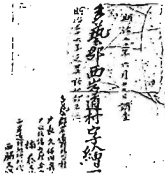


大12 広幡小全景

昭 和																				昭 和																																																														
61	60	59	55	52	50	49	48	45	40	38	36	34	33	30	29	24	22	21	20	19	18	16	12	10	4	2	1	13																																																						
・ 敗戦。奉安殿とりこわし。地震で校舎かたむく。 ・ 広幡村立広幡小学校となる。高等科なくなる。 ・ 校内放送設備とこのう。世帯数二百八十八戸、人口千五百二十名。 ・ 養老町立広幡小学校となる。教員七名、学級数六。 ・ 完全給食を実施する。男九十八名、女百十五名、計二百十三名。 ・ 年間学校経費三十三万三千七百円。PTA活動さかんになる。 ・ 集中豪雨と伊勢湾台風で大水害、物置倒れこわれる。 ・ FBC優秀賞うける。学校図書館部門優秀賞うける。 ・ 運動場ひろげる。広幡小存続新築運動ひろがる。 ・ 全教室にカラーテレビはいる。子ども銀行、大蔵大臣賞うける。 ・ 校地現在地へうつる。みどり町うまれる(児童数対策)。 ・ 鉄筋三階校舎できる。校旗・校歌できる。 ・ 体育館・プールできる。体育器具庫、物置できる。 ・ 花壇、フェンス、屋外便所できる。南岩道団地うまれる。 ・ 視聴覚室、石とさつき園できる。『子らよ輝け』刊行。 ・ 郷土誌本『ふるさと広幡』を出版、ふるさと教育をすすめる。																				・ 広幡村戸数二百八十六戸、人口千四百十六名、学務委員六名。 ・ 校舎たてましをする。普通教室三、特別教室三、宿直室。 ・ 職員七名、学級七、年間経費一万三千七百六十八円。 ・ 小一年四十三名、二年三十二名、三年三十四名、四年三十六名、五年二十六名、六年二十八名、計百九十九名。 ・ 高一年二十四名、二年二十五名、計四十九名。 ・ 奉安殿たてる。高等科に農業の教科を加える。 ・ 教室十、その他六、計十六室。日中戦争にはいる。 ・ 広幡国民学校となる。太平洋戦争に突入する。 ・ 東海地震で校舎こわれる。運動場ていもや豆をつくる。																				合計二百四十九名																																										
																				<table><tr><th>年</th><td>61</td><td>60</td><td>59</td><td>55</td><td>52</td><td>50</td><td>49</td><td>48</td><td>45</td><td>40</td><td>38</td><td>36</td><td>34</td><td>33</td><td>30</td><td>29</td><td>24</td><td>22</td><td>21</td><td>20</td><td>19</td><td>18</td><td>16</td><td>12</td><td>10</td><td>4</td><td>2</td><td>1</td><td>13</td></tr><tr><th>人口</th><td>245</td><td>230</td><td>150</td><td>124</td><td>106</td><td>112</td><td>144</td><td>224</td><td>218</td><td>204</td><td>249</td><td>207</td><td>218</td><td>237</td><td>248</td><td>235</td><td>237</td><td>221</td></tr></table>														年	61	60	59	55	52	50	49	48	45	40	38	36	34	33	30	29	24	22	21	20	19	18	16	12	10	4	2	1	13	人口	245	230	150	124	106	112	144	224	218	204	249	207	218	237	248	235	237	221
年	61	60	59	55	52	50	49	48	45	40	38	36	34	33	30	29	24	22	21	20	19	18	16	12	10	4	2	1	13																																																					
人口	245	230	150	124	106	112	144	224	218	204	249	207	218	237	248	235	237	221																																																																

ひろはた
よき
かな
まんに
広幡の喜びや悲しみを つづる 四十万日

246

養老町の未来をささえる広幡地区										広幡村今はむかしのものがたり									
現 代 ・ 昭 和										大 正 ・ 明 治									
																			
土地改良の整田碑					運動場にいうえ					養老鉄道開通					明治の耕地整理帳				
一九八六	一九七八	一九七四	一九七一	一九六一	一九五九	一九五五	一九四八	一九四七	一九四七	一九四八	一九四七	一九四七	一九四七	一九四七	一九四七	一九四七	一九四七	一九四七	一九四七
〇	八	一二	一五	二五	二七	三二	三七	三八	四一	四五	四九	五五	五八	五九	六三	六七	六九	七二	七三
・ 広幡一千年史、ふるさと広幡刊行、町制三十周年。 ・ 広幡小学校、新築存続を議会で請願受理。 ・ 広幡小学校新築。・ みどり町自治会発足。 ・ 広幡保育園新築。・ 南岩道自治会発足。 ・ 広幡一千年史、ふるさと広幡刊行、町制三十周年。										・ 時習学校（大跡）、立心学校（岩道）ひらく。 ・ 濃尾大震災おきる。・ 帝国憲法できる。 ・ 西濃大洪水おきる。・ 日清戦争（戦死一名）。 ・ 多芸郡から養老郡となる。 ・ ロケ島飯ノ木大跡、西岩道、岩道五ヶ村合併して広幡村となる。 ・ 日露戦争（戦死一名）。 ・ 広幡小学校開通（蒸気機関車）。 ・ 第一次世界大戦。・ 広幡青年団生れる。 ・ 広幡小に高等科（二年）うまれる。 ・ 広幡農業補習学校（八年）。 ・ 広幡処女会、広幡信用購買組合									
⑪ 西脇 金一										村 長 ①久保田彦三郎 ②西脇 信次 ③田中 穂積 ④田中 貞三 ⑤戸倉 愛三 ⑥近沢 進 ⑦戸倉耕治郎									
・ わらだ いこ ・ 砂だむき ・ 化けむすめ ・ 天筆つあん ・ 実盛さん										・ ふたつの学校 ・ M・八・四 ・ 美濃大洪水 ・ あばれ大蛇 ・ 八〇年まえ ・ ロケ島の口ばなし ・ 送りおおかみ ・ へっこき村長さん ・ おかま池 ・ 広幡こぼれ話 ・ 厄おとし									
S 60	S 50	S 40	S 30	S 20	S 10	S 1	T 5	M 40	M 30	M 5	年代	合 計							
473	367	275	271	299	274	282	310	313	325	356	戸数	318							
2086	1684	1413	1511	1472	1361	1406	1565	1890	1832	1691	人口	1768							



みどりの水田の中にちらばる7つの里

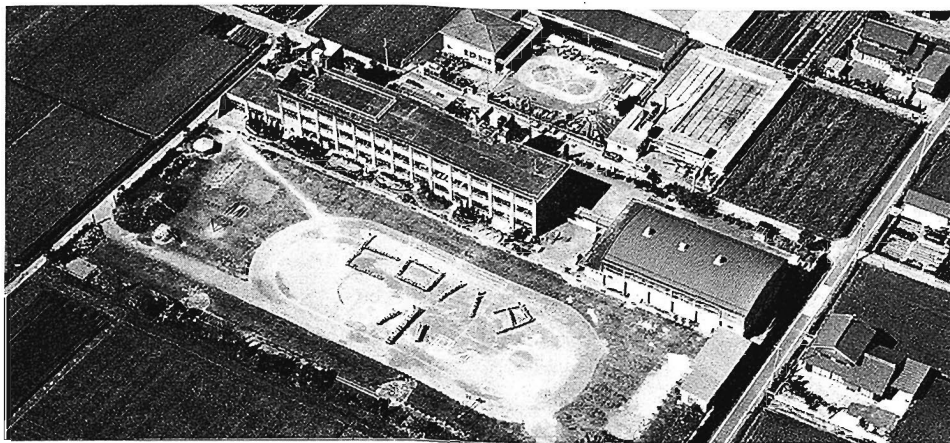
——昭和61年(1986)の広幡全写——

〔あとがき〕

ひろはた
広幡のぬくもりを味う本
あしわ ほん

かんこういんちやう
刊行委員長 田中忠男
たなかただお

むかし、むかし、そのむかし、
ずっとむかしの、そのむかしと、
年^{とし}うつり、様^{さま}かわりをしてきた
『ふるさと広幡^{ひろはた}』の、あれやこ
れやが、郷土史^{きやうどし}として、はじめ
て、立派^{りっぱ}にできあがりました。
郷土^{きやうど}の先人^{せんじん}のくらしの中^{なか}でき
ずかれたぬくもりを、味^{あじ}わって



ふるさとの息吹を育てる広幡小学校と保育園 ——昭和61年(1986)の小保全写——

もらえる本です。

広幡にとって、このうえもな

い幸いです。わたしたち広幡にゆ

かりのある者の後世までの語り

草として、将又、励ましとして

執筆してくださった先生方はも

ちろん、数おおくの地域の先輩

の方がたの協力にたいし、心か

ら厚くお礼を申しあげます。

ぜひ、数多くの人びとの愛読

をお願いし、発刊のことばとい

たします。



『ふるさと広幡』

刊行に

力をあわせた人たち

監修して下さった人

田中育次（養老町文化財審議会委員長）

励まして下さった人

小足幹雄（養老町教育長）

刊行に力をつくした人

田中忠男（刊行委員長）

吹原 文雄 香川 義昌 野村 武市 西脇 善治 大橋 勇

久保田義孝 桐山 充 細川 芳信 西脇 広夫 栗田 敏

大塚 佐七 湧井 誠逸 近藤 春吉 久保田和子 石川久美子

勝原 勝美 日比 清喜 鈴浦美也子 村上 文恵 P刊行協力委員

編集に力をつくした人

服部真六（広幡小学校長）

杉浦 智吉 黒田 利男 日比 太 川瀬貴美子 伊藤 恵子

青木 富雄 近藤 恭子 矢島 祥子 湧井美千代 日比 郁雄

牧野 広子 清水 康子 角川 和代 近藤八重子 加代 慶子



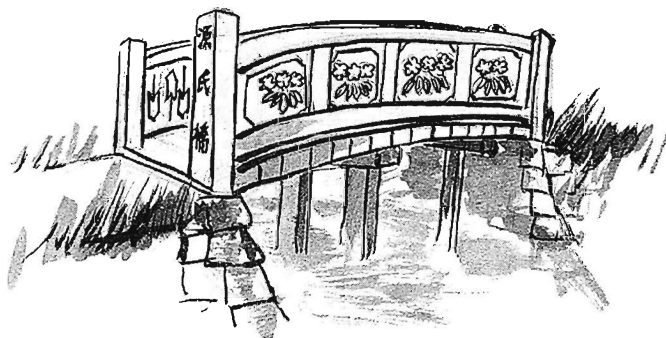
表紙・挿絵をかいた人 久保田正剛（一陽会画家）伊藤恵子（美術専攻）

伊藤 隆司	栗田ゆかり	奥田 光代	大橋 靖司	竹口 美紀
近沢 三紀	久保田昌子	伊藤 敦子	高木 直	高木 圭一
藤井 宏充	大橋美恵子	奥田 聡美	西村 昭人	
鈴浦 秀和	吹原慎二郎	西脇 俊成	高木 千尋	小野恵美子
石川 寛人	吹原 和博	近藤 広美	野村 志乃	水野 純子
木本 琴美	鬼頭千代子	日比 美穂	高木 友子	松原 亜矢
土蔵 利威	桐山 宏和	奥田 由浩	井上 昌来	細川 早苗
西中 真一	加藤 知久	宮戸 亘	栗戸 由紀	田中みちよ
伊藤 卓美	大橋 誠	奥田 貴光	桐山 智彦	鈴浦 玲子
栗田 聡	小寺 高志	佐藤 幸士	近沢 広宣	佐藤 智子
近沢 勇治	西脇 和徳	藤井 徹	水谷 国昇	小寺由紀子
伊藤 綾子	伊藤 有美	大橋 美紀	伊藤小百合	桐山あゆみ

出版に力をつくした団体

広幡区会長 広幡公民館 広幡小PTA 広幡長寿会 広幡小同窓会

ひろ はた ふるさと広幡



実費領価 1,500円

発行 1986年5月1日

編集 養老町立広幡小学校

発行 『広幡のあゆみ』刊行委員会

岐阜県養老郡養老町口ヶ島

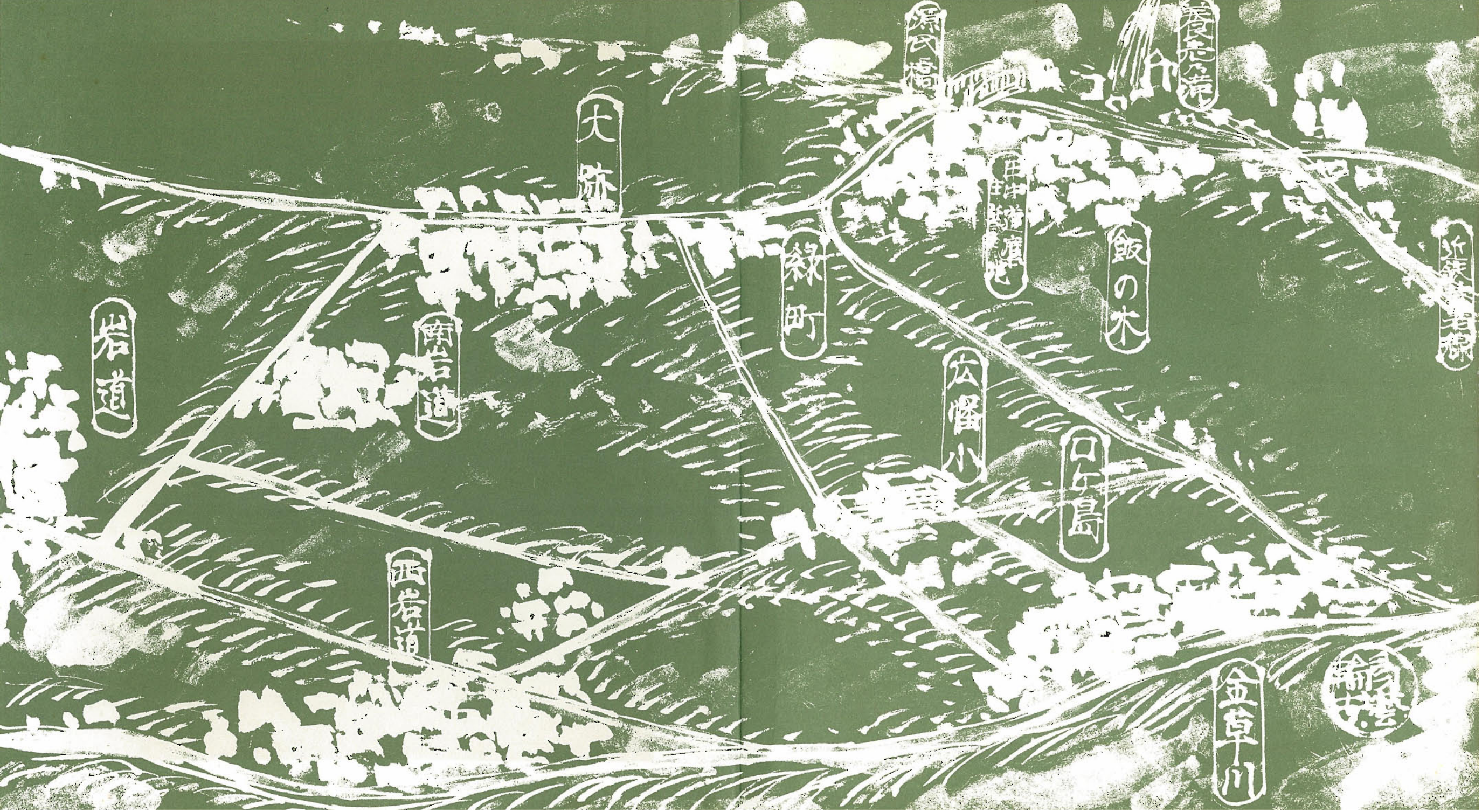
広幡小学校内刊行事務局

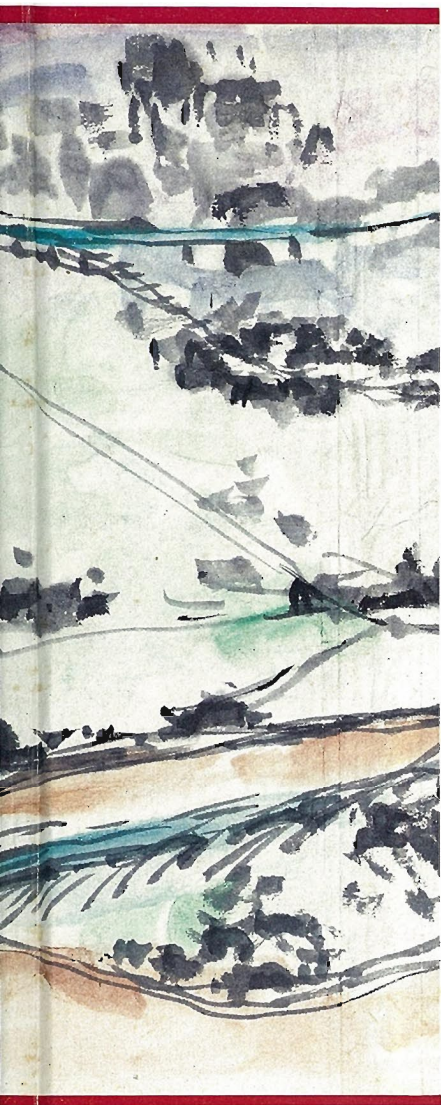
TEL (05843) 2-1620

印刷 合資会社 垂井日之出印刷

岐阜県不破郡垂井町1278-3

TEL (05842) 2-2140





広幡のあゆみ刊行委員会・発行